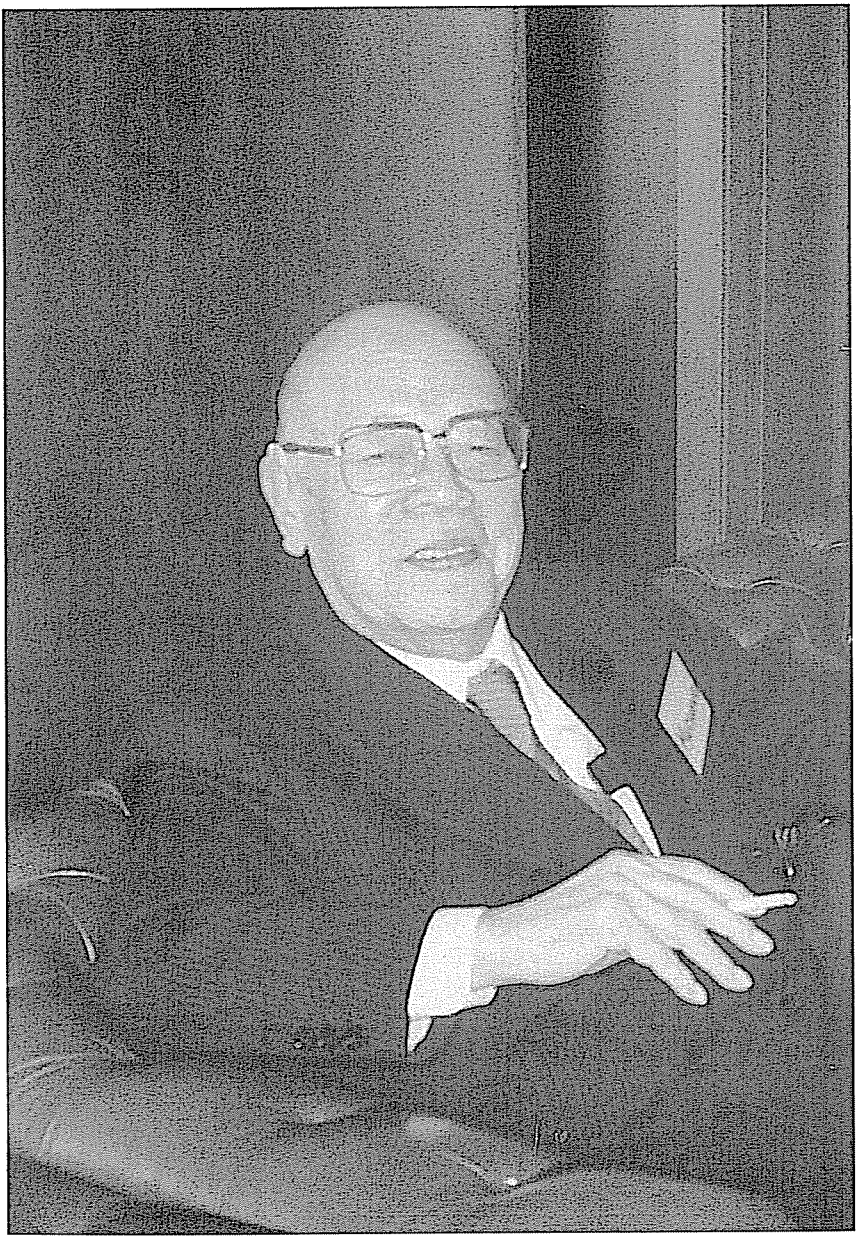
松本正雄先輩を偲ぶ

酉松会



在りし日の松本正雄先輩の温顔

献辞

われらが一ツ橋のサッカー部の創設に参加され　九十四歳の生涯をかけて　この育成に心をつくし　われらの成長発展に慈しみの眼でご指導下さいました　松本正雄大先輩。

われらは　大先輩がわれらに賜りました　慈愛に満ちた叱咤激励のお言葉を掲げ　在りし日をお偲びすると共に　ご遺志に添って母校サッカー部の永遠の発展に尽力することをお誓いして　ここに追悼文集を作成し　ご霊前に捧げます。

一九九六年　十二月

酉松会会長　村井恒典

目次

思い出の写真集

松本正雄さんの文章

一、車中感　一九五一年

二、蹴球部誕生の頃と人（蹴球団時代　川村　通　氏／サッカー創世紀　進藤　静太郎氏）　一九八七年　35

三、謝辞（米寿の年の酉松会総会）　一九九〇年　44

松本正雄さんの酉松会関係遺品の中から　29

故二階堂　晴三氏の文章　51

故松浦　巌氏の文章　56

酉松会会員 追悼文

松本さんを偲ぶ　角田　昇　63

松本さんの思い出　村井恒典　67

想い出　後藤虎雄　69

「松本さん」を偲んで　金井雄吾　73

やさしく頼りになる小父様　吉田敬子　75

一ッ橋サッカー部の先達　折下　章　77

一橋のサッカーに思う（故）瀬藤俊雄　81

松本大先輩を偲ぶ　土屋五郎　85

松本先輩への御礼　青木育郎　88

松本先輩の想い出　鷲埜和夫　91

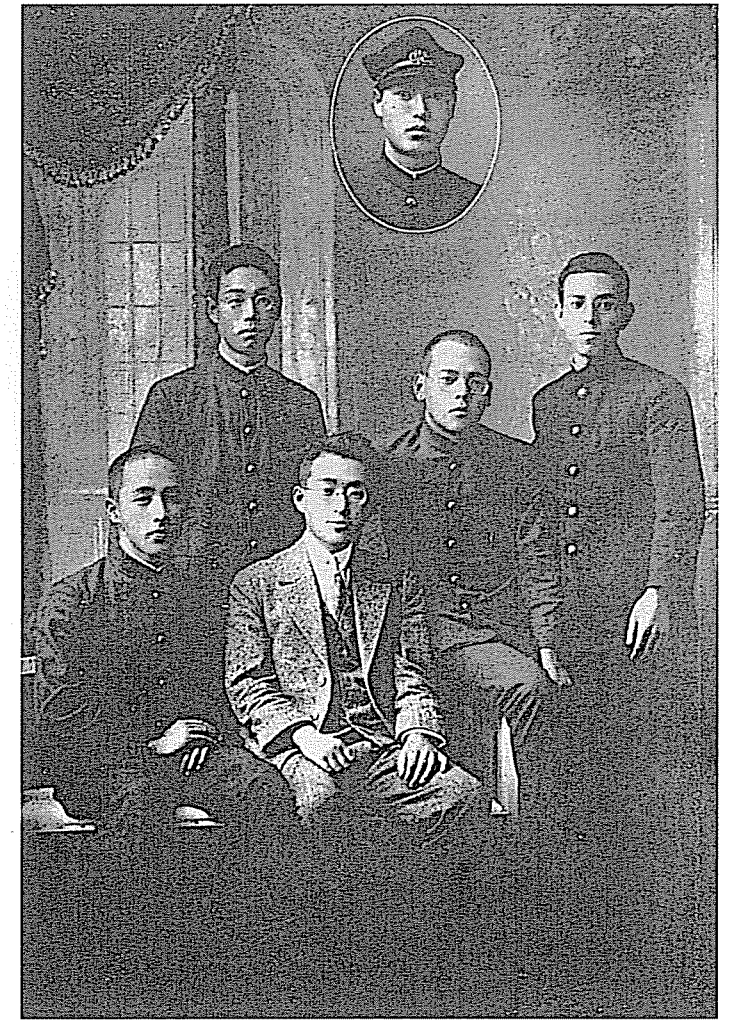
一枚の写真　奥村一郎　93

故松本先生を偲んで　加藤　省　97

松本大先輩を偲びながら　小島　壽　101
松本正雄先輩を偲びつつ、サッカーと我が人生を省みて　神代祥男　103
忘れ得ぬ三つの場面（シーン）　田中豊二　109
松本正雄先輩の想い出　宮田幸三　112
松本さんと酉松会　高田勝巳　114
松本先輩を偲んで　志摩憲一　117
酉松会の新年会　嶋田英司　120
《あすなろう》の心　中路　信　125
酉松会と松本大先輩と大震災　佐竹明和　133
松本正雄先輩の想い出　駒井　康　139
松本先輩の思い出　今村秋夫　143
『恭倹持己』　日巻久匂男　146
酉松会　七十年の顔　大野章雄　150
恩師　―　長銀との出会い　―　石井暢生　153
サッカーとのかかわり　野上桂一　157
追　想　石綿浩之　163
骨太の人　森岡義久　165
わがサッカー部時代を顧みて　池田　致　168
松本先輩の思い出　―伯父上野喜左衛門の事―　永山在紀　173
《松弁》さんについて　寺西重郎　177
三人の「松さん」　相良保彦　180
松本正雄先輩の想い出とサッカー生活　栗又俊二　185
松本大先輩と三十年前の部生活の思い出　高峯文世　188
松本先生に叱られて　木村武志　192
御葬儀のお手伝いをして　徳重泰治　196

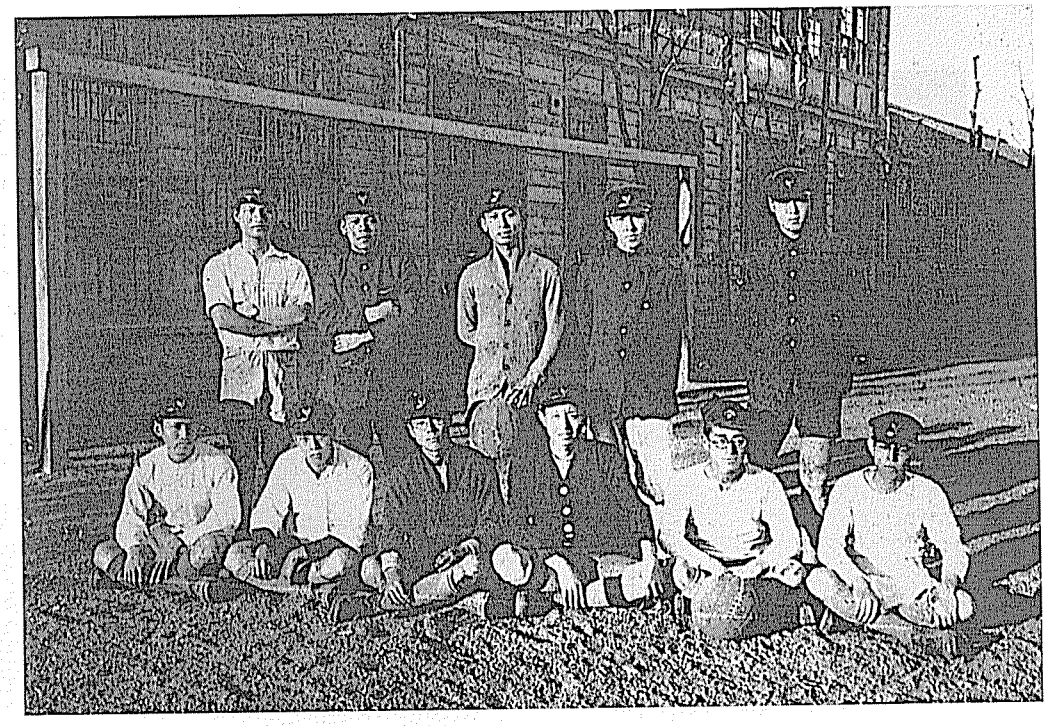
特別寄稿
御遺族と丸の内総合法律事務所から
一周忌にあたって　松本たま　201
伯父の思い出　渡部英一郎　203
光る巌　石綿学　208
追悼文　丸の内総合法律事務所　畠山保雄　212
座談会
『松本先輩の酉松会関係遺品を囲んで　故人を偲ぶ』　217
松本正雄先輩の『年譜』　245

思い出の写真集



蹴球部創設六人男

左から進藤静太郎　明石毅　兵藤世平治　松本正雄　川村通の諸氏
円内　高橋朝次郎氏



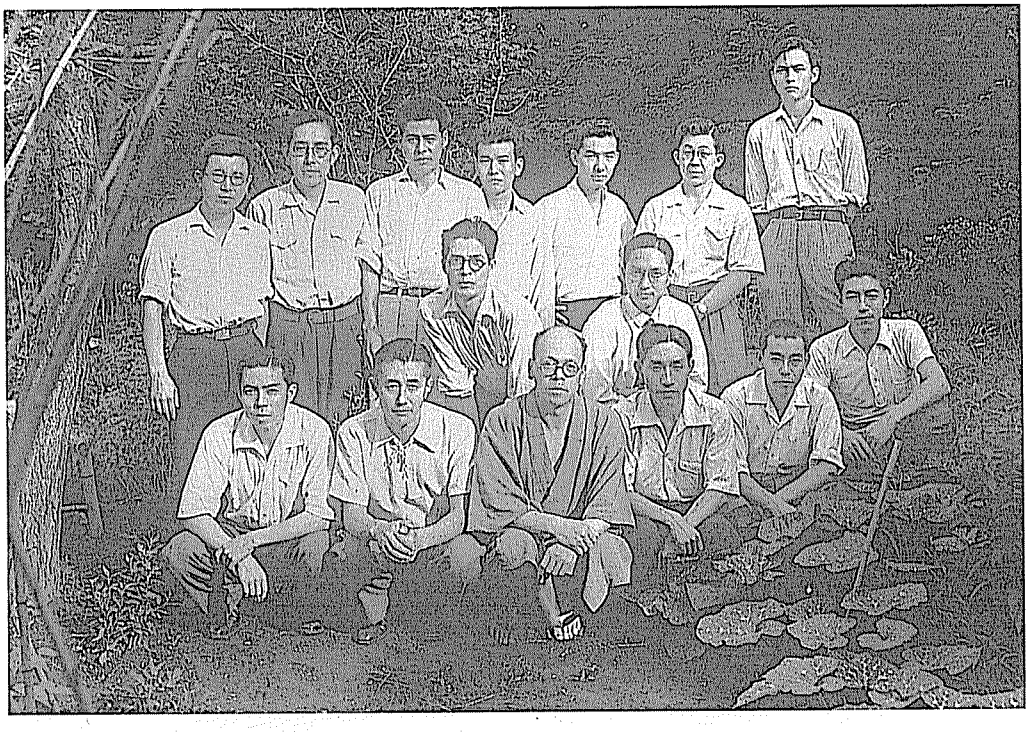
於 東京高師

蹴球団第一回対外試合後

後列左から二番目が松本正雄先輩（大正十年、於東京高師　対戦相手は早稲田高等学院で０－０）
部誌「蹴球」創刊号（昭和9年）より

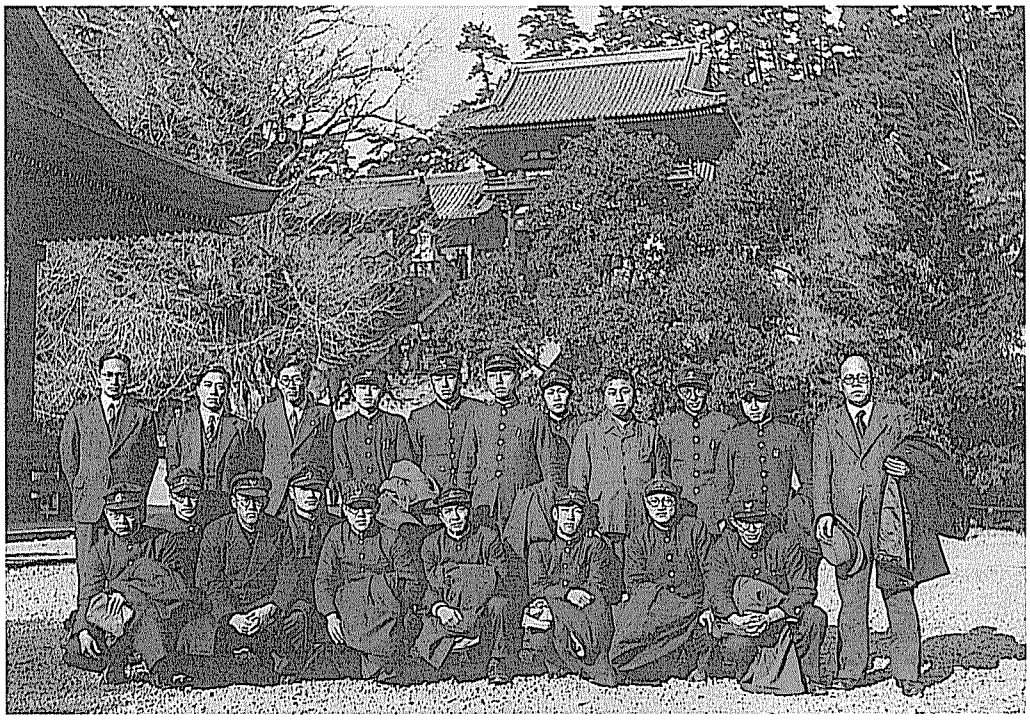
祝勝会の盛況

関東大学リーグ第一部昇格記念　昭和九年秋
中列左から４番目が松本正雄先輩



松本邸での酉松会の後で

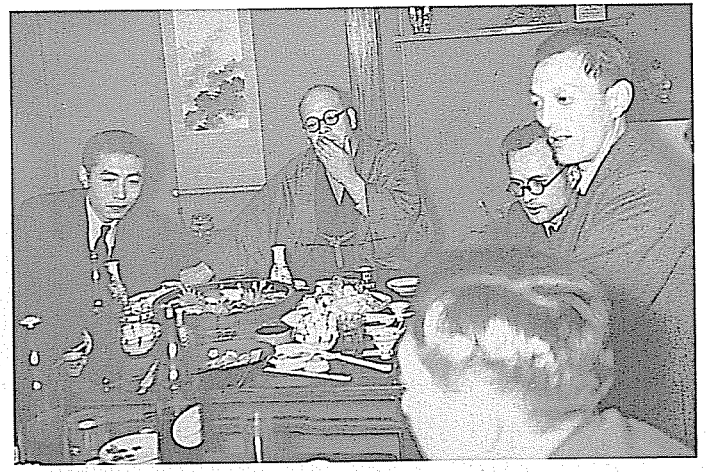
松本先輩を囲む酉松会幹事と本科、予科蹴球部幹部部員（昭和15年　夏）

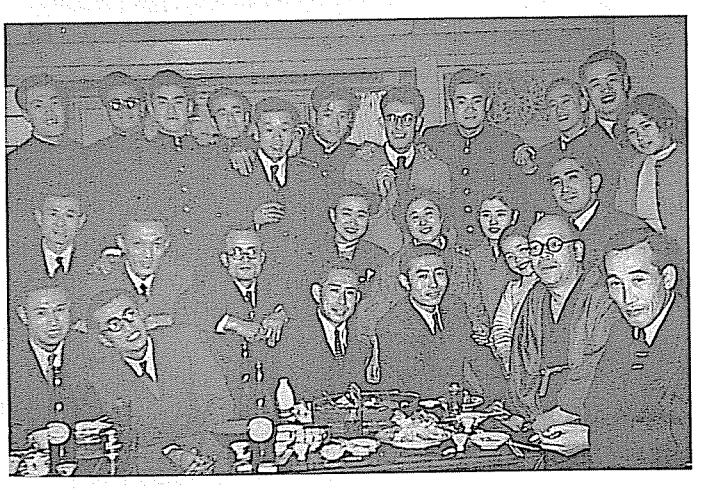


酉松会員出征諸先輩の武運長久祈願

松本正雄先輩を先頭に鎌倉鶴岡八幡宮へ（昭和18年1月31日）

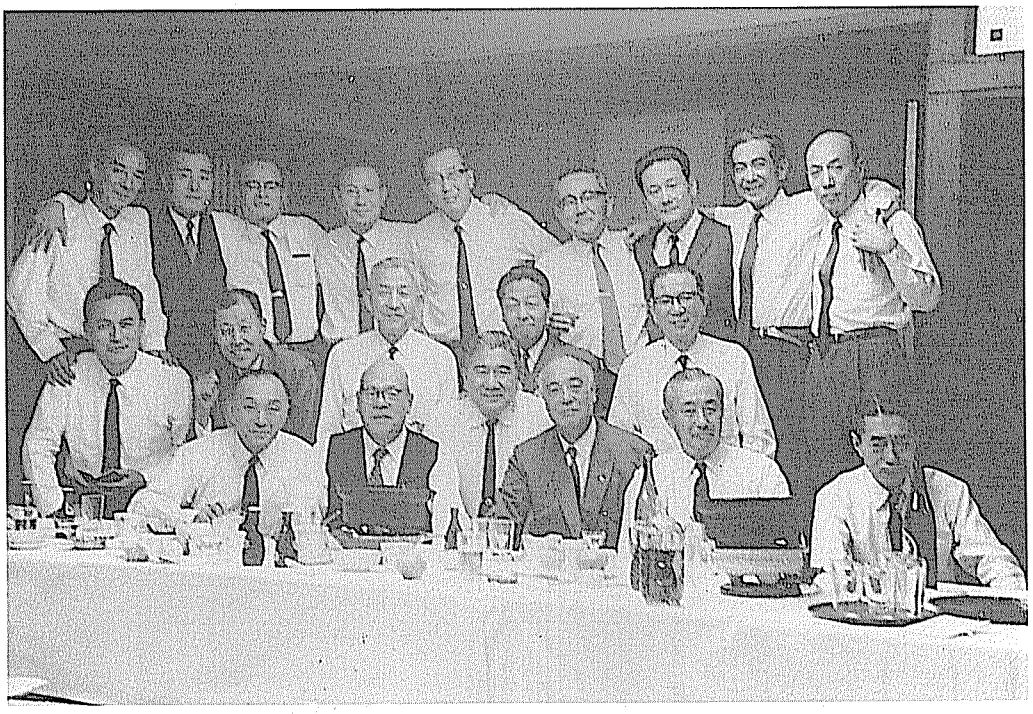
最高裁判所　判事就任
酉松会　祝賀会　（昭和四十二年）





毎年恒例の新年会

毎年１月15日サッカー部のＯＢ戦が行われるが、戦前・戦後の長年に亘って、ＯＢ戦終了後に松本正雄邸に於て酉松会新年会が行われた。
（写真は昭和28年の新年会の時のものである）



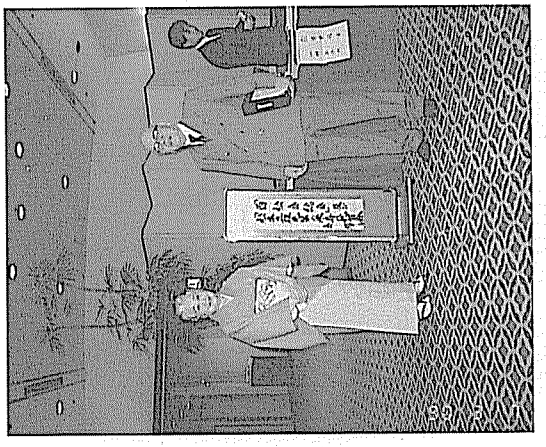
酉松会シニア会

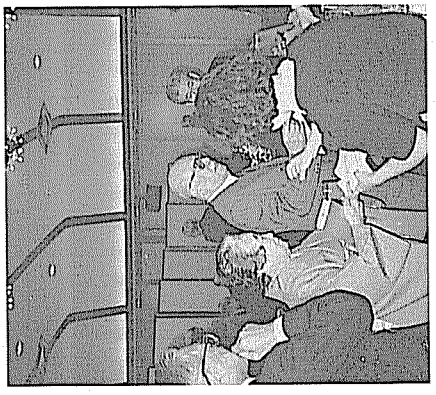
一橋蹴球部創設者の松本正雄、高橋朝次郎の両大先輩を囲んだ戦前ＯＢの猛者連中

（昭和45年11月4日）於　旧 如水会館日本間

酉松会のゴルフ会

於　川崎国際カントリークラブ





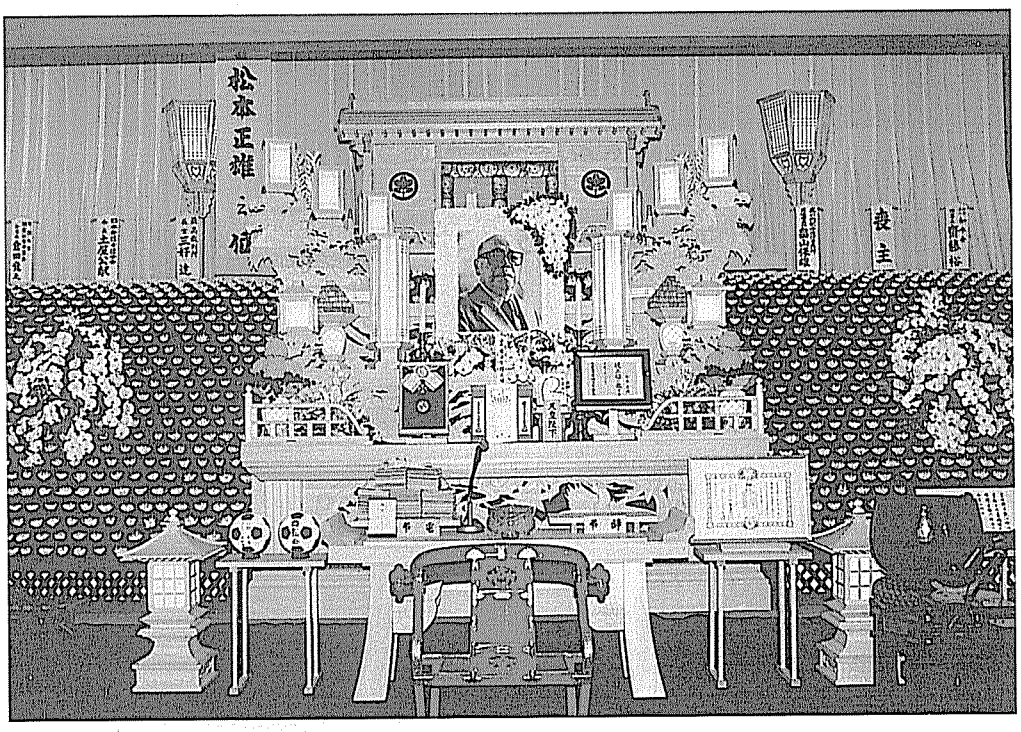
酉松会総会

松本正雄先輩の米寿を祝う会を兼ねた平成二年の総会

酉松会シニア会

九十二歳の松本正雄先輩御夫妻のお招きによるシニア会

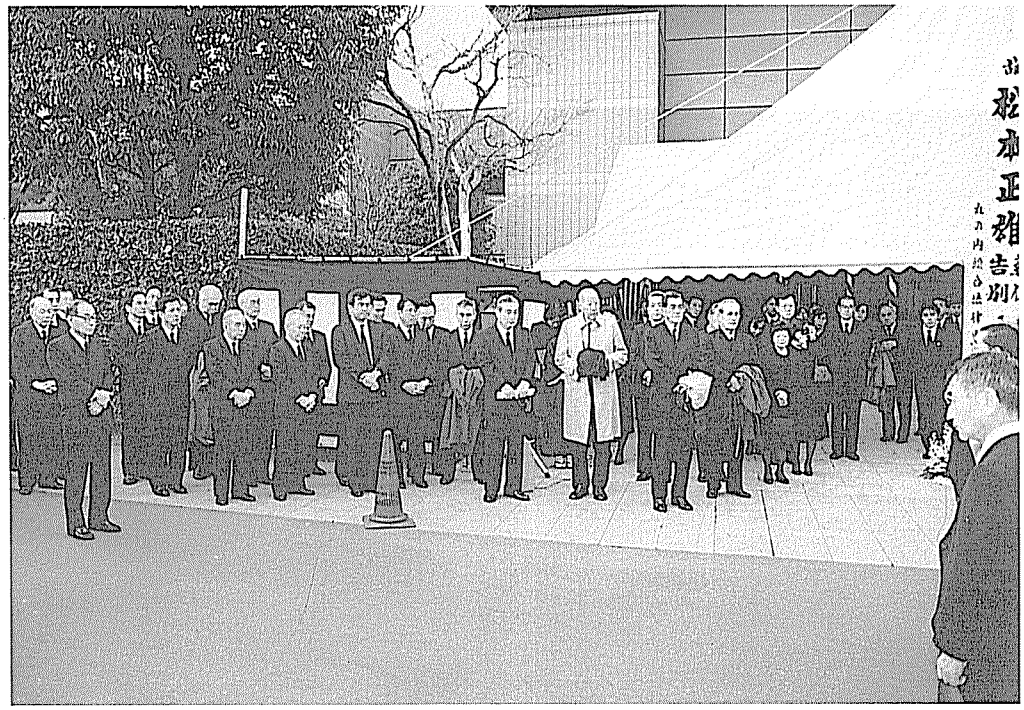
平成６年３月７日　於 如水会館



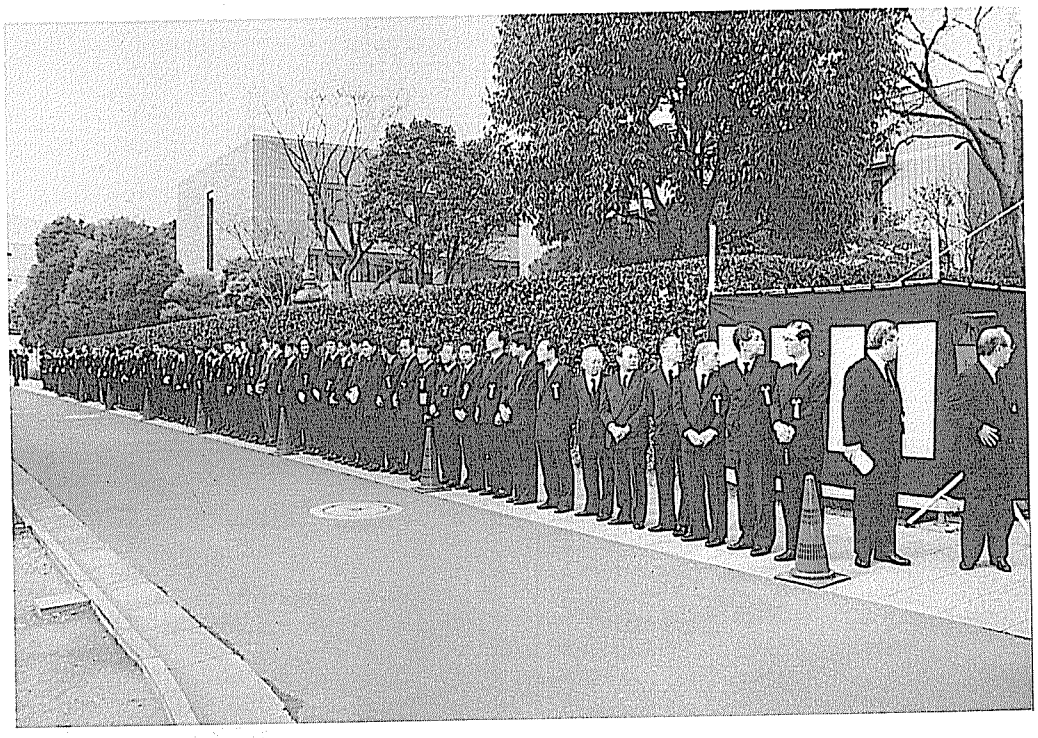
護国寺桂昌殿に於ける葬儀

祭　壇

平成八年一月十七日



御霊を見送る酉松会員とサッカー部員



御霊を見送る酉松会員とサッカー部員

松本正雄さんの文章

「部誌《蹴球》復刊第一号　一九五一年八月　より」

車中感

松本正雄

七月二十九日、東京駅で燕号に乗り込んだ。割合に空いている。この二月に健康を少し害したので久し振りの旅行である。ホームで買った月刊読賣や改造を読み散らしている間に丹那トンネルに入った。早い、まだ一時間そこそこである。暫くうとうとして、退屈しのぎに食堂へ行ったら、ある印刷会社の重役をしている親しいK君に会ったので四方山話に思わず時を過ごした。友人は追放が解けたので何となく朗らかであった。これから再び自由に活動できると喜んでいた。もともと呑気な男だが追放ということはやはり重荷であったようだ。

K君と別れて再び独りで窓外を眺めていた。浜松も過ぎた。浜松は私にとっては特に印象が深い土地である。戦争が始まる迄の十年間というものは夢中になって参禅に通った奥山のある所だ。紫山老師は大分の萬殊寺に隠居せられているが遥か方廣寺に合掌した。独りで旅をしていると過去が走馬燈のように浮かんでくる。方廣寺といえば、大掛君を連れてきたことがある。

同君の病床を見舞いたいと思いつつも、いまだ果たせずにいるが幸いに快方に向かわれつつあるようで引続き良いのであろう。病床で、「泥佛　水に溺れず」を想い出して欲しい。またとなくよい時機である。

列車は濃尾平野の真っ只中を驀進している。青田の稲は素人眼にも伸びている。今年も豊年だろう。ふと瀬藤君から頼まれていた酉松会の部誌への寄稿のことを思いだした。昨日迄の約束をしたのであったが雑務に追われて過ぎてしまった。申訳ない。ぼんやりせずに何か書こう、と思ってペンをとったのがこのたどたどしい列車内での散文である。

汽車の旅は終戦後六年を経てすっかり昔に戻った。この燕号の如きは戦前以上のサービスである。交通機関は大体復興したといってもよい。

母校蹴球部の姿は如何であろうか。最近漸く復興への軌道に乗りかけたやに感ぜられるがまだ遠し遠しである。白雲万里とでも言いたい所である。

併し、これは在学生を責めただけでは無理である。壱年間の部の予算等が八千円ではボール一個二千円として四個しか買えない。先輩、後輩の精神的なつながりも戦争以来大分薄らいでいる。ここらで物心両面から酉松会として極力後援せねば部の復興も遅れるばかりではないかと憂える。部には伝統ができた。この伝統の力こそ現在の部を持ちこたえて行く唯一の原動力

だと考える。伝統の力によって部が立ち直ったときには新しい力がぐんぐん出てくる。踏みにじられた花園の雑草を追い、肥料を与え、陽あたりをよくしてやってこそ芽がでてくる。芽がでて花木が自然に伸びだすまでは外の力が必要である。少なくとも立ち直りが早い。酉松会としては蹴球部に対し右のような意味においての力を与えることが必要とされている時期である。

顧みれば蹴球部は歴史の浅い部と考えていたが既に創立以来三十年になる。創立当時の大功労者、キリンの高橋（朝次郎）も近年頭髪とみに白きを加え、斗酒なお辞しなかった私が酒をやめるようになったのだから、いつまでも気持は青春であり、思想に進歩はないのかも知れないが、《わが身世にふる眺めせしまに》いつしか歳月は流れたのである。

部にも盛衰があり消長があったが、早野、吉澤、金井、清水、吉田、荒川、堀尾等が大学三年当時（注、昭和十五年）が黄金時代であったといえるであろう。あのとき東大、早大を破り天下の覇権をタイム・アップ間際に阻まれたのは寔に遺恨なり、《十年一剣を磨く》の感がした。勿論、この時代を培った大掛、村井、鈴木（彰）、浅田、重見、林田、後藤、岩崎、小西、二階堂、米山、池尾、菅瀬、狩森、等、更に溯っては角田、森田、浅枝、荒井君等の努力と熱情は部史に不滅の功績を残すものである。戦歿せられた荒井、小西、米山等の姿は特に大きく浮かんでくる。

当時、覇権の長蛇こそ逸すれ、一橋蹴球部の基礎は確立した。物質的には宿縁と言おうか昔から恵まれない部ではあったが、精神的には心の豊かな学生スポーツらしい部ができ上がりかかった。惜しい哉、戦争でこれが凡て打ち砕かれてしまった。

打ち砕かれるどころか、部が廃止されるかどうかの瀬戸際まできた。当時、米を食えず、芋をかじりながら、今日は先輩の遺骨を迎え、明日は自らの応召を待ちつつある部員に対して、蹴球部員として全身全霊を部生活に打ち込めと口に言いつつ私どもは心で泣いた。とうとう終戦の前年頃は最悪の事態に立至った。たしか加藤（兄）、高柳などの諸君だったと思うが、西荻窪の拙宅へやってきて蹴球部を廃止せざるを得ない旨を申出てこられた。私は即座に「廃められるものなら廃めて見よ、不心得者は退き下がれ！」と大喝一声したことを覚えている。怒鳴られた方々も今でもよく印象に残っていることと思う。私としてもあのときほど大きな声をしたことは余りない。

私も当時の部員の窮状はよく察していたが思わず大声を立てたのである。しかし今日考えてみるとあの大声は戦地に行っていた者の声であった。「松本さん、あとのことは頼みます」と部の後事を托され「よし引受けた」と大部分の西松会員を戦地に送った私であった。弾丸雨飛の戦地からの音信がまた蹴球部を愛する純情なほとばしりのみであった。

祖国に捧げた一身は、明日の命も全く計り知れないのに「一橋蹴球部健やかなれ」と念ずる気持を伝えてくれた。神野や荒井や茂木等はおそらく蹴球部万歳を唱えつつ護国の鬼と化されたことであろう。如何に部の経済生活が苦しいからといっても、戦時体制とスポーツとの議論を聞かされても、私としては首を切られても「蹴球部を廃止するのもやむを得ない」など男として言えないことであった。

かくして蹴球部最大の危機であった戦時中もどうやら学生と一緒になってもちこたえてきたのであったが、西松会員の同志が一人復員し、二人帰ってくるようになって私の気持はその度毎に何やらホットするのであった。「もう私達でやりますから」と大掛君や二階堂（晴）君が帰還してから言ってくれたときほど嬉しいことはなかった。

社会思想は戦後一変した。講和後にもまたどう変わるか判ったものではない。併し変わらないものは《人の情》であり、変えられないものは《男と男の約束》である。

蹴球部も齢正に三十歳となった。幾度か試練を経た部である。伝統は力強く存続している。ここで適切な指導と適当な後援をすることによって早く元の軌道に戻したい。そして走り出したら更に新しい道を開拓して新しい発展をすることであろう。これが吾々の務めであり、楽しみでもある。次代の青年を育成することが私ども人生の唯一・最大の義務である。私どもは

この責任を盡くすことによって一橋蹴球部を熱愛して後事を托された酉松会員の英霊に報いたいと思う。

思いのままに書き綴っていたら、《京都》という車掌の声がする。四時十五分過ぎであり、東京から七時間余である。今夜は京都に一泊するので急いでペンをおいた。

（一九五一年　七月二十九日）

《注》　戦後教育の酉松会員のために新仮名遣いにしてあります。

《昭和六十二年度　一橋大学サッカー部　部誌　OB寄稿より》

蹴球部誕生の頃と人

松本正雄

先日、部員の学生から、「久しぶりに部誌を発行するから、何か書いてくれ」との依頼があった。そこで蹴球部が誕生した頃の昔話でも話そうかとアレコレ考えていたが、ふと想い出したものがある。

それは、一九三四年発行の部誌『蹴球』の創刊号に故川村通君が書いた「蹴球團時代」の記事である。それを、そのままここに採用させて頂くことにする。（文末の注記1参照）　私が駄文を草するより文筆の才に秀でていた川村君の名文の方が遥かによいからである。どうか熟読玩味して頂きたい。いわゆる大正デモクラシー時代のリベラルな時代の風潮も偲ばれると思う。

もう半世紀以上も昔のことだが、私にとっては青春時代の最も懐かしい想い出である。

川村君が綴ったこの名文が載っているので、私はこの雑誌を五十年以上も大切に保存していた。どうか、部においては百年後の時代まで伝えて欲しい。私が生き永らえて中継ぎ役になれ

たことは無上の幸せだと感じている。

大正時代には、サッカーは殆ど、どこの大学でもやっていなかった。やっていたのは、東京高等師範学校（戦後の教育大学・現在の筑波大学の前身）ぐらいであった。したがって、一橋においても最初は部として公認されず有志が「蹴球団」として発足させたのである。団員の主な者は、川村君の記事にある通り、故兵藤世平治・故川村通・故高橋朝次郎・明石毅・松本正雄（筆者）であった。其の他は中国・台湾・朝鮮（韓国及び北朝鮮）等からの留学生であった。

次に後世のために、故人について若干記しておこう。

兵藤さんは東京商大の前身である東京高商に大正五年に入学せられたが、三、四年続けて落第せられた。昔の県立岐阜中学（現・高校）を首席で卒業せられた秀才であったが気ままな方で、簿記等がきらいで勉強しなかった。簿記の試験のときに、眠っていたら、ほんとうに眠りこけて、目が覚めたら誰も教室にいなかったという逸話もある。卒業に際して普通の会社では採用してくれないので、朝日新聞の入社試験を受けたら見事に難関を突破して合格、社会部の記者になった。

本社から大阪支局に転任され、魚が水を得たように縦横に活躍をされたが惜しいことに早世された。最近、兵藤さんの姉上が肖像画を持参して元蹴球部長寺西教授を訪ねられたそうだ。

部室に大切に保存して欲しい。

川村通君は私が同級生中で最も尊敬している親友だった。卒業論文は「哲学」に関する立派なものだった。卒業に際しては本人は不良少年・少女の救済・育成を一生の仕事と観念して東京府（現在の東京都）の少年係を志望して、そこで数年勤務された。これは父上の影響を受けたものだった。御尊父は川村理助さんといって東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学の前身）の教授や奈良女高師の校長を勤められ茗渓会（旧東京高師の同窓会）の重鎮であった。晩年は東京の田園調布に高等女学校（現在どうなっているかは知らない）を設立せられ、毎月「精進」という精神教育の雑誌を発行しておられた有名な方である。

その父上の仕事を、川村君は継ぐべく、東京府を辞め同校の先生となり、前記「精進」の発行にも関係された。その先生振りは真の教育者の模範で、担当学級生徒の各家庭を全部訪問して一人一人について親切に指導した。学校では率先して雑巾がけまでやり、本当の教育者であった。同時に識見も高邁で学殖深く社会事業家でもあった。当節の日教組の先生とは、それこそ雲泥の差どころではない。若し現在まで健在であったら偉大な思想家として、また教育者として、異彩を放った輝かしい存在であったに違いない。何としても惜しい人物であった。終戦後、まもなく他界された。しかし、未亡人は現在元気で水戸におられる。

高橋朝次郎君はボート部のキャプテンとして一橋が隅田で全日本インターカレッジで二、三度全国制覇を成し遂げた頃のボートマンとして鳴らした。冬になってボートがシーズンオフになると全精力をサッカーに注ぎ込んだ。このようなスポーツマンが体操の授業（軍事教練）の出席日数が足りないという理由で、卒業が私より一年おくれたのは皮肉なことである。昭和二年に卒業して直ちにキリンビールに入社し、社長・会長にまで栄進した。私とは実業界と法曹界と社会活動の舞台は違ったが、故大平総理の後援のこと、その他何事でも手を携えて一緒にやった間柄であったのにやはり幽明境を異にしたのは淋しい限りである。逝去される前の晩も築地で一緒に飲んでいた。尚、御長男（注記2参照）もやはりサッカー部の委員長をやられた。親子二代にわたって蹴球部に尽くされたことは特筆すべきことである。川村君じゃないが、「蹴球」関係の昔の人の話になると「回想の糸」は果てしないが、頁数が増えるからここらで筆を擱く。

（筆者八十六歳の時）

【注記】

1. 松本さんが引用された川村さんの名文「蹴球團時代」は《一橋大学ア式蹴球部60年史》の29－32ページに全文収録されております。また、この年史62ページには川村さんの「酉松会縁起」の由緒ある文章も収録されており、これを併せて見て頂きたいので、ここでは部誌「蹴球」創刊号の面影を示す二頁のみとし全文の記載は省略します。
2. 高橋敬蔵氏。昭和二十八年卒、平成八年三月十五日の酉松会総会にお元気に出席された翌日、心臓病のため急逝されました。

（編集者）

凩や

今から四十年程前、純朴な新人弁護士が初めての《弁護料》を頂くことになった。ドキドキして、その心構えについて松本先生にお聞きした。松本先生曰く「《こがらしや　風が持ち来る　落葉かな》の心境でいることだよ」と。この禅問答の結末や如何に。

球禅一如

鎌倉円覚寺の禅僧で、あるキッカケから五十歳にして弓道を志され、境内に弓道場を建て八十歳の今日まで《弓禅一如》の修行を続けられているお方がおられる。今にして思うと、松本さんが我々に期待していたものは、小平での《球禅一如》の会得ではなかったろうか。

蹴球團時代

故兵藤先輩を中心として

川村　通

先日部の田島君が見えて今度我が部誌の創刊を企てたに就いて、是非古顔と云ふ所で何か書いてほしいとの御依頼があつた。其の時正直の處僕は一種云ふべからざる感慨を催したのである。蓋し僕が一學生で而も此の蹴球部の一員として、あちこち飛び廻つて居つたのは左程遠い過去に屬するものと判然意識して居なかつたのである。併し云はれて見れば確に一昔前の事であつた。そしていつの間にか、當時の懐しい仲間とも離れ離れと成つて、あの頃には思ひも寄らぬ生活圏内に斯うして住み着いて居るのである。ハテ愚痴めいて聞えては今日様に相済まぬ。兎に角商大と、更に廣く申さば商業學だの經濟學だのとは大分御縁の遠い昨今の僕の生活の中へも不思義に響いて來ては、心のカンどころに觸れるのが、我が蹴球部の事なのである。蹴球の事と云ふと、妙に是非も善惡も度外に置いて『かた』を持ちたくなる。そして只懐しいのである。新しい部員諸君には未だ一度もお目にかゝる機を得ない。だからせめて此の拙文を通じてなりと、お近づきになら う。そんな考へで、部の生れ出た頃の事共少し許り書き綴る事にした。田島君の御注文は部の史的記述のそれであるかも知れないが、どうも横着なたちで沿革の、歴史のと開き直る段に成ると矢張肩が凝る。それで隨感隨想でボツ〳〵と記憶の糸を辿り始める。

あの頃、さう、僕等が一ツ橋の學校に入つたのは大正九年だつた。歐洲戰後の好景氣が峠を越しては居たものの、まだほとぼりのさめやらぬ時分とて、昇格したての商大は大變な人氣であつた。入學して一年間は何も分らず、無我無中でキヤプテンオヴインダストリーの夢を見て暮したが、其の翌春

二年に成つて氣も落ちつくと、何か自分の營みらしいものが欲しくなる。此の時分であつた。猫額大の校庭に体操教官から借用の古びた籠球用ボールを、一人で蹴つて遊ぶ一壯漢を見出したのは、而も打ち見れば。彼氏聊か年輩の高商生である。註に曰く、當時未だ舊高商が殘存してゐた。陽春四月の陽を浴びて萬年シャツにパンツ一つ。ドタ靴踏み鳴らして鞠を蹴る。而して誰に見しよとて、蹴るでもない。孤りに甘んじて獨を樂しみ、天地間我と鞠在るのみと云はん許りの自適の狀心憎き限りと見た。食堂の壁に蹴あてし鞠は、轉じて以て學生集會所の窓を襲ひ、鞠を受け鞠を追ひ、縱横無盡の大活躍だ。破れた帽子をぬげば短く刈つたヅク入頭、ロイド眼鏡の奥に人なつこい眼が笑ふ。是が我が兵藤先輩であつた。何とはなしに惹きつけられて話したのが緣の端、忽ち僕も此の清貧孤獨にして而も鞍馬山は義經の一人劍術的蹴鞠（敢て後年の蹴球と分つ）の仲間入をした。同クラスの明石毅君（現在大阪瓦斯に居る）も一緒であつた。さあ、之が妙に面白い。いや蹴るの何の、朝は始業前から蹴る。鑒休勿論蹴る。放課後は最も蹴る。日沒に至つて纔に止む。日曜日にも登校して終日蹴つた。從つて仲間も日增しにふゑた。そして何時となく氏を呼ぶに『親方』なる名稱を以てする樣になつた。其の頃一味に加はつた乾分連の顏ぶれを二三紹介しよう。トモさん事、廣島一中出の高橋朝次郎君は、いつも頬に淡く血ののぼつた如何にも純眞なる少年と云ふ顏だちだつた。只むやみに背が高くて竹馬にでも乘つてゐるやうな感じがしたものである。但し其の蹴つとばす馬力に至つては、眞に凄じいものがあつた。我がマーチャン事松本正雄君の如きは、勿論今日の如く禿げては居らん。恰も神宮外苑繪畫館前の芝生の如く美しき三分刈の頭を振り立て、、ゆで蛸の如く常に赤面しつゝ蹴つたものである。一級上の進藤靜太郎君はエスペランチストであつた。だから、足のさばきも國際的で、傍に見てゐた一生曰く『あの男日本人か、いやに蹴りやがるな。支那人だらう』と云ふ位。一休此の頃は支那人の留學生が多かつた。支那人は由來足わざが巧である。從つて彼等は、僕等の不器用にして亂暴なる蹴飛ばしを見るに見兼ねたのであらう。續々と現れ來つて、其の『玉なぶり』の妙を示し始めたものである。

其の年の六月頃であつたらうか。大分仲間も出來たから此際一チーム作つて、何處かと一試合しようぢやないかと、親

サッカー創世紀

進藤靜太郎氏（大正十四年卒）談。

私は神戸生まれで御影師範付屬小学校から神戸一中に入ったが、四年の時、東京の成蹊中学に転校した。これは平生釟三郎さんの息子さんの御学友といった関係で一緒に成蹊に行ったのだ。ここから大正八年に東京高商に入った。翌九年に一橋は、商大に昇格して予科と専門部の一期生が入学して来て、大正十年に、高商の先輩「兵藤世平治」さんが《蹴球団》を作るというので、サッカーの経験者ということで勧誘され、予科二年の松本君、川村君、明石君、とボートと掛け持ちの高橋君もこれに参加して練習を始めた。そのうち試合もやろうということになった。

松本君はイガ栗頭で、年より若く見えたので《マァちゃん》と呼ばれゴールキーパーをやっていた。明石君はボール蹴りに熱心で校舎の羽目板に穴を明けた位だったがFWをやっても点を取ったことが無かった。広島一中から来た高橋《トモさん》や台湾出身の林さんの他に中国人留学生などのサッカー経験者も若干は居て、球さばきは巧妙だが、チームとしての纏まりが無くてサッパリ点が取れなかった。アストラクラブや東京蹴球団は別格として、各大学チームは、皆出来たばかりで、水準がひくかったから何とかやっていたようなものだ。

（九六年十月　大阪にて）

《平成二年三月七日　酉松会総会御挨拶より》

謝　辞

松本正雄

私のために茲に米寿の祝いをしていただくことになったのは、まことに感謝に堪えません。ありがとう存じます。もともと私は各方面からこのようなお祝いを催すことについてお話しがありましたが、すべて固辞しておりました。この酉松会からもそのようなお話しがありましたがそれもお断りしておりましたところ、年一回の酉松会総会のついでに催すのだという瀬藤副会長の強いお言葉に、止むを得ずお受けした次第です。しかも家内も同伴せよとのお話しに、家内もはじめのうちは遠慮し、また最近家内も年のせいで眼をはじめ体の調子が良くなく出席をしぶっておりましたが、皆さん、殊に戦前、戦時中、終戦当時の諸君には殊にお馴染みの深い方々が多いので一生の想い出に出席をさしていただこうと喜んで出席するようになった次第です。

私も見かけは元気そうに見えるそうですが、元気なのは気力だけです。実は耳が非常に遠くなり、眼も白内障が益々進行しており、体中良いところとてなく悪いところだらけです。やはり年というものは争えず、頭も大分ボケて記憶力も著しく減退しました。酉松会の会合で、こうして原稿をもってお話したことは古い方々は御承知ですが今迄にはなく、今日が初めてであります。

それで今年の年賀状には、米寿になったことだし、法曹界で活動してから満六十年になるから、ここで法曹界の第一線から引退する決意をしたと通知しましたところ、一線は退いても、二線も、三線もあるから引退などとんでもないと激励の手紙がたくさん舞い込みました。

また実際上、家に引きこもっていても退屈ですし、家庭のことは昔から何もしませんでしたからいわゆる世間でいうゴミで、ゴミも粗大ゴミですから始末におえないようです。

そんなことから、やはり毎日、法律事務所へ出勤することにしております。出勤しても以前に比べて暇ですから、どうかお遊びにお出で下さい。十一時から三時まではたいていおります。但し地方へ遊びに行くこともありますから、予めお電話下さい。

さて酉松会のことですが、昔は会員も少なく全く家族的な会でしたが、今や会員は三百名をはるかに超す大きな会に発展致しました。しかし戦前、戦中派が少なくなって、戦後派が圧倒的に多数のようです。したがって時代思想も大きく変わり戦前や戦時中のものの考え方は戦後

の若い連中には通用しないのは当然だと思います。例えば戦争中、何人かの学生や西松会員が西荻窪の私の自宅の玄関に軍服姿で、颯爽と現れて「これから戦地へ行きます。お別れに参りました。死んで帰ってきます。サッカー部のことよろしくお願いします。」と言って直ぐ帰ってしまうのです。「どこへ行くの?」と聞いても「それは先輩にも言えません」と。あとは何も言わずに行ってしまった人々が何人かいました。

そうかと思うと昭和二十年の敗戦のころは、数名の現役のサッカー部員が家に押しかけてきて「蹴るボールもなし、食にもありつけないし、どうにもやってゆけないからサッカー部を解散しようと思います」と了解を求めてきたことがある。私は「それは相ならん」「戦地に行っている君等の先輩が、露営の夢にさえ、サッカー部のことが浮かんできた。どうかよろしくお願いします。命がけの戦地からでさえこのような便りを寄越してきているのに解散など出来るか。石にかじりついてでもやれ。」と叱り励ましたこともありました。

幾波乱を経た、七十年の歴史があるサッカー部です。

現在は現在なりに、サッカー部員は苦労しているようですが、外の二流、三流の大学のサッカー部とは訳が違う。一橋のサッカー部には長い勝れた伝統があります。この伝統のうちに生まれたサッカー・スピリットというものがある。サッカー・スピリットとは何か。言葉では言

い表せませんが、何物かがある筈です。

言葉では言い表せませんが、人を見れば判る。例えば先日亡くなった二階堂晴三君の如きが代表的なサッカー・スピリットを体得していた人物です。正義感と負けじ魂に徹底し義理・人情を心得た人物でした。また、兼松江商の社長をやっていた故松浦巌君の如きも代表的人物です。この会合にもおられるが、生きている人については言いません。

星移り、人変わり、時代は大きく変化しても一橋のサッカー・スピリットは続いているはずです。

どうか一橋のサッカー・スピリットを益々高揚し、現役も、ＯＢの西松会員もが、お互いに切磋琢磨して（古い言葉ですが、）功を他日に揚げ、以て社会のために尽くすようにせられたい。

西松会の益々の発展を祈ってお礼の言葉といたします。

以上。

松本正雄さんの酉松会関係遺品の中から

酒友

宮崎一雄さんが、第一等であった。休日に遊びに来て二人で二升空けることも珍しくなかった。外出することもあり、松本さんを誘いに来て、宮崎さんが奥さんに言うには「松本君は顔も悪いし、金も無いから、大丈夫だから」だと。

一、故二階堂晴三さん（昭和十五年卒）の文章

《昭和二十六年八月　部誌「蹴球」復刊第一号より》

巻頭言

立ち上がる砂埃の中に見失うようなボールを追って、汗が目に滲むのも忘れた夏合宿の想出、勝っては肩を組んで泣き、敗れては涙を拭い合うたリーグ戦試合の了ったひとときの追想、これら一切の我を忘れて只一途にグランドに融け合ったわれわれの回想こそは、われわれの永遠の親和の源である。

境遇を異にし、たとえ時勢の変遷の幾多に遭おうとも、この追憶を失わない限り、われわれの集いは常に清く明るく、それはわれわれに恵まれた真実の誇りなのである。

洵に伸びんと欲するわれわれの生命は日々に新しく、今や、この美しい親和をより具体的に形成しないではおかないであろう。「蹴球」の復刊はこの意味においても重要性を担うものである。

復刊のことば

二階堂　晴三

長瀬東作さんが蹴球部復興の基盤を作って昭和九年に卒業され、当時興隆の一途にあった蹴球部は、その年早速部誌「蹴球」を創刊したのである。

その後、号数は年を追って重なったが、戦争という惨禍がなければ部誌「蹴球」は固より何もかもよくなって行っておったことは、今更誰もが異論はあるまい。けれども戦争によって休刊となったこの部誌に、会員相集まれば必ずそれを口にして、何らかの形を与えてその一日も早き復刊を希うた訳である。

然し、戦後の復興途上にあるわれわれの社会生活は決して安易なものではなかった。生活することそれ自身が、殆ど他を顧みさせない程に、困憊のどん底にあったと言えよう。然し、われわれは戦後のともすれば陥り易い消極性の殻から今こそ脱け出して、「蹴球」復刊の機会を決然と創り出そうとしたのである。そうした意見に従って、こゝに復刊の第一号を会員諸兄に御届けする次第である。

われわれは先ず何よりもお互いの親睦をもっともっと強化しなければならない。

破壊と混乱の極から立ち上がったわが国の再建と復興を真に達成させる為には、何事を問わず、何物にも捉われないで、われわれの真の協力が要請されるところである。われわれ会員は夫々銘々の境遇を異にするところ著しく、その公的私的の関係はいろいろに相違することは固より十分承知のことではあるが、蹴球部によって培われた精神によって結ばれた絆は、何ものによっても断ち得ない強靭なものである。蓋し、西松会という集いは、利害を超越した、それは美しい精神的な不文律によって出来上がった集まりなのである。

偶々お互いに会うわれわれの見つめる目には、目を以って語りあえ、又微笑むものに微笑みが美しい無言の会話をなさせるのも、その根底にわれわれの学生生活の全てを形成したあの蹴球部生活が、われわれの血となり肉となっているからである。

我々は今日会員相互の親睦をもっともっと強化しよう。そうしてわれわれの身近かな生活をより美しくすると共に、わが国の再建と復興にも出来る限り寄与しよう。これがわれわれの正直な叫びなのである。

われわれはこの度西松会を、広く考えて学生をも含むものとした。そして先輩と学生と

の一体的関係を更に強化することにした。学生現況については別項の記事の通りであるが、酉松会の故里は改めて言うまでもなく母校蹴球部である。母校蹴球部の充実こそは酉松会の又大きい目標の一つである。学生諸君は近来、学制改革その他の一段落に伴って、概ね軌道に乗って部の整備に当たっているこの秋（とき）こそ、その順調なる成果にわれわれは万雷の応援を惜しむものではない。この意味に於ても「蹴球」の復刊その他の事は、大いに寄与するところがあると、われわれは均しく痛感するものである。

さて、酉松会の具体的活動とは何であるか。

その一つは、われわれの親睦を強化するために先ず、毎年、春（六月頃）秋（十一月頃）定期的に総会を開くことに決めたことである。この期日要領等は幹事より在京、地方を問わず会員諸兄に御知らせする。

その二は、この「蹴球」を定期的に毎年八月頃に発行することとした。発行に当たっての、会員諸兄への連絡は幹事に於て御通知するから、次号からは御意見等大いに御寄せ下さるよう茲に御願いする次第である。

その三は、学生との交流であるが、練習試合その他技術指導については幹事において計画の

上適宜御知らせすることにしたので、会員諸兄の積極性にこの際大いに期待する次第である。尚、会自体の試合計画等も幹事に御一任を願うことにしたから併せて御了承願いたい。

さて、又以上のことを実施に移し、而も円滑な運営を期するためには、酉松会の財政的基盤を速やかに確立しなければならない。そしてこれは最も緊急を要し、又会員諸兄の絶大なる御賛同によらなければ、真の成果は期待し得ないのである。この企画については別項を御参照願って諸兄の心からの御支援をお願いする次第である。　（一九五一年八月）

『注記』

この文章は《幹事》の名称で記載されており、二階堂さんの署名は無い。しかし、この時の幹事長は、二階堂晴三氏であり、同氏の蹴球部・酉松会に対する考え方が明白に、かつ率直に表現されており、同氏の文章とすることにご異存をお持ちの方はないと思う。なお因に、この時の他の幹事は、瀬藤俊雄氏と松浦巌氏であり、御三方ともお亡くなりになられてしまったが、一橋蹴球部精神の体現者と申し上げることもご異存ないと思う。

（編集者）

二、故 松浦巌さん（昭和二十二年卒）の文章（書信）

前略

早速御懇篤な御手紙有難うございました。先日も二階堂先輩の許に伺ひ種々お話しを承り御高配に預かりましたが、先輩の方々の御厚情には唯々感激何とかして御期待に添ひ得ん事念ずるのみです。

今の時代に運動等全く恵まれた人間のやる事だとか、或はどうせ今の數年は充実した精神的な高さのある部活動は出来ないのならやめておいた方が良くはないかとか、種々の批評はありうると思ひます。吾々は決して恵まれた者でもなく、又昔通りの充実した部生活が直ちにやってゆけるとも思って居りません。

或者は登校に片道三時間餘もかかり或は家の買出し掛りで一週間に一度は田舎に擔ぎにゆくといったのが今の状態です。

併乍ら昔の部の感激と喜びを知った者は、たとへ飯は食はずとも球を蹴るといへば出て来ます。殊に今の学校生活は昔の如く全然ゆとりがなく、唯追ひ廻された生活だけで若い学生にとっては全く味気のないものと考へます。尠くも学校とはこんな物でないのだ。学生時代とは人

間がもっと純に大きく伸びる時代だという一つの生活の場を築く野望をも持っています。

実際今の学生に、全然知らないものに、運動部に入れといっても全く受け入れません。又今やっている者を以ってしても、激しい練習とそれを通じて部員の心の接触・成長といった充実した生活が出来るとはいへませんが、集まってくる者は全く蹴球が好きだという原始的な文句のない所を通して、何かを求めているものを感じます。

兎に角、今の時代を、どう変わるかとか、條件は良いとか悪いとか考へていては始まらず、何よりも先づ自分から動いて、そこで出来るだけの事をやろうと考へているのみです。　現在の予定は、九月に入ってから初め早稲田と合同で陸大跡のグランドで練習を始める予定（学校が始まりましたら国立の学部のフィールドでやります）。リーグ戦は具体的な事は未だ決定してをりません。全国大会（神宮大会の如きもの）があるのでその後十一月頃になるかもしれぬとの事です。又、此の後民間普及に努めるさうで民間チームも大発達するものと思はれますが、酉松会として加盟届出されては如何と存じます故、協会より貰って参りましたもの一通同封致します。

七日の会は是非出席させて頂きたいと思ひましたが、姉の家の問題で致し方なく明朝下関に参ります。どうか、松本さん始め先輩の皆様に宜敷申上げて下さい。早野さんもお帰りにならー

れた由、是非お目にかゝりたいものです。七月末、帰途神戸で中学の用事を済ませ八月初には帰宅の予定でございます。帰京の上は何時か是非お話しを承りに参りたいと思ひます。

此度は誠に不本意の事乍ら失礼御許し下さい。

先は御礼御挨拶迄。

草々。

七月四日　晩

松　浦　　巌

鈴　木　英　二　様

【注記】

本書信には年度が記載されていないが、昭和二十一年のことと推定出来る。軍隊から復員され、母校サッカー部の主将に就いた松浦さんが、七月七日の酉松会の会合に呼ばれたのに対し、不本意ながら出席出来ず、幹事役の鈴木先輩（昭和十六年卒）に切々たる心情を述べられたものが松本さんに届けられ、松本さんが文筥に大切に保存しておいたものである。

終戦後の日本が最も困難なあの時期に、母校蹴球部の復興を願い、更には、日本サッカー界の発展、それを通して日本の復興に身を挺して活動された先輩の姿を彷彿とさせる文章である。

（編集者）

勇将の下に弱卒なし

学生の方も猛者が揃っていた。松本邸の酒を飲み尽くして、深夜に酒屋を「電報、々々」と起こして酒を買って来た。酒屋のおかみさんが後日、「実家の母が患っていたので、それかとビックリしましたよ」と奥さんに話したそうだ。

失　言

最初の外遊の時、ロンドンの吉田富彦氏宅へ寄った。当時のロンドンは、日本の食材を売っていない時代（日本人会もなかった）、敬子夫人が苦心して材料を買い集めて、《おでん》もどきを御馳走した。松本さん曰く「大根がないじゃないか」。

酉松会会員　追悼文

松本さんを偲ぶ

角田　昇（昭和十二年卒）

一見しかつめらしい風貌の反面、あの黒縁の眼鏡の中には、いつも情に溢れる暖かい眼差しがあった。

松本さんは終生一橋を愛し、そして蹴球部を熱愛された。

私自身の部生活を顧みても、現役、ＯＢと言わず、選手、サブを問わず、蹴球を愛する者に対しては、常に平等に、真剣に面倒をみられた。まことにスケールの大きな人格者であられた。そういうお人柄であったから、部員は悩みがあると真っ先に松本さんに相談に行き、その都度、明快な御返事をもらい満足して落着したものである。

私が予科に入りボールを蹴りはじめたのは昭和六年（一九三一年）であったが、当時の部活動の直接の親分は長瀬東作氏で、兄貴分は二階堂謹二氏、後藤博基氏、神野清一郎氏等で、部活動を外部から、高く、広く見据えておられた《大親分》が松本さんであった。

私が本科になった年（一九三四年）蹴球部は一部昇格のまたとないチャンスを迎えることになった。同期生は、浅枝彦太郎、荒井文雄、森田昭之、田島輝重の諸氏と私の五名である。本

科生になると自分達で選択する特定教授のゼミナールに入らねばならない。私等は前々から、学生生活の全てを蹴球に捧げようと誓い合っていたから、出来れば、ゼミナールも同じにし蹴球の練習等に支障のない形をとりたいと考えていた。結局、松本さんに相談に乗ってもらうことになった。「悔いの残らない形で蹴球をしたいので、それが可能なゼミナールを斡旋して下さい。」これが私達の松本さんへの虫のい、註文であり、お願いであった。さすがの松本さんも、一瞬、当惑をされた様子であった。それから数日後、私共を呼んで、山内正瞭先生を紹介して下さった。

先生は、経済政策論の泰斗であり、長期間の京大教授を終えて、学校に来られた方だった。碩学の士であるとともに、大変な人格者であられた。私達は即座に先生のゼミナールに入ることを決めた。後になって知ったことだが、松本さんは先生に対し「この連中は、学問的智識はゼロに近いが、蹴球を通じ自らの精神や身体を向上させ、人生を出来る限り肥沃にしたいという熱意溢れる青年達だから是非指導して下さい。」と言われたそうである。

ゼミナールは原則として週一回先生の御自宅（渋谷区若木町）で行われることになった。練習が終わって、小平から電車を乗り継いで渋谷駅へ行き、駅前で軽食を済ませて先生宅に辿り着いたのは、たいてい夜8時過ぎになってしまった。それから二時間、各自のテーマに就いて

御指導を受け演習が行われた訳である。

私達の本科在学時代は軍部による準戦時体制が強化されていた時代であった。《日本の国際連盟脱退》《満州国帝政実施》《美濃部教授の天皇機関説への攻撃》《二・二六事件の発生》等々、軍部独走を危惧する正論は頭から抑圧され、言論の自由は全く無視されていた。ゼミナールでもこの種の問題が採り上げられ、軍部独裁に悲憤慷慨し議論が夜半に及んだことも何度かあった。

一方、度重なるゼミナールを通じ、先生の御家族（奥様、お嬢さん）とはすっかり親しくなり、ゼミナールの日の夕食は先生宅で御馳走になることが多くなった。皆さん蹴球も解るようになりファンになられてしまった。私達が二部優勝、一部昇格を果たした時には御自宅で、松本さんと私ども五人を招かれ盛大な祝勝の宴を張られた。

閑話休題、蹴球部も引続き一部にとどまることが出来、六年間に亘る私共の部生活も終わって、昭和十二年春、私共は愈々卒業することになった。卒業の前月、先生と松本さんが私共の門出を祝い伊豆の長岡で送別会を催して下さった。大いに飲み、語り、騒ぎ、生涯忘れ得ぬ会合であったが、あとで考えると、このメンバーが揃ったのは、これがこの世に於ける最後の集いとなってしまった。

私達は、卒業後間もなく、現役又は召集入隊、若しくは外地赴任で東京を離れた。

山内先生は、私共の卒業後いくばくもなく亡くなられた。五人とも御葬儀に列席することも叶わなかった。残念至極だった。

正月早々、御高齢とは言えまだまだ御元気だった松本さんが亡くなられたことを知り、我が耳を疑った。九十四歳と言えば天寿を全うされたのかもしれない。でも一橋の蹴球に係わる者にとっては、大親分の死であり、心の支えの喪失である。松本さんに報ゆるためにも現役は勝たねばならぬし、現役もOBも、真の蹴球人に徹する覚悟を新たにせねばならぬと思う。

私の同期生、荒井君は昭和十三年（一九三八年）湖南省で戦死、浅枝君は昭和十四年にノモンハン事件（一九三九年）に参戦、重傷を負い、帰還後昭和二十年（一九四五年）八月六日、故郷広島で原爆により爆死を遂げた。田島君は昭和四十六年（一九七一年）病死。森田君は生涯戦傷に苦しみつつ平成六年（一九九四年）亡くなられた。同期生で生きているのは私ひとりになってしまった。私も三年前からガンとの闘病に入り、いまだに入退院を繰り返しているが、松本さんの護国寺に於ける御葬儀には何とか出席出来、同期生を代表し、御存命中格別御世話になったことに深謝し、御冥福を祈り上げることが出来たことはほんとに幸いであったと思っている。

（九六年八月）

松本さんの思い出

村井　恒　典（昭和十三年卒）

夏の合宿の中頃の日曜日の豪快なスキ焼きを思い出す。松本先輩が大量の牛肉を持っての恒例の陣中見舞だ。炎熱の猛練習で餓鬼道の亡者の如き若者が裸で鍋を囲み生煮えの牛肉を我れ先に口へ運ぶ。昭和七年、予科入学以来毎年の合宿に必ず松本さんは陣中見舞を続けて下さった。或る時は支那饅頭、カリントウ等々。

リーグ戦ともなると、よくグラウンドに現れて、勝ち戦には「よくやったな。よかったよ」と。負けた時は「残念だな」の一言。

卒業期も近づくと、部員の就職に一肌も二肌も脱いでよく面倒を見ていただき、更には結婚の斡旋迄していただいた者も可成り居た。

松本さんは、大正十五年のご卒業以来六十年以上に亙り後輩の面倒を見続けられて来られた。これは生半可な御努力ではない。大変な信念の下になされた大変な実行力である。その信念とは何であったか。

「サッカー部の猛練習と《愛》のグループに育てられた部員は、必ず立派な《人》となり世の

為、人の為になる人材になる。安心してボールを追い駆けろ！」と言うものであった。「その為にはＯＢは夫々の分野で偉くなれ。それを見て後輩部員は迷わず練習に専心出来る。そして自から強くなれる」と。斯く言う松本さん御自身は法曹界のトップに立たれ身を以て範を示された。「実業界なら社長、役員になれ。政界なら首相、大臣になれ！」と。

会社定年となった小生が役員にもなれず退職した時の残念そうな御顔を思い出す。誠に申訳ありませんでしたが、人間として恥ずかしくない余生を立派に努めて見せますと心に思ったものでした。

平成七年秋の集まりの時に「近頃、眼は霞み耳は遠くなった。長生きしすぎた。諸君も長生きは程々で切り上げた方がよいよ」と言われた。翌年、正に《大往生》を遂げられた。　さぞかし御本望であったと拝察申上げます。

四月中旬から五月上旬にかけて、二度目の開腹手術を余儀なくされ、退院後フラフラしながらリハビリ中です。締め切りが迫り兎に角書かねば申訳ないとばかり思い出を綴りました。誠に月並みなもので不本意なものですが駄文を棒げ御免蒙ります。

（96-5-19）

想い出

後藤　虎雄（昭和十四年卒）

はじめて松本先輩の謦咳に接したのは、昭和八年夏、予科が石神井から小平新校に移転した当時かと思う。蹴球部の合宿練習が、国立の下宿旅館や小平新寮で行われている頃、陣中見舞に、新宿中村屋の甘味を土産に、よく訪ねて頂いた思い出がある。

上級生部員と歓談しながら、時に当時の荒井文雄部員と碁盤を囲んでおられる温容に、「親父」のような厳しさと温かさ感ぜられ、これが第一印象であった。

爾来、六十年余に亘って、公私共に薫陶を賜り、時には荻窪の御宅に押しかけ、令夫人を煩わし、歓待に与かっていた時代から、社会人としての去就についても激勵と忠告を仰いだ時代を通じ、私にとっては、厳父であり、又、慈母の存在であられたことを、心から有難いと思う。これは、松本先輩や令夫人に接した酉松会員の殆んど全ての思いであろう。

松本先輩は、私共後輩にとって、二つの意味で、大きく尊い存在であったと思う。

一つは、先生は、（これからは、こう呼ばせて頂く）自己の信念に基く、独立独歩の精神に徹して、自らの世界を築かれ、これを完成して悠々と彼岸に旅立たれたことであろう。「自ら

持すること固く、徒らに他を頼らず、千万人と雖も我行かん」との気概は、先生の若い時代からのバックボーンであったことである。

現代人の通弊として、親に頼り、教師に頼り、会社に頼り、その他周囲の力に頼って、自己の責務に気付かない傾向には、私、自らも省みて忸怩たるものがある。

先生は、自他共に、これを戒めて、生涯を送られたことである。

その二は、知己には、心を許し、あくまで信頼されたことである。

その信頼の対象として、母校、酉松会、蹴球部もある。その思いの深さには、唯々頭が下がるのみである。

即ち、われわれ酉松会員に対して、先生は、絶対の信頼を置いて頂いた。個人的には、時に、秋霜烈日の忠告を与えられても、胸中には、常に深い信頼と愛情を湛えていて下さったのである。引いては、サッカーに打込む者への信頼は絶大なものがあったと思われる。　まことに有難いの一語に盡きる。

忘れられない思い出がある。

先生と交友の深かった一橋の先輩である小泉幸久古河電工社長に、「社技」スポーツとして、サッカー採用を薦め、これが実現したことである。

古河電工は、当時、社を挙げて応援するスポーツとして、日光工場のアイスホッケー、横浜工場のボート、バレーボールがあったが、東京本社のスポーツとして何か採りいれたいとの小泉社長の相談に対して、先生は、即座に、サッカーを推薦されたとのことである。昭和三十年頃のことである。

古河電工には、昔から東京実業団チームとしてのサッカー部が存在したが、この時以来、東京本社中心に、サッカー部の強化を図り、社会人チームとして、後には、日本リーグ、更には、Jリーグの雄となり、今日に至っている。このチームのメンバーから、後年、現在の長沼日本サッカー協会会長や、川渕Jリーグ・チェアマンなど多くのサッカー界のリーダーが輩出して、日本サッカーが国際的な地位を確保するに至った。その淵源は、実に松本先生のサッカーに対する絶対の信頼に基づくものであると思う。

当時、古河電工に在勤した私としては、些か我が田に水を引く憾みはあるものの、先生の「サッカーを推薦する」の一言が、大きな端緒となったことを思い、後日、先生から、直接この話を伺い、まことに感慨を深くした次第である。

今や、私も八十一歳の馬齢を加えて、余生を送るものの、せめて彼岸で、先生の温顔に迎えて頂けるよう、それを勵みに、酉松会諸兄と共に、「チャレンジ」を忘れずに、日々を過ごしたいと念じている次第である。

（九六年五月）

◆長命

酒もタバコもやって九十四歳と言うのはすごい。

松本さんに飲みっぷりが良いとほめられた、“晴坊”（二階堂）や“スズメ”（鈴木英）は先生より早く逝き、池田致（昭和39年卒）は三途の川迄行ったが幸い戻って来た。ストレスも原因であろうが。

松本さんは禅とお酒でストレスをカットし、晩年は強い意志で節酒されたことが長命につながったようだ。

「松本さん」を偲んで

金井雄吾（昭和十六年卒）

松本さんがほんとうに呆気なく逝かれた。

九十歳を超えられても、ほんとうにお元気で、酉松会の會合でお目にかゝり、何時もと変わらないお姿であられたのに、突如の御訃報に接し、何とも信ぜられない、悲痛な気持に陥った。

奥様にお伺いしたところによれば、亡くなられた前夜には、普段と変わられた事もなく、御機嫌よく御家族と団欒のあと床に就かれたとのこと。ほんとうに安らかな大往生であられた由で、しみじみと松本さんらしい御最期であられたと感じ入っている。

思い起こせば、昭和十年、一橋予科に入学と同時に、何のためらいもなく蹴球部に入部し、既に大学学部生であられた諸兄と共に激しい練習に打ち込んで、へとへとになった。ようやく春のシーズンを終えて、納会が中野の《吉田家》で開催された。松本さん、高橋朝次郎さん等錚々たる大先輩が出席され、一橋蹴球部の意義を伺ったのが始まりで、爾来今日迄六十年余、深い御薫陶を頂いて来た。我々の試合の度に球場に足を運ばれ、特にシ

ーズンオフには、お宅へお招きに預かり、すき焼きを腹一杯御馳走に預かり、お酒を潰れる迄呑ませて頂き、青春を謳歌させて頂いた。西荻窪駅南方のお宅で御馳走になった当時が特別に印象深く、酔い潰れる者も出るなど、奥様には大変御迷惑をかけて恐縮したが、松本さんは一向に無頓着で悠々と皆の騒動を楽しんで居られた。当時、松本さんは、辨護士としては少壮の時代であられ、我々部員の大勢に腹一杯食べさせ、潰れるまで呑ませる事は大変だったろうと、後々になってお察ししたが、御迷惑をかけるにも程があった。

特に私は、松本さん御夫妻に結婚媒酌の労をとって頂いた恩義があり、其の他、人生の大切な節目に於いて、何かと御相談に乗って頂いた掛け替えの無い恩人であられた。

お年を召されてからも、足腰の鍛練として車は使わずに電車で、お元気に丸の内の事務所に通っておられ、何度かここの事務所でお目に掛かったのも、今は懐かしい思い出となってしまった。

心から御冥福を御祈り申し上げます。

（九六年五月）

やさしく頼りになる小父様

吉田　敬子

（昭和十六年卒　故吉田富彦氏夫人）

平成八年一月早々松本正雄様の御訃報に接しました時は本当に驚き入りました。

御高齢とは申せ、昨年十月、私の主人吉田富彦が亡くなり、通夜に教会まで、わざわざ御遠方の処、御夫妻でお出で下さり、その折り、御足もとは少々お弱りかとは存じましたが、大変お元気そうで、まさかこんなに急にとは思いもよりませんでした。

かえりみますれば、松本様は、私の父山内正瞭のゼミナールでございましたので、私の学齢以前から家に度々来ていらっしゃいました。それでも父は酒がのめませんでしたから、おもてなしも出来ず、堅苦しいお話しに終始したのではなかったかと、今になって思われます。

松本様が御結婚なさいました時も、真っ先にお揃いでお越し下さり、お美しい奥様のお顔が今でも浮かんで参ります。

私は一人っ子の上に、父が戦時中疎開先で倒れ、半身不随になってしまいましたので、何かにつけ、お二方には、相談にのって頂き、「小父様、小母様」と呼ばせて頂いて、お頼り申し

上げて居りました。

その上に、後日結婚することになりました私の主人が、戦時中神戸から東京に転勤になり、主人の母共々、サッカー部の大先輩の松本様の御宅にお世話になり、お部屋を拝借して居りましたこともあり、松本様のおはからいで、主人と見合いを致し、結婚に至りましたので、本当に文字通り私共は、夫婦揃って格別御世話様になりました。

主人がロンドン勤務中、松本様がたまたまヨーロッパに御旅行の途次、家にお寄り下さり、《おでん》まがいの煮物を召上り、日本酒で、いい御機嫌におなりになったことも、なつかしく思い出されます。

松本様は誠に、面倒見がおよろしく、いつもいやな顔もなさらず、話を聞いて下さいました。限りない御恩に、何一つお報いすることも出来ずに、お別れ致しましたことは、今更ながら申しわけなく、悔やまれますが、いつも心から感謝申し上げて居ります。

（平成八年六月）

松本先輩を偲ぶ

一ッ橋サッカー部の先達

折下　章（昭和十六年後期卒）

松本さんがついに大往生なされた。

大正九年東京商大予科一期生として入学、同大学卒業後、略三／四世紀の間、法曹界他公職での御活躍については今更多言を要しないが、それと同期間、その高邁なる人格と、卓越せる識見、力量をもって一橋サッカー部を創設し、同部乃至西松会の先達となられ、今日を築いてこられたことを、親しく松本さんの謦咳に接し、薫陶をうけてきた我々が認め、後進に伝え残さなければならないと思う。

松本さんは一橋サッカー部を限りない愛をもって教導して下さった。天賦の才能と、その後の思索、修行によって把握、確立された理念に基づく愛は、注がれる対象によって二つに分けておられたようだ。

一つは、妥協を許さない《笞の愛》であり、他の一つは、深く広い包容力をもった《暖かい愛》である。前者はサッカー部という団体そのものに対するものであり、後者はその団体に

種々な動機で集まって来た部員個々に対するものであったようだ。

サッカー部は、松本さんが激しい身心の鍛練を通して人間形成を目途された《場》であり、言わば道場であって、ここでは妥協の余地は全くなく、絶対的な愛をもって厳しく臨んでおられた。逆に言えばここでの妥協は人間を育み成長させる《場》を失うこととなるからである。そのような場面は滅多にないが、最も典型的な局面として、西松会の会合でも何度も繰り返し話されたことは、昭和十九年、戦争も末期的様相を呈し始めたときのことである。部員の代表が松本さんのところに来て、「靴がない、ボールがなくなった、食糧不足でサッカーをするどころではない。ついては部を解散したい」と許しを求めて来た。松本さんは、現役部員には酷であったが、戦場に征っているＯＢの心情に想いを馳せ、「解散罷りならぬ」と一喝叱正され、学生を納得させた由である。部員に対する《小愛》に溺れず部を存続させた松本さんの《大愛》が発揮された一場面である。

松本さんの愛のもう一つの面は個々の部員に対するものである。部員は未だ修行途上の未熟者であり、常に凡ゆる悩みに戸惑っている。学問と身心鍛練との相克、学問そのもの、思想そのものについての迷い、人間関係に悩み、時には恋に悩む等々、煩悩は尽きることがない。勿論他にも意見を求めたろうが、しばしば、松本さんの門を叩き、苦衷をぶちまけて、判断、據

り處についての指針を請うた。正に若い青年共の《駆け込み寺》であった。松本さんは暖かく夫々の話を聴き、個々に教導されておられたようだ。所謂《対機説法》の妙を発揮されておられた。

松本さんのサッカー部に対する愛を語る時、もう一つの局面を忘れることは出来ない。

それは、サッカー部、西松会の諸会合へのお心遣いのことである。

（一）　戦前戦後に亘る松本邸における一月十五日の恒例の新年会。

最盛期は六十余名が参上した由。ＯＢ夫婦、中には子供連れの里帰りの様相。正月料理の準備には築地の市場への買い出しまでなされた　たま夫人とお家族のご苦心には察するに余りある。

（二）　戦前、中野新井薬師におけるシーズン納会。

（三）　戦前、季節は夏に箱根芦の湯松坂屋旅館へ高学年部員をご招待いただいての、裸になっての懇談。

（四）　毎年の西松会総会へのご出席。高齢になっても衰えのない気魄籠もったお話。

（五）　シニアー西松会ご招待。

（六）　酉松会会員の　慶、弔事へのご出席。　等々

殆どの会合における　たま夫人の物心両面におけるお心遣い、ご尽力は容易ではなかったと拝察し、松本さんご夫妻のサッカー部に注がれた《限りない愛に》、衷心より感謝申し上げる。

時移り世変わり、実際的には種々変わって行くだろうが、松本さんが遺された一橋サッカーファミリーの心の団結には、深く、深く感謝し、これを引き続き大切に残して行かなければと想う。

（九六年六月）

《如水会会報　昭和五十六年二月号所載　橋畔随想より》

一橋のサッカーに思う

瀬藤　俊雄（昭和十八年卒）

私の一橋生活五年半は、サッカーに明け暮れたといっていい。雨の日、風の日はもとより、日曜も祝日もなく、まだ武蔵野の面影を留めていた小平と国立のグランドで鍛えに鍛えられた。猛練習の連続であった。

戦前の一橋サッカー部は、数ある母校の運動部のなかでも異彩を放っていた。昭和七年から関東大学リーグで毎年連続優勝して、四部から三部へ、さらには二部へと昇格を続け、昭和九年には二部でも優勝して、ついに宿願の一部昇格の偉業をなしとげた。

一橋の場合、新人部員の多くは素人に近かった。それなのに、このように快進撃を続け、そしてその後も戦中期まで一部で競い得たのは、部員一同が若人の情熱を傾けて、サッカー一と筋に真剣に取り組んだからだと思う。これは、四十年近くたったいま思い起こしても尊いことに思われ、さわやかな気分になる。

だが、一橋のサッカー部には、たんに技術がすぐれていて試合に勝つというだけでなく、それを超えた、もっと高次元の何物かがあった。それは、伝統として受け継がれてきた激しい練習を通じての肉体、精神の鍛練によって、とりわけサッカーが団体競技であることによって養われる強烈な責任感と使命感をもった人材を社会に送り込んだことだと、私は思う。

大正十年に故兵藤世平治氏が、母校サッカー部の前身である一橋蹴球団を創設して以来本年で満六十年になり、この期間にわたってサッカー部はそのような人材を社会に送り続けていて、サッカー部ＯＢは現存者だけで三百人を越えるに至っている。一橋としては空前の、最高裁判事になられた松本正雄大先輩（現国家公安委員）を会長に戴いて「酉松会」を組織し、楽しい集いを続けている。

それにつけても、痛恨に堪えないのは、昨年十一月二十八日に、酉松会の有力メンバーであった兼松江商社長の松浦巌君が五十九歳の若さで急逝されたことである。

《ガンさん》とわれわれは呼んでいたが、彼はサッカー界の名門神戸一中時代からの名選手で、予科入学と同時にサッカー部に入部するや、最若年生なのに大学チームの戦列に加わり、ツルツル光るほど短く丸坊主に刈り込んだ特有の大きな頭を打ち振って走り廻った。その姿はいまも私の脳裏に鮮明に焼き付いている。しかも彼は、精神面でも美事に指導的役割を果たし

て、母校サッカー部の基盤確立のため大きな足跡を残した。

《巌さん》は、学生時代にサッカー部誌にこう記している。「学問するということは本を沢山読んで知識を積み重ねることではない。本当に学問するということは我々が毎日心身を打込んでサッカーの練習をするのと同様に厳しいことだ。何か勉強しているという安心に陥ることは情け無い。と同時に、練習しているという漫然たる気持も恐ろしい」と。名言である。

《巌さん》は、彼のサッカーのプレイにもその性格がよく現れていたように、手を抜くとか、適当にやっておくことのできない人間であり、誠実と信念によって人をひきつける魅力の持主だった。彼は抜擢されて、九大商社で最年少の社長となり、その信任に応えて身を挺して社業に盡瘁されたのである。彼の名刺入れの中に病薬がいれてあったことを奥様もご存知なかったということを後で知らされて、国政に尽くして仆れられた故大平総理の病根が奇しくも《巌さん》の生命を奪った病根と同じであったこと、また、お二人とも誠実と信念の人だったことが思い合わされて、惜しまれてならない。

ところで、在校生の絶対数において他校に比べて著しく劣勢にある現一橋大学は、入学する際の狭き門が影響してか、サッカー部に限らず運動部の試合成績がどうもこのごろは概して芳

しくない。実に残念である。運動部である以上まず勝たねばならぬ。勝って初めて猛練習の成果が正当に評価されるのだ。奮起を望んでやまない。と同時に、一橋の運動部は、人間形成を大眼目としていることを忘れないでほしい。

松浦君が言った通り、真剣になって学問することと、運動部の練習をすることとは底でつながっているのだ。二度とない貴重な学生時代を空費せぬよう、練習と人間錬成に励んでもらいたい。一橋サッカー部のＯＢの一人として、松浦君のような人材が母校から陸続と輩出することを望むや切である。了

（一九八一年　二月）

松本大先輩を偲ぶ

土屋　五郎（昭和十八年卒）

松本大先輩の温顔を胸に、お世話になったサッカー部生活を回想し、ここに深く感謝しつつ哀悼の意を表したいと思います。

思えば大学を出て幾星霜、往時茫々として遠い彼方に過ぎ去りましたが、サッカー部の生活は松本先輩のお顔と重なって、今でもありありと瞼に浮かんで参ります。

当時は戦時下ではありましたが、諸先輩のお陰で、関東大学リーグの一部の檜舞台で試合が出来た恵まれた時代でした。併しそれなりに練習は非常に厳しいものでしたが、一方で「試合は選手だけのものではなく、サブから先輩も含めた全員の闘いである」ことが強調され、その気風が全員に漲っていました。

従って、小平の練習には壮気溢れる先輩方がよく来られ大分しごかれたものでした。

又、松本先輩も大きな試合には必ず来られ、試合後のミーティングでは種々話をされ、我々を鼓舞激勵して下さいました。

また、サブの方等も多く、六年間を地味な裏方の役に徹された方も少なからず居られました。今でも、試合の時にグランドの外からじっと見つめておられた《あの人》《この人》の澄んだ光る瞳が、目に浮かびます。

此の様に、当時のサッカー部は《グランドの内も外も》一つになっての試合であり、又練習でありました。

当時一部で三強と言われた早大や東大を破ったことがありましたが、この時「商大は技の劣勢を果敢なる闘志と、旺盛なる団結力で覆した」と、どの新聞にも書かれたものですが、松本先輩は、此の記事を、我が意を得たりとばかりに喜ばれました。

そして「之こそ、我が商大サッカー部なり」と誇らしげに胸を張られ、我々を鼓舞激勵されたことがつい昨日の事の様に思い出されます。

本当に有難うございました。松本先輩は逝かれても、何時迄も私達の胸の中に輝いて居られます。心から御冥福を御祈り致します。

尚、最後に、松本先輩の秘蔵弟子とも言うべき畏友瀬藤君が、奥様の献身的な介護も效なく、松本先輩の後を追う様に去る五月十二日に亡くなり、誠に残念で哀惜の情を禁じ得ません。青木君と私は一緒によく見舞に参りましたが、彼は九年の永きを殆ど入院生活に終始しました。此の間、癌を克服し、更に脳の手術、片足切断等、種々の難病と闘いながら、弱音一つ吐かず、最後迄、声は大きく、眼光は烱々として、その闘志たるや誠に威圧される思いでした。又、脳の手術の結果、言葉の機能を一部喪失したのでしょうか、見舞に行っても、何時も二・三言の会話しかありませんでした。しかし、そんな僅かの言葉の中に現役サッカー部員への思いがあり、青木君共々、胸をつかれる思いであったことを、松本先輩の御霊前に申し添えたいと思います。

（九六年六月）

松本先輩への御礼

青木育郎（昭和十九年卒）

今年一月に松本先輩とお別れをしたと思ったら、それから半年もたゝないこの五月に長年の友瀬藤君が逝ってしまった。松本先輩に私淑し深く大先輩を尊敬していた瀬藤君は十年に及ぶ闘病のあと松本先輩の後を慕って逝ったと、私には思われてならない。

私も又松本先輩の尊い恩恵に浴しているものである。

私にとって、松本先輩は雲の上のお方であり、親しくお言葉をかけて戴いても緊張のあまり充分お答えが出来なかった様な気がする。

昭和十三年四月に東京商大予科に入学した私は、すぐにサッカー部に入部させてもらった。《馬鹿になってボールを蹴れ》と部の諸先輩に教えられた。特に馬鹿になる努力はしなかったが、もともと馬鹿だったせいか自然にボールを蹴るのに夢中になることが出来た。勿論灼熱のグランドで汗にまみれてボールを追うのは辛いことであり、時には怠けたり、サボったりすることがあり、その都度諸先輩から叱咤激励を受けた。それは厳しいものであったが、同時に諸先輩は懇々と、又諄々とサッカー部員のあるべき姿を教えてくださった。そこには、厳しさと

同時に寛容と温情があふれていた。私は考え直しボールを追い続けることが出来た。それは《闘魂》であり、《体力》であり、《技倆》であった。自らを磨くことによってこそチームに尽くすことが出来るのであり、それによってチームの勝利に貢献出来るのである。

私の学生時代は戦時中であり、滅私奉公とよく言われた。勿論死を厭わず自らを滅ぼして公につくすことの尊さを否定するつもりはない。しかし、死に至る前に全力をつくし自らを磨き全体につくすことの大切さをサッカー部は教えてくれた。

お前自身その様に生きて来たのかと言われると自信はないが、少なくも、これが私の心の支えとなってくれたことは確かである。

私は本科一年になった年の春から体調を崩し肋膜炎と診断され、略々一年間の療養生活の後復学したが、遂に卒業する迄グランドに戻ることは出来なかった。言うなれば、私はサッカー部中退である。その私が、その後もサッカー部に籍を置き酉松会会員として残れたのは、正に松本先輩のお陰である。このことについては、昭和57年に作られた一橋大学ア式蹴球部六十年史に拙文を載せて戴いたが、昭和十七年の夏、松本先輩が現役部員（本科三年及び二年生）と在京ＯＢの方数人を箱根芦ノ湯温泉、松坂屋旅館に招かれ、会合を持った時に、病後静養中の私にも、瀬藤君を通じ参加を呼びかけて下さったのである。

これが、さもなければ切れてしまったかも知れない、私とサッカー部との絆をつないでくれたのである。

現実には、グランドに戻って闘魂を養い体力をつけ技倆を磨いて商大サッカー部につくすことは出来なかったが、その後の私に、人生に対する心構えについて大きな《啓示》を与えて下さったサッカー部と松本先輩に対し、ここに重而厚く御礼申し上げる次第です。

（九六年八月）

松本先輩の想い出

鷲　埜　和　夫（昭和十九年卒）

商大ア式蹴球部の大先輩である松本先生が亡くなられて、既に相当の日時が過ぎているが、いまだに先生の面影はしっかりと眼に焼き付いている。

私共の部生活は戦争中でもあり、決して恵まれた環境ではなかったが、それでも、戦後五十年今日あるのはやはり青春時代の小平の土埃、泥まみれの五年間のおかげであると信じている。

先日、奥村一郎君から電話で原稿の催促があった際、《戦争中、部の解散を先生に相談に行った処、先生から大変な御叱りを受けた事があるのを記憶しているか》との問い合わせがあったが、少なくとも小生には全く覚えがない。奥村君にも記憶にないということであるから果たして何時の事であったのか？。いずれにしても、今日迄サッカー部が延々と歴史を刻んできたのは先生の存在が支えになって来た事は間違いない事だと思う。

戦後の混乱時代、一・二度先生の事務所に仕事の事で御相談に伺った事があるが、その都度大変暖かく、親切に御指導いただいた事は今もって忘れ難い想い出である。多分東洋レーヨン

の東京事務所（？）ではなかったかと思うが、それすら今は判然としない。

つい先日《アンヨ》が亡くなった。瀬藤先輩に《アンヨ》と申し上げては大変失礼ではあるが、一年上のキャプテンでもあり、文字通り手を取り足をとって指導していただいた。小生の様な、不器用で足の遅いグータラ選手が大学一部リーグで神宮のグランドで試合が出来たのは、正に《アンヨ》のおかげである。

同期の太田キャプテン、西内マネージャーも亡くなり、段々と淋しくなったが、きっと天界の彼方で、サッカー部の事を語り合い、部の先き行きを楽しみ、且つ案じておられることと思う。

一橋を愛し、サッカー部を愛し、家族を愛し、国を憂う心を常に抱かれていた先生は、私達の慈父のようなやさしい方であった。

（平成八年六月）

一枚の写真

奥村一郎（昭和二十一年卒）
（予科入学昭和十六年）

アルバムに鶴岡八幡宮で撮ったサッカー部員の写真がある。ア式蹴球部六十年史の２１２頁の下方にも複写したものが載っているが、製版が悪くてぼんやりしている。しかし、実物は鮮明によく写っている。

これは昭和十八年一月三十一日に、松本さんが瀬藤主将と相談して出征先輩の武運長久祈願と、シーズンオフ中に先輩と部員との親睦を目的に企画されたものと思われる。

松本さん、神野さん（11）、田島さん（12）、大掛さん、重見さん（13）と先輩が五人。本科三年が瀬藤、同二年が鷲埜、同一年が松浦、西内、高橋、金原、荒川、（学業短縮で十七年十月に学部へ進学した《本来は予科三年》）従って予科三年が居ない変則で、予科二年が永倉、加藤（春樹）、川端、西浦、奥村、予科一年が高柳、床宿、松岡の計二十人である。

神野さんは沖縄で戦死された（六十年史76頁）ので、この時にお会いしたのが初めの終りであった。

大掛さんは合宿にも来られたことがあったし、戦後のＯＢ戦でも御会いしたことがあり、松本さんを囲んでグランド脇の草の上でＯＢが歓談している写真の中にも写っている。アメリカで客死されたのは全く残念である。

重見さんにＯＢ戦でお会いしたか記憶にないが、戦後、明電舎ご勤務中ガンでお亡くなりになった。

田島さんは東京に戻ってからは西松会でよく面白い話をされ、ずんぐりした身体をよく憶えている（六十年史79頁）。

最近、瀬藤さんが長い闘病の末亡くなられたが、それに先立ち松浦、西内さんも相次いで鬼籍に入っており、金原、荒川さんは戦死。西浦は戦後すぐ結核で病死、永倉、高柳をここ二年間に失い、松岡は韓国に帰って大学教授になっているとの事だ。

松本さんが天寿を全うされたので、残っているのは二十人中七人となって転た（うたた）感慨に堪えないものがある。

話が元に戻るが、鶴岡八幡宮参拝の後、鎌倉の海浜ホテルの裏に住んでおられた故高橋朝次郎先輩（広島一中、ボートも対抗選手だった万能スポーツマン、昭和二年卒）のお宅へお寄りして歓待を受けた。ご子息の敬蔵君（昭和28年旧制卒）が小学校六年生位の頃であるが、その

敬蔵君も今年三月急逝され、今や無し。噫々。

昭和十八年秋、学徒出陣となり、十九年には学校から、廃部を命令されて（実際に殆どの部員が学校に残って居ないのだから、部が無いに同じであった）加藤春樹と高柳晋が、松本さんのお宅へその報告に行って、一喝を食い散々叱責されたことは、六十年史に詳しく記されている。今にして考えると、文部省の軍部迎合の命令であったと思われるが、全くバカバカしく、戦時中の官僚の形式主義、事大主義を思った丈でも腹が立つ。

六十年史にかかわった為か、瀬藤さんに明石町の寮に招待されたり、松本さんに歌舞伎座近くの有名な“三原鮨”に招待され、その頃から松本さんに私の名前を覚えて頂いたように思う。しかし、私はお酒も囲碁も不調法なので、それ以上の交際には発展しなかった。　一昨年三月、松本さんが死期を自覚されてか、戦前のＯＢを招んでお別れの宴を張られた。昨年十月にご返礼の「松本さん招待会」は戦後の旧制と新制昭和32年迄にＯＢ年齢を下げたので私も出席したが、松本さんは大変元気で、思い出話と共に、世を憂える演説で終わられたことが印象的であった。

今年初め、風邪気味で入院の話が出た時、「管はつけるな。つけても引きちぎるから。」と

言われて、結果的には自然死を遂げられたと聞いた。松本さんの遺品の中に一九五一年の部誌があり、松本さんが寄稿された「車中感」（大阪へ行く特急つばめの中での感想）に、戦前、浜松の奥の《方廣寺》へ通って十年間参禅したことが出ていた。私は今年六月二日に方廣寺に行ったばかりであるが、車でもかなり遠い所で、今は観光地化しているが、当時は深山幽谷であった奥山での修行は仲々常人に出来るものではない。血気盛りの二十代から三十代に掛けて自己に沈潜して精進されたことが、あの人格を造り上げたものと、今にして思う。

（九六年六月）

故松本先生を偲んで

加藤　省（昭和二十三年卒）

穏やかな新年を迎え、今年は平穏な一年であるようにと、陽光の中に初春の余韻を楽しんでいる時、松本先生の訃報を受け正に耳を疑う思いでした。

昨年十月に酉松会のシニアの会を開催しましたが、先生は平常と全く変わらないお元気なご様子だったので、急逝されるとは想像もいたしませんでした。

当日は出席者の一人々々に声をかけられ、「村山内閣の施策についてどう考えるか」とか、「アジア諸国に頭を下げて回るというのは誠に情けないが、君達はどう思うか」等、政治、社会、経済問題等について質問され、若々しい見識を披露されて居られました。

又、昔話をしながら笑って居られましたが、今考えると出席者の一人々々にお別れをしながら酉松会の会合を楽しんで居られたのではないかと思います。今、先生の温容を思い出しながら、先生と会員との最後の機会を持ちえたことを主催者の一人として喜んで居ります。

私は残念なことに、在学中のみならず卒業後も先生の謦咳に接する機会に恵まれませんでした。先生が一橋サッカー部の創設者であり、戦前戦後の異常時にも一貫してサッカー部及び酉

松会の大黒柱的存在の方であるという認識しかなく、学生時代に我々の練習や試合を分厚い眼鏡ごしに黙って見て居られた姿が目に浮かぶ程度でした。然し、この数年、酉松会の運営につき関係するようになって、先生にお会いする機会がふえるにつれ、先生の人間の大きさ、懐の広さ、そして何よりも信念の固さに打たれることが度々ありました。今、先生を失い、人生の師として尊敬に値する方と、極めて短い時間しか接することができなかったことを非常に残念に思って居ります。

先生がお亡くなられてから、いろいろの方から先生のお人柄を偲ぶ話や、各方面でのご活躍の話を聞くにつけ、限りある人生とはいえ、酉松会、一橋サッカー部として得難い先輩を失って了ったと惜別の情にかられるものです。

名誉職的な会長は幾らでも居ますが、先生は一橋のサッカー部に対し物心両面について行届いたご援助を下さいました。法曹界は当然のことながら、財界に、又母校の発展にと活躍されながら、なお一橋のサッカー部の援助にも力を注がれたのは、サッカーの縁で同じ学舎に集まった同人の人間形成の場の発展を期待されたのと、一橋サッカー部に席を置いた人に対する信頼感によるものと推察いたします。信頼に応えるのが我々後輩の仕事でしょう。

弔問に伺った日、奥様とお話しをするうちに、正月十五日恒例の先生宅における集いの話に

なり、先生が亡くなられて「この《集い》も、楽しく懐かしい想い出となりました」と、しみじみと話して居られました。伺うところによれば、三・四十名余のＯＢ、学生が遠慮なく飲み食いするので準備が大変で、奥様自らお嬢様をお連れになり、築地の魚河岸まで買出しに行かれ、料理を数日かけて準備するのが年初の大仕事だったとのことです。そして小さな声で「お金の面でも大変苦しかったのよ」と述懐されて居られました。

先生の各方面の活動ぶりから考えて、会社とはちがい、全くの個人で支えて居られたのですから当然で、更に一橋サッカー部のために毎年多額のご援助をいただいたのですから奥様のご苦労も並大抵のものではなかったと思います。奥様は、先生の死を悼みつつも、却って永年続いたご苦労を懐かしそうに話されるのを聞き、若かったからとはいえ、気がつかなかった我々の無遠慮な振舞いを省み、冷や汗を止めることができませんでした。ご一家をあげてのご厚情に対し、改めて感謝の念を深くいたしました。

松本先生は一橋サッカー部、酉松会の大きな求心力であり、大黒柱でした。今この大きな柱を失って気がつくことは、酉松会、一橋サッカー部が大きな転換期に来ていることです。戦前の栄光を知るお方は略々二十名にすぎず、しかも何人かの方が病床にあります。先生は若い人達の人間形成には特に注意を払って居られました。先生から永く受継がれた伝統を更に育むこ

とが先生のご意志を生かし期待に副うことになりますが、酉松会の若い中軸の方々に歴史をもう一度振返っていただく必要があり、新時代にふさわしい、しっかりした健全な伝統をつくり上げてほしいと思います。学生諸君は毎日の練習を見直し、原点に立帰り、その結果としてとりあえず一部昇格を松本先生の墓前に報告してほしいと思います。ＯＢの方々には、先ず酉松会を自分の故郷として大事にし、関心を高めていただきたい。酉松会は我々の手で維持しなければならないと思います。これが松本先生のご遺志を生かす第一歩かと思います。

先生の安らかなご冥福をお祈りします。

（九六年五月）

松本大先輩を偲びながら

小　島　　壽（昭和二十三年卒）

出身は横浜一中。松本大先輩の不肖の後輩。

サッカー歴は長いだけで内容は見るべきものがない。更に戦前戦後の断層の中で、グランドの想い出も埋没しかかっている。

「ピピーー」。　レフリーの笛。　試合終了。　「勝った！！」　天にも昇る心持。

これは一橋とは関係ない。六十年近く昔のこと。県大会で、サッカー名門校湘南中を破ったとき。当時湘南中Ｃ・Ｆ早川選手の名は県下にとどろいていた。彼とは以来、絶えて全く接触がなかったが、平成六年のＳ・Ｏ・Ｉで偶然顔を見付けた。

「ウン。覚えていますよ。あのときは徹底的にマークされて動けなかった。〇ー一で負けました。口惜しかった」。

そーか。やはりそういうものか。彼の様な名選手にも、サッカー栄光の歴史の中で、いくつか忘れられないことがあるものだ。さわやかな再会であった。

中学を出てから一橋へ。キャリアーがあるのでいささか足に自信があったが、やはり、《井の中の蛙》であった。松浦ガンさん、永倉真平さん、その他大勢の名手に鍛えられ、しごかれても鈍才は芽をふかなかった。

戦争、敗戦、復学、そして戦後のサッカー部生活。立教を破って辛うじて一部残留をきめた秋の大会が記憶に残るくらい。鈍才の足に奇蹟は起こらなかった。

還暦を越え、古稀を迎える頃、奥村さんからS・O・I参加と一橋チームの復活を誘われ、駑馬に鞭打って練習再開。京都遠征。

前夜祭で盛り上がったファイトを持って、翌日府立大グランドへ。松山高校チームを、2－1で破った。右からのパスを《真平》さんがダイレクトでゴールを決めた。

「お前さん。昔よりうまくなったなぁ」。とほめて呉れたが、考えれば昔は今より下手だったのか。

想い出ばかり残る今日此の頃。松本大先輩の言葉が心に浮かぶ。

「サッカーマンとは、正義感と負けじ魂に徹底し、義理と人情を心得た人物」。

そうだ。みんなこの通りの人達であった。

（九六年七月）

松本正雄先輩を偲びつつ、サッカーと我が人生を省みて

思いつくままに

神代　祥男（昭和二十九年卒）

私にとって松本正雄先輩は単にサッカー部の大先輩というだけでなく、人生の恩師であったと思います。

今年（平成八年）の一月四日の夕刻、訃報を耳にしたときは全く信じられないような衝撃を受けました。

今回、「追悼文集」を刊行されるとのことですから、この機会に様々なことを述べさせていただこうと思います。

一、サッカーと「東京卒業」

『東京卒業』という言葉をご存じでしょうか。我が山口県では人口定住が最重要課題となっており、Uターン就職者を求めて東京で新聞広告を掲載したのが最初です。これは大きな反響を呼んで、「東京卒業」という単行本まで出版されることになりました。

こういう観点からすると、私が山口に居住することになった遠因は、就職先が「宇部興産」という山口県宇部市に本社をおく会社に就職したことにあると思います。

サッカー部の卒業生でこの会社に籍をおいた者は、後にも先にも私一人きりでした。四年生の夏合宿後、翌春卒業予定の部員が揃って就職相談に松本先輩を訪問しました。その時は「どんな会社から募集がきているかがわからなければ話が出来ないではないか」との一言で、その場は退散し、改めて学校の掲示板からいくつかの「社名」を書き出して再度相談に伺ったのです。

そこで「宇部興産」・・「岡田完二郎さんという古河の先輩がいる。いい会社だよ」との一言が、私の人生を決めてしまったことになりました。そこで何故私が最初に「宇部興産」にということになったかというと、掲示板は「アイウエオ順」に出ており、この会社が相談の一番初めに取り上げられた会社だったからです。

岡田完二郎さんはその後「富士通」に迎えられ、「中興の祖」と崇められるようになったことは有名な話で、ご存じの方も多いと思います。

「宇部興産」は前にも述べましたが、山口県宇部市に本社を置く会社で、昭和二十九年（一九五四年）の入社当時は日本の百社にランクされるような大企業でありました。

こうして私は松本ー岡田両先輩のご縁（人縁）で山口県の会社に就職したのですが、もとも

と中学・高校と山口で学びましたので、このことが入社後、更に地縁、人縁を織り成すことになりました。昭和五十八年に地元の民間放送会社である「テレビ山口」に勤務（出向）することになりました。以来平成六年六月に退任するまで、殆どを『報道・制作』の仕事をして過ごしました。「製造業」から「マスコミ」に転進するケースは時々あるようですが、本命ともいうべき業務を担当することは極めて稀なケースのようです。

私にとって最大のポイントは住居を山口に構えたことです。これが直接的に「東京卒業」と思っている所以です。このために『酉松会』の皆さんとお会いする機会が少なくなってしまいました。しかし、山口からは日帰り、或いは一泊での上京は常に可能です。昨年秋の「シニアーの会」の会合にも日帰りで出席しました。これが松本先輩にお会いした最後となってしまいました。

二月に松本邸に参上し、松本先輩の遺影にお参りさせていただきました。「お前もやっぱり《社長》になりそこねたか？・・・・」と笑っておられるように思われました。

学生時代の僅か四年間のサッカー部での交わりが、こうして長く続くところに『酉松会』の存在意義があるような気がします。

二、学生時代のことども

ー　今は亡き方達を偲んで　ー

☆中山伊知郎学長のこと

昭和二十八年秋のリーグ戦を終えてからのことでした。若し二部で最下位になって三部に陥落したら、就職内定を放棄してもう一年サッカーと付き合おうという一寸悲壮な気持ちになっていたのが、最下位を免れたこともあって、多少は気分が高まっていたのでしょう、経験をベースに一橋のスポーツの在り方とその振興についての意見を学長に訴えようと思い中山学長に面会に行きました。

学内でのスポーツ振興に対する環境整備の必要性やキャプテン　オブ　インダストリーの担い手は強靭な体力の持ち主であらねば・・・・というようなことを提言したように思います。言葉のやりとりについては記憶に乏しいのですが、私の主張を黙って聞いていて、最後に、《時代背景が未成熟である》という様な答えであったように思いますが、一学生の面会希望に気軽に応じ、意見に耳を傾けていただいた記憶は鮮明に残っています。

☆永瀬誠さんのこと

この人の名前を記憶している方がいるでしょうか？我々の寮生時代の調理の小父さん。

私が入学した昭和二十五年には、一橋寮の朝食は飯盒などで受け取り、自室で、夕食は学生食堂で・・ということで、食事の場所も、量も質も全く問題にならないようなお粗末な状態でした。

どういう経緯があったか覚えていませんが、永瀬誠さん夫妻に寮の給食をしてもらうようになりました。引揚者で子沢山の夫婦は構内の官舎に住んで、食事の世話をしていました。一橋寮も年々少しずつ整備されて、三年後には寮の食堂が新築されました。

夏の合宿は、当時は「小平」で実施していました。合宿は常に体力の消耗を伴うものですが、何といっても記憶に残っているのは、永瀬さんが献立などに充分な気配りをして、それをカバーしようと努力してくれたことです。

永瀬さんとの交流は私が一橋寮の委員をしていたこともあって卒業してからも続いていましたが、後に富浦の臨海寮の管理人となり、昭和四十六年に亡くなりました。息子さんがあとの管理人を引き受けたと聞いていますが、今はどうなっているのでしょうか。

☆本田忠勝君のこと

私どもと同期でサッカー部に在籍していましたが、三年の時、病を得て亡くなりました。私より年長で、温厚な人物であり、堅実なプレイヤーでもありましたので、私どもが四年にな

れば、当然、彼がキャプテンと考えていました。惜しい人物を失ったと思っています。

今年二月の「二十九年会」で彼と同じ名古屋出身者から、偶然彼のことが話題にのぼったので、決して忘れられていないと思い、ここに申し上げることにした次第です。

三、最後に・・「一橋サッカー部」

「酉松会」に思いをはせて

「人生八十年時代」ということを考えると私自身もまだ「世のため、人のため」にやり残したことが多いように思います。

サッカーに限ってみても、地元（山口県）での競技振興のために施設の改修や新設についてのプロジェクトに参加しています。

またプレイヤーとしても「四十雀クラブ」のメンバーですし（これは一寸ペーパードライバー的な感じがします）、山口では四十歳以上で構成する「ダックスクラブ」に参加しています。

私にとって《サッカー》は思考、行動の原点であると言っても過言ではないでしょう。

「一橋のサッカー部」「酉松会」は、松本大先輩のサッカーに対する理念・情熱を永遠に継いでいって欲しい・・・と念願してやみません。

（九六年五月）

忘れ得ぬ三つの場面（シーン）

田　中　豊　二（昭和二十九年卒）

松本先輩にまつわる私の思い出は数々あるが、特に印象の深いシーンが三回ある。

真情に接した場面と崇高さと涙を見た場面である。

最初の場面は昭和二十八年夏、築地の料亭の玄関であった。就職試験を前にした夏休みの或る日、突然お呼び出しがあり、築地の料亭「栄屋」（今は既に無い）に出向いた。当時まだ世間がわからず、汚らしい学生服でどこかの店に寄るようなつもりで気軽に出掛けたが、いざ着いてみると黒塀の近寄りにくい料亭で入り口で足が動かなくなった。掃除番の老夫に尋ねられ、目的を伝えてやっと玄関に入れてもらうと、松本先輩が当時財界の重鎮である《桜田武》、《高橋朝次郎》の両氏を伴って現われ、「今度、御社を受験する田中君だ。呉々もよろしく頼む。」と真情をこめて引き合わせて下さった。当日、池田勇人蔵相が渡米するにあたり後援する財界人が羽田に見送りに行く前「栄屋」で一堂に会した由で、その大事な時に何ら憚ることなく見すぼらしい学生を有力財界人に紹介して下さる熱情に、唯々感激したものである。

二番目の場面は、七・八年前の西松会総会の席であった。挨拶に立たれた先輩のお口から後輩、特に新卒業生に向けて社会人の生き方、組織の中での生きる厳しさを説かれる際に、尊敬しておられた故《菅　禮之助》氏（元東京電力会長、第九・十・十三代如水会理事長）の言葉を引いて「真直に　行くが為め　此の道の寒さ」と語られた。私には、語感から先輩が自らの多端な人生を顧みての述懐と察せられ、常に信念をもって王道を歩み、寒さも人一倍感じられたであろう崇高な生き方に深い感銘を覚えた次第であった。

三番目の場面は、昨年（九五年）十月五日、国立の兼松講堂で母校創立百二十周年記念祝賀会があり、共に列席した時のことである。第一部の式典が終わり第二部の記念講演が始まるまでの小憩時間に、先輩は席を立ち、「視力に加えて、耳も悪くなりよく聴こえぬので帰らせてもらう。」と言われたので講堂の出口までお伴をし、帰りのハイヤーを待った。その時先輩は出口先端の階段まで歩み寄り、正面の本館、右方の図書館、更には左方の松林をゆっくりと見廻して、静かな口調で「田中君、これが見納めだよ。」とつぶやかれた。ふと、お顔を見ると涙を一杯ため、万感こもる面持ちであった。そして、それは既に《死》を予感し、なお限りな

い母校への愛しさを抱き、しかもなお、母校の永遠を願うお姿であった。先輩の涙を初めて目にし、清い姿に打たれ、私も誘われるように落涙した。

（九六年五月）

パトロネージュ

日本語に直すと親分気質とでも申しましょうか。松本さんが生まれついての親分肌で、随分奥様に迷惑を掛けたことは本文の中にいろいろと出ているが、お金が無くてもやる正真正銘のパトロネージュであった。加藤春樹君は、昭和二十二年春、三商大戦で来阪した選手全員を二日に亘って大阪・京都を案内して歓待した。二十一年九月に卒業した新入社員で、全国民食うや食わずのあの時代にやったことは、パトロネージュの精華として松本さんを継ぐものであった。

松本正雄先輩の想い出

宮田　幸三（昭和二十九年卒）

松本先輩の突然の訃報に接し、たま夫人はじめ、御遺族のかたがたには、謹んでお悔やみ申し上げます。

思えば、昨年十月十三日、如水会館十四階記念室東の間で「酉松会シニアの会」でお目にかかったのが最後でした。

その節、松本先輩は、相変わらずお元気な御姿で、一橋ア式蹴球部創設の頃の御苦労話やその後のことなどいろいろと話された後、昨今の日本の状況、《阪神淡路大震災の処理》《オウム真理教の各種犯罪事件》《バブル経済崩壊後の金融問題》《我が国政治家の外交姿勢》などに悲憤慷慨なされながらも「最近の世の中は非常に不愉快な事ばかりで、自分は耳が遠くなるし、視力も次第に衰えてきて、長生きも考えものだ」と珍しく気弱な事をお話しされたのが印象的でした。

毎年春には、如水会館で酉松会総会が開催され、小生は、一九七三年初め、東京勤務以来毎回出席して参りましたが（今年九六年度は案内通知が遅く先約あり欠席）、松本先輩は御高齢

にも拘わらず、必ず出席されて、現役諸君への恩情溢れる激励や会員への有益なお話をして下さり、それを拝聴するのがなによりの楽しみでありました。

また、十二・三年前から「酉松会ゴルフの会」が毎年春・秋に松本先輩のお世話で、川崎カントリー倶楽部で開催されていました。小生は、業務都合もあって、同倶楽部が川崎市の都合で閉鎖されることになった第十七回（九一年四月十八日）を含めて四度しか参加出来ませんでしたが、その都度、松本先輩は、御自身は御高齢でプレイなされないにも拘わらず、集合時刻前に来場されておられて、スタートのティーグラウンドで数組の参加者全員がティショットをして出掛けて行くのを見送られるのでした。その優しく、そして律義な御姿には本当に感激致しました。

如水会々報、九六年四月号に「松本正雄君を偲ぶ」として追悼文が掲載されていますが「一橋の大恩人」であり、「一橋を熱愛した《男の中の男》」であり、「一橋の輝ける巨星」であると共に、私共、一橋サッカーマン、酉松会メンバーの大恩人であります。そして、眠るが如く九十四歳の天寿を全うされ大往生を遂げられた松本先輩に、更めて感謝申上げますと共に御冥福を御祈り申上げます。

（九六年五月）

松本さんと酉松会

高田　勝　巳（昭和三十年卒）

松本さんと酉松会々員との関係は、年代により濃淡があると思うが、一橋サッカー部・酉松会は、松本さんと言う偉大な先輩を中心とした強い絆で結ばれ、誇るべき伝統を培って来た。

一橋サッカー部も戦争を挟み厳しい環境に翻弄されて来たが、しっかりしたＯＢ会組織を保持し、今日に至っているのは松本さんの求心力のお蔭である。

松本さんにお世話頂いたことは個人的にも種々あるが、酉松会に就いて特筆したいのは、現在の酉松会々則が松本さんのご意向で作成されたと言うことである。

十数年前になるが、当時幹事長をやっておられた故瀬藤さんから「酉松会も会員が増加し、年齢の幅も拡がったので組織的な運営をする為に、会則を作成する様、松本さんからご指示があった」とのお話しがあり、古川君（昭和四十年卒）が中心となって三菱重工の明石寮で何回か会合を持ち、会則を作成した。（之が現在の酉松会運営の基礎となっている）

会則作成後、松本さんから慰労会のお話しがあり、幹事一同銀座の《三原鮨》で御馳走になった。三原鮨は、松本さんが最高裁判事の時、お仲間でよくお使いになったとのことで、当時

のお話しをされておられた。

私は松本さんから、学生の戦績についての感想を直接伺ったことは無いが、戦前の一橋サッカー部全盛時代のお話しをよくされていたことや、六十年史《巻頭の辞》に於いて、「強くならなければ駄目である・・・・・勝つためには闘魂を燃やし、技を磨き、体力を養わねばならない。・・・・・そしてこのことが真の人間形成にも役立つのである。」と述べておられること等から拝察すれば、良い戦績を望まれていたことは当然であろう。

このところ、先輩各位の訃報が相次ぎ、酉松会の象徴とも言うべき松本さんに続き、一橋サッカー部・酉松会を心から愛し、酉松会運営に尽力された瀬藤さんも亡くなられた。　一方、酉松会は今年四人の新会員を迎え、三百七十名の大勢力となった。

松本さんは六十年史の巻頭の辞の結びで「酉松会員の寿命にも限度がある。だが、一橋サッカー部は日本と共に永遠に存続するであろう。永遠に存続するが故に、幾歳月かかってもよいから立派な部に発展させてほしい。」と述べておられる。

学生諸君、君達がグランドで真摯に努力し、立派な戦績を挙げることが、偉大な諸先輩への最良の供養となることを肝に銘じて欲しい。

また、我々酉松会員は、現役の良い相談相手になると共に、諸先輩の築かれた優れた伝統を

彼等に伝えることが使命であろう。

（九六年七月）

あたま

一商の生徒は、五分刈りの先生を年齢不詳と思ったが、なに未だ二十代の若さであった。たま夫人はお見合いの時、下を向いていたので気が付かなかったそうだが、昭和十八年正月の鎌倉八幡宮での武運長久祈願の写真の時、四十一歳、殆ど髪の毛は認められない。

松本正雄先生の訃報に接して

石井　徹（昭和三十年卒）

過ぎし三十年余も前の事か、西松会・会社を通じての敬愛する先輩、故堤光義氏とある時松本先生の噂をしていた。「・・・・公明正大で真の正義の人とは松本さんのような人の事だ。・・・・」と。

昭和二十九年の就職難の時、同期の高田勝巳君と夏頃から西荻のお宅によくお邪魔をし、親身になって就職の相談に乗って頂いた。「・・・一次（筆記）試験に通ったら会社に話をして上げよう。・・・・」と言って下さった。そして一次試験の通過をすると、多少身体に不調が窺われた私を、お話し通り会社（東京ガス）に押し込んで下さった。

昭和三十六年、結婚の約調い、先生に御報告と立会御出席のお願いにお伺いした。その直後、奥様から「・・・・貴方のお祝、何にしましょう。・・・・」と御電話を頂いた。その時の奥様のお声は今だに私の耳に残っている。家内の父・故近藤淳が大平会でも親しくして頂いたご縁もあり、私共の披露宴に先生は快く出席して下さった。

また、先生は学生時代にはサッカーの試合に勝った報告と、後には西松会の後輩連中の社会

的地位が進んで行く事に本当に喜んで話を聞いておられた。酉松会のゴルフ会を川崎国際カントリークラブでやっていた時、ご高齢の先生はよく全員のスタートまで見送りに来て下さった。その時のお姿は今も瞼に焼き付いている。

私にとって最も忘れ難き事として、「・・・今度、斯様な仕事に就く事になりました。・・・・」と近況報告をしたところ、時の経営者に関するアドバイスを一言・二言して下さった。遥かに若い一後輩に対する親身の御指導には深く感じ入った。

先生は「・・・功を他日に揚げ、以て社会のために盡くすように・・・」とよく言われていた。省みて、文字通り浅学非才の此の身、全く先生の御期待には添い得なかった。申訳無く慚愧の念に堪えない。今は、我々酉松会の後輩に対する御生前の御慈愛と御指導に心から感謝し、御礼申し上げる次第であります。合掌。

松本先輩を偲んで

志摩　憲　一（昭和三十一年卒）

昭和二十七年四月、一橋大学入学と同時に、心に決めていたこともあり、ためらわずにア式蹴球部に入部した。この年は新入部員の豊作の年で、約十名の球友を得ることが出来た。

松本先輩との最初の出会いは、その年の夏の合宿にお見えになった時と記憶している。その時は、弁護士をしておられる大先輩であるということ以外、知る由もなかった。

明けて翌年、恒例と聞いていたが、一月十五日の成人の日に、皆と初めて松本先輩の西荻窪のお宅へ、新年のご挨拶にお伺いした。自宅が荻窪で近いこともあり、毎年お邪魔していたが、こうした機会を通して、次第に松本先輩のスケールの大きさ、豊かな人間性に触れていくことになる。

昭和三十年学生最後の年に、三商大戦の伝統と栄光を末長く残すため、一橋大学、神戸大学、大阪市立大学の三学長からの寄贈を受け、優勝の《学長杯》を創設した。その年の三商大戦に優勝し、当時の中山伊知朗学長に、この学長杯を胸を張ってお見せすることが出来たし、松本先輩にも「優勝は全員のチームワークの賜物だね。」と喜んでいただいた。　優勝カップに、

なみなみと注いだビールのうまかったこと、勝利の美酒に酔うとは、この心境かと思ったものである。

同じ年の秋、就職試験期を迎え、これも恒例であるが、七人全員で松本先輩のお宅をお訪ねした。

座敷に通された我々は、迂闊にも床の間を背にしたいわゆる《上座》に着座した。待つほどに先輩が見え。顔色が変わったと思うや雷が落ちた。

これから社会へ巣立つ若者に、長幼の序、マナーの基本を、厳しく諭されたものと、恥じ入るばかりであった。以後、七人のおめでたい三十一年卒組は、自省の念を込めて「七福会」と称し、松本先輩の意を体することにしている。

卒業後も、勤務地が遠い場合を除いて、概ね毎年酉松会でお会いしていたが、晩年には、よく、「役員になったかね」などと、夫々の会社での地位、役職を聞かれたものである。

東京商大の蹴球部の創設に参加し、以降七十年に亙り、後輩に物心両面の支援を惜しまれなかったその信念と愛情は、サッカーを通して一途に《心・技・体》を養い、世の役に立つ企業人、一橋人として成長して欲しいという衷心からのメッセージであったことを、遅まきながら五十歳の頃、ようやく悟ったのである。誠に悔悟の念に堪えない。

松本先輩は、酉松会の偉大な求心力として、我々の憶い出に残っているが、八面六臂の活躍をされた他の分野でも、人としての幅と深さの面で多くの教訓と感銘を与えられた。　敢えて言わせてもらうならば、　国、弁護士会、大学、如水会など、関与されたあらゆる《場》で残された大きな貢献、一橋初の最高裁まで極められた　法曹界でのチャレンジ精神、一生を通して、何事にも貫き通した信念と、妥協のない意志の強さ、など、ずしりとした重さで迫ってくるのである。

加えて、毎年の新年会や、お仲人をはじめ、松本先輩を陰になり日向になって支えてこられた、たま夫人の内助の功にも、自ずと頭が下がる思いである。

酉松会総会に、ご夫妻で出席された時、男社会の悲しさと言おうか、奥様のお話し相手をすべき夫人連の出席がなく、今でも当時の配慮不足が悔やまれてならない。

松本先輩は、我々の身近で、人の生き方の大きな可能性を示され、そして我々の前から去られた。大先輩の生き方には及ぶべくもないが、母校のサッカーメートに注がれた情熱を忘れずに、「酉松会・ア式蹴球部活性化」の火を、皆んなで燃やし続けることが、先輩に相応わしい餞けと思うのである。

謹んで哀悼の意を捧げます。

（九六年七月）

酉松会の新年会

嶋田英司（昭和三十二年卒）

学生時代、一月十五日のＯＢ戦に出掛けて行くのは正直言って憂鬱であった。リーグ戦も終わって全然練習していない、期末試験や卒論作成で時間を少しでも削りたくない、霜解けのグランドの悪さ、寒さ（トレーニングウェアといったものは誰も持っていなかった）等々憂鬱の種は幾つもあった。しかし、三・四年の時には、ＯＢ戦の後には「松本さんの御宅へ行けるのだ」と思うと気も晴れて来て、いそいそと小平に向かったものである。

当時、毎年松本さんの御宅で行われた酉松会の新年会では、戦前卒業の錚々たる先輩諸氏が居並び、学生部員は畏まって先輩の御説教を拝聴する羽目になるのが常であった。戦前の蹴球部の黄金期をご経験の諸先輩がお元気だった時期で、先輩方の目からは、当時関東大学リーグ二部にウロウロしている現役チームは歯痒くて仕方がなかったと思う。そこで、「部」可愛さのあまり、ついつい「現役はだらしない」と叱言の一つが出ても致し方なかった。それは覚悟の上で、後刻、松本さんの奥様が多大の時間をかけ丹精込めてお作りになった料理の数々と、大きな桶に盛られたにぎり鮨を戴けるのを楽しみにして、ひたすら拝聴するのである。

昭和三十年代の初めは、戦後十年が経過していたものの日本全体が現在のように豊かでなく、特に寮生にとっての食生活は極めて貧弱なものであった。朝は、毎日《素うどん》一杯。朝九時を過ぎると朝寝坊した寮生や外泊者の分が《放出》と称して飯台にならべられるので、うまくすると二杯目にありつけることもあった。これを寮生間では《ツバイ》（ＺＷＥＩ）と称していた。現在でも我々昭和二十八年入寮の同期生の集まりを《ツバイ会》と命名している。外食といっても、たまに餃子屋かラーメン屋に入る位で、とにかく誰もが先立つものを持っていなかった。卒業まで続けた同期サッカー部員五名は全員寮生であったから、今、振り返ってみて、誰も病気にならなかったのが不思議な位である。四年生の定期検診で胸の小さな空洞が石灰化していると診断され、精神力が病気に勝ったと、我ながら妙に感心したこともある。

そんな環境であったから、新年会の御馳走は、浦島太郎が竜宮城に行った時の様に思えて、誠に感激した。松本さんと奥様が我々を慈しんで下さるお気持ちを噛みしめながら、黙々と食べる方に専心したものである。毎年、先輩、現役を含めてあれほどの大人数の会食をご準備戴いたのは、サッカーだけでなく一橋人として立派に成長して欲しいとのご夫妻の後輩に対する底抜けの愛情がなければ到底できることではないと思う。寮生にとっては、奥様の笑顔により、家庭的雰囲気が味わえる貴重な時間でもあった。

当時は今ほどＯＢ会員も多くなく、部の運営費で歴代マネージャーは四苦八苦していた。春、夏の合宿に先立ち、先ずは、松本さんの事務所に寄付金を戴きに上がるのを常としており、そこで大金を頂戴した後、各先輩の勤務先を廻った。寄付金によって何とか合宿が営めたのであり本当に有り難かった。合宿を無駄にしてはいけないという気持ちにさせられた。先輩方からの関東リーグ一部昇格の期待を裏切り続け二部に止まるのがやっとという結果ではあったが、昇格のチャンスが全くなかった訳ではない。三年の時、六月の三商大戦で関西リーグ一部の神戸大に二ー〇で勝ち優勝、チームも志摩キャプテンを中心によく纏まっていた。一部のチーム数が七から八に増えるため、優勝すれば無条件で昇格のチャンスであったが、秋のリーグ戦では戦績が伸びず長蛇を逸した。今でも残念に思う。

当時、松本さんは我々にとっては既に雲の上の存在であり、直接ご指導戴く機会は少なかったが、「サッカー部は、学生らしい真摯なものたるべし」との松本さん達の部創設時の精神は営々と流れ継がれていた。入学直後のオリエンテーションの席で高田先輩より入部を勧められ、高校時代にやっていたハンドボールの部が一橋にはまだ存在せず、已むなく入ったサッカー部であったが、四年間やりつづけて本当に良かったと卒業後にしみじみと思った。

訃報に接し、昭和五十七年に発行された部の六十年史での松本さんの「巻頭の辞」を読み返してみた。明治人らしい骨太の価値観を持って、全ての事に対処されておられたこと感得し、また、戦死等でお亡くなりになったサッカー部の後輩に対する松本さんの熱い想いには涙を禁じ得なかった。

学生スポーツには、いつの時代でも勉学との両立に悩む問題がある。私も、途中で何度も止めたいと思った事はある。特に三年の時、一橋大学自治会で役員立候補者が居らず、自治会の存続が危ぶまれた際に単純な義侠心から役員となり、サッカーと並行して活動したため、ゼミの勉強さえ疎かになった。この時サッカーを切ろうとも思いつつその決断が出来なかったのは、我がサッカー部に《修行》みたいなものを感じていたからかも知れない。

現役諸君にも言い度い。

勉強は、卒業後何十年も続けるものであり、学生の四年間は、以後の自分の生き方の《コア》となる世界観、歴史観、自分で作り出した価値観といった哲学的思考を主として練る場ではないか。これが、松本さんが我々に期待しておられた最大の徳目ではなかったかと思う。

我々も、学生時代諸先輩から向けられた気持ちを現役諸君に対して持ち続ける。《一橋の名を背負って試合をする以上、是非とも強くなって欲しい》。《九十分走り抜く走力とダッシュ

力は、入学前の基礎プレイ修得度の高低とは関係ない筈》。《高度プレイのみに目を向けていても、四年間では限度あり。キック・アンド・ラッシュ、百姓一揆スタイルのサッカーが何故悪い》と。

現在の大きなサッカー文化の下のサブ文化として《一橋サッカー》が独自の主張をしてもよいではないか。温故知新なる言葉のある事も銘記して欲しい。

（九六年五月）

《あすなろう》の心

中路　信（昭和三十二年卒）

一橋のサッカー部に入ったことは、私にとって人生の転換点であった。

戦争で父を亡くしたため、一日も早く自立し妹達の養育に頑張っている母を楽にさせたいとの願望は強く持っていたものの、田舎で中学、新制高校を出れば何とか就職口位はあるだろうと思っていたのが、片親では推薦出来ぬなどの世間の風潮の冷たさにたじろいでいた。敗戦直後の日本はこんな様子であった。それなら就職には最も有利との評判の高い一橋大学に行けば何とかなるだろうと受験したが、そんな曖昧な気持ちであったから見事に落第した。一年間母と兄の農家の仕事の手助けをやって、遅れていた背丈も十五センチも伸び体力もついた。不退転の覚悟で二度目の受験をしたら天佑があったのか何とか合格できた。

こうして昭和二十八年四月大学に入学はしたが、相変わらず先行きのことは全く見通しは立っていなかった。学問をするのには基礎も全く出来ていないし、能力もないことが分かって来た。一方体力は持て余し気味となっていた。一橋寮の前のサッカーグランドで走り回る友人達を羨ましく眺めていた。夏休み後、もやもやした気分で上京し、意を決して当時キャプテンで

あった神代さんに「奨学金とアルバイトで自活しながらでもサッカーをやれますか」と質問したら、ご当人はその体験者だとの答えで即座に入部した。これで精力の発散先が決まり、私の体力勝負の人生が決まったのである。

シューズもシャツやパンツまで先輩のお古を戴いて部生活を始めた。足を靴に合わせるようなスタートであったが、先輩の有難さを感じた最初のケースである。

その後、練習やリーグ戦の試合の時に先輩方が入れ替わり立ち替わり来てくださり、サッカー技術を体や足を使って教えてくれ、一橋サッカーの精神論をたたき込んでくれた。サッカーの何も判らない時からスタートダッシュが悪いと厳しい叱咤が飛んで来た。「一橋のサッカーはサブでもつ」、「試合の時はサブも一緒に試合をしているのだ。選手と一緒の気持ちで戦え」、「練習や試合の時には上級生も先輩も敬称は不要。全員同じ立場と知れ」、「走り負けるな」、「練習で出来ないことは試合では絶対に出来ない」などの言葉が、どの先輩からも繰り返し聞かされた。「馬鹿になりきって練習に打ち込め。そうすれば道は自ずから開ける」と分かったような分からないような言葉を聞かされたのもこの頃であった。「サッカーを一生懸命やっていれば、就職のことは心配するな。先輩が必ず面倒を見る」の言葉は、小生にとっては何故なのかと半信半疑の気持ちはあったが、過去に信じられるものを失っていた者としては、全く有

難い言葉であった。これに賭けてみようと決心した。

二年、三年と続けているとサッカーの技術も進歩し、面白くなってこれから離れられない気持ちになると同時に、この部と戦前からのＯＢとの絆の強さを痛感するようになった。先輩方の部を強くする熱意と愛情が少しは理解出来るようになった。決定的であったのは松本さんのお自宅の新年会にお招き頂いた時であった。寮生にとって夢のような御馳走もさることながら、戦前のＯＢの兄弟のような交わりと松本さんご一家との家族的な纏まりは目が眩むような印象であった。松本さんに和して「一度の敗戦くよくよするな・・・男ならやってみな」のＯＢ連中の大合唱は、私がそれまでに持っていた戦後の暗い気分を一掃してくれた。このお仲間に入っていれば恐いものはないと確信した。松本さんに失った父の影を感じた。父性の感触を忘れて久しかったので理想の父親像を見た思いであった。

四年生のリーグ戦開始を控えて就職試験の季節が始まったが、先輩方は「リーグ戦中心の生活で良い、就職試験の方は何とかする」と言い、受験先のことをいろいろと手配をしてくれた。私の場合は二年上の高田勝巳さんと昭和十八年卒の瀬藤さんが自分たちが居る会社を受験するようにとのことであった。《重工業》と言うから大きな機械を作る会社だろう位の認識しか持っていなかった。それほど世間知らずの田舎者であった。しかしサッカー部の先輩のいる会社

ということで何の不安も躊躇もなかった。試験を前にして、瀬藤さんが会社の二人の重役の所に挨拶に連れて行って下さった。「この男は一橋でサッカーをやって来たものです。今度当社を受験しますのでよろしくお願いします」と紹介して下さった。私は側で頭を深く下げるのみであった。面接試験では「一橋でサッカーをやって来ました」とだけ言えば良い、との瀬藤さんのご教示であったので、勤労部長からの「大学で何をやりましたか」の質問に得たりや応と、その通り答えたところ「いや、勉強の方だよ」と逆襲された。「増田教授に就いてヨーロッパの土地制度史をやりました」とゼミもサボリ勝ちであったが何食わぬ顔で切り返した。しかし、身体検査で《血沈》が異常に高いとのことで《採用保留》となつて慌てた。こちらはリーグ戦を目一杯やっているのに頭脳ならともかく体が悪いという理由は納得出来なかった。瀬藤さんが大変心配して下さり、早速手を回して東大病院の沖中重雄教授の診察を手配して下さった。生まれて初めての大病院で、後で知ったことだが日本の第一級の内科医の診察を受け、その診断書で身体検査も一月後にクリア出来た。風邪で《血沈》が上がる体質であったらしが、その後何十年も病気らしい病気はしたことがないからこの診察は有難かった。かくして人生の大関門を先輩方の約束通りに通過できて、サッカー部の恩恵を身に染みて感じたのである。

会社生活も「一橋大学サッカー部卒業」で堂々と過ごせた。《先輩後輩のつながりを大事に

する》、《チームプレイを大事にする》、《目的に集中してやり遂げる》、《出足の大事さ》等サッカー部で学んだことが会社生活は勿論、社会人としての生き方に何よりも役立つことを実体験して来た。サッカーで鍛えた体力が物を言ったケースは数え切れない。私は海外で仕事をした期間が比較的に長かったが、特に苦労することもなくやれたのは体力があったればこそと、今にして思い返している。

結婚も人生の関門の一つとされるが、私の場合は田舎から母を呼んで数人の親戚とゼミの恩師、サッカー部の先輩同僚、会社の友人を招いての手作りの結婚式であった。旧如水会館での実にささやかな披露宴に松本大先輩にご出席戴いて感激した。司会の友人に頼んで大先輩のご挨拶をお願いした。「かかる場合は、事前に予め了解をとっておくものだが・・・」と切り出され、自分の世間知らずに顔が真っ赤になり折角のお話しが頭に入らなくなってしまった。しかし、最後に「・・・この男は一橋のサッカー部でやり遂げた男であるから、絶対に信用出来る男である」と締め括って下さった。この時のご教訓とお寄せ戴いた絶対の信頼感はその後の私の大きな人生指針となったもので、終生忘れられない思い出である。

昭和五十年頃、大先輩が亡父と同年生まれであることを知った。会社が松本さんの事務所の隣のビルであったことから、時々東京駅や丸ビルの辺りでお目にかかることがあり、「仕事は

頑張っているかね」等と声を掛けて戴き、心秘かに父親のように敬慕し「かくありたい」と思ったものであった。しかし三十年以上の大先輩であり、会社の先輩の藤塚さん、瀬藤さんがお元気な頃で、このお二人に話をすれば会社のことも人生のことも何も惑うこともない訳で、大先輩に直接教えを乞う機会も、その必要もなかった。酉松会の総会で御挨拶してお話しを拝聴したり、ゴルフ会で温顔に接することで満足していた。

近年になって、会社の後輩で藤塚さんの部下であった九大出身のK君が、かって藤塚さんに連れられて事務所を訪問したことをキッカケにして、時々大先輩の事務所に伺ってお話しをお聞きしていることを知って、《雲の上の人》として遠くから憧れ見ていた大先輩に自分も親しくお話しをしたい衝動にかられた。晩年にはお仕事は控えておられ、秘書の高野さんに頼めば空いている時間にお会いできることが分かった。近況ご報告ということでお会いし昼食を御馳走になって念願が叶ったが、こちらの勝手な気持ちで度々と言う訳には行かなかった。

昨年、阪神の大震災の後「関東大震災時の後藤新平」の事を書いたら産経新聞が採り上げてくれたので、丁度大先輩から戴いた寒中見舞いの返書として同封し、関東大震災時代の母校のことをご教示戴きたいとお願いして見た。数日して高野さんから電話を貰い、事務所に来るようにとのご指示で喜び勇んで出掛けた。松本さんは意外にも沈鬱なお顔でこちらも緊張した。

「実は、震災後明石君の消息を八方手を尽くして探していたのだが、家は崩れ入院中のご本人は豊中市に転院、奥様はその近所のホテルに避難されていることがやっと判った。取敢えず見舞金は送ったのだが、この年齢では見舞いにも行けないのでね」との話で吃驚してしまった。こちらも震災後チームメートの状況はたずね無事を確認していたものの遠い先輩のことまで気が回らなかった不明を恥じたが、改めて松本さんの友誼の厚さと、心から心配されている姿に感動した。「直ぐに在阪の酉松会員に行ってもらい松本さんの意向を伝えるよう手配します」と申し上げ、少しは安心して戴くことが出来た。その後一時間位かけて関東大震災当時の母校のことや、ご自身のことなどお話を伺うことが出来た。いずれも感動する話ばかりであった。これを機会に、明石さんのことのご報告や、二・三の書き物を見て戴くのに事務所で数回お会いすることが出来た。拙い書き物であったが読んで下さり「よく勉強しているね、頑張りたまえ」と励まされた時には、正に小学生が父親にほめられた気分であった。

今年初め松本さんの御訃報に接した時には、実父を失った時にはわからなかった喪失感を味わった。哲人の逝去というべき大往生であられたが、私はその魂魄がまだ漂っておられるであろう辺りに居続けたい気持ちで一杯であった。

松本さんを失って、改めて自分がサッカー部・酉松会に育てられたことを痛感し、有難味を

噛み締めたが、この部と会を作り、生涯かけて育成されてこられた故人の偉大さを偲んでいる。故人の視点は生涯を終えられた後のことまで見据えられている。故人の器量、精神力の強さ、全ての面で遠く及ばぬことと自覚しながらも、サッカー部・酉松会を愛する気持ちに於いて、一歩でも近づこうと《あすなろう》の心を持ち続けたい。

感謝の念を込めて、お誓いの言葉を捧げます。

（九六年五月）

◆簿記の授業

一商の講師となって、簿記を受け持ったのか、受け持たされたかした。進学中心の中学校出身の先生が簿記ができる訳がない。最初の授業の時、開口一番「私は簿記がよく解らない。諸君と一緒に勉強しようと思う」。

（一商ＯＢ 西野 博氏談）

酉松会と松本大先輩と大震災

佐竹 明和（昭和三十二年卒）

一九九五年一月十七日早朝、京阪神地域に住む者は一人残らず激しい震動で叩き起こされた。その日から暫くの間、公私にわたり混乱と悲劇の日々が続いた。当地域在住者でその親族・友人・各種関係者等も含め直接・間接の被害を受けなかった事例は皆無である。これらのことは、既に言い尽くされており、皆様ご承知の通り故、これ以上の繰り返しは避けることとしたい。

私自身は、幸いにして直接の被害を受けることはなかった。しかし、多くの人と同様、勤務先で日夜戦争状態におかれていた。私は辛うじて運転されていた京阪電車で通勤出来たが、他の多くの公共交通機関は不通であり、勤務先は開店休業状態であった。社員・取引先。関係先等と連絡を取り合うだけで、全く手一杯であった。そういう情況下、申し訳ないことながら、関西酉松会会員の皆様のこと迄頭が回っていないと言う次第であった。数日後、酉松会東京の中路氏（同期）等（以下《東京》という）から問い合わせがあり、慌てて電話をかけまわり、一部の方は、家屋・家具に大小の被害を受けられたが、深刻な傷害の事例は無かったことが確

認出来た。ヤレヤレであった。

ところが、更に数日後、《東京》から松本大先輩の依頼で、同じく大先輩の明石さんについて問い合わせが来た。入院中であった明石大先輩は、家は震災に遭い、ご本人は病院の被災で転院、奥様は転院先近所のホテルに避難中とのことであった。調査の上、早速入院先の豊中市立病院に家内を連れて駆けつけた。震災とご病気が重なったのでは、出来るだけ人手が多い方が、それも女手があった方がよいと思ったからであった。病院に到着後病室の入口で会った奥様から、「たった今、息を引き取りました」と伺った時のわが夫婦の驚きは、ご想像に任せたい。持参したお花とお見舞いは、思いもよらず、お供えとなってしまった。

大先輩のお顔は、多少ご病気の名残はあったが、割合しっかりとされ且つ穏やかな感じで、以前お目にかかった時の記憶通りであった。

お通夜・翌日のお葬儀は、震災復旧に不眠不休の活動している会社（大阪ガス）の後輩に対する配慮からの、奥様の強いご意向により、小規模になされたが、心の籠もったものであった。酉松会メンバーも交替で参列させて頂いた。非常に印象深かったのは、お宅は震災で半壊状態、ご主人はご逝去という大変な情況下、失礼ながら老齢の奥様が極めて毅然として些かのうろたえも見せられなかったことであった。ご葬儀の後、酉松会の松本由之（昭和二十六年卒）田原

洋二（昭和二十八年卒）の両先輩にお伴して、明石大先輩のお宅に伺った。静かな住宅地のお宅は見た目には半壊乃至一部損壊だったが、住むのには明らかに危険と思われる状態であった。

数カ月後の五月下旬、再度伺ったところ、その前日に取り壊し完了した由で既に更地になっており、ひとしお感慨を覚えた次第であった。

その後の経過については、酉松会の後輩、村林昌二弁護士（昭和四十年卒）からの手紙を、同弁護士並びに奥様にお断り無しながら、以下に引用させて頂く。

亡　明石毅様（昭和二年卒）の件

（前略）

さて、明石様が震災後の二月十日に亡くなられて、はや一年有余が経過いたしました。その間、亡松本正雄先生のご指示を受けて私が後処理に当たりましたので、その経過につき、大略ご報告申し上げます。

明石様と奥様久子様との間には子女がなく、久子様は元々東京の出身で、実弟・実姉は東京に在住しておられます。また、久子様と松本先生の奥様とは古くから昵懇にしておられる関係もあって、明石様亡き後何処で生活するかに就いては、東京移住を

決められました。

そこで上記を実現するため、私が昨年三月から、相続関係の処理（子女はありませんが、他に法定相続人がありました）や、豊中の自宅土地の売却事務に当たりました。自宅売却には時間を要しましたが、それは、自宅建物が古く、震災で半壊状態になったためこれを撤去する必要があったこと、隣地との土地境界が明瞭でなく交渉解決する必要があったこと、などのためです。しかし、これらも何とかケリがつき、昨年十二月に売却することが出来ました。

久子様は、この売却代金等を原資にして、現在、東京杉並区にメディカル　ケア付きのマンションを購入し居住を開始されたところです。（この購入については、松本先生の奥様やお嬢様ー昭和39年卒石綿氏夫人ーの多大のご尽力があったようです）

というような訳で、久子様の件も曲がりなりにも一件落着した状態なので、明石先輩が亡くなられた折、色々ご心配された諸先輩に報告しておきます。

（後略）

以上が明石大先輩が亡くなられた時の経緯だが、私にとって、いろんな面で感動の連続であ

った。これを、簡潔に箇条書きすると、

① 松本大先輩の明石大先輩に対する厚い友情と涙ぐましい思いやり。

② 西松会の先輩・同輩・後輩を含めた、メンバー全体の一体感。

③ 卒業後40年経って、今更の様に痛感した西松会の存在感。

ということに集約されると思っている。

私自身は、運動神経鈍く、体も堅くて全くサッカーに向いていなかったのに、ともかく四年間の一橋大学ア式蹴球部生活を送れ、卒業後は胸を張って出身学部はサッカー部と言えるようになった。これは一方ならぬお世話になった先輩、寮生活も一緒に送った素晴らしい同輩、至らぬ私を色々と慕ってくれた後輩のおかげである。

私が卒業後入社した会社（住友商事）では、私が西松会メンバー第一号であった。嬉しいことに、その後毎年のように後輩が入社してくれた。十年余り経つと西松会メンバーだけでサッカーチーム（それも補欠交替選手を含め）が編成出来る迄になった。私は、《先輩がいいから後輩が入り易くなった、いい先輩を慕って後輩も集まった》と威張った。後輩共は、《あの佐竹先輩でも入れるのだから入社は大丈夫、易しいと集まってきただけだ》と言い張った。なつ

かしくも嬉しい思い出である。サッカー部と酉松会についての、そういった思い出話は数限りない。

卒業後40年余り、会社生活は大阪と海外のみ、私生活でも関東に住むこと無いまま、はや老年の時期になってきた。忙しさに怠けて、酉松会・東京の皆様にはご無沙汰ばかりで歳月が過ぎ去った。誠に申し訳なく、又自分自身残念至極に思っている。しかしながら、酉松会のことは常に頭と心のなかに暖かく存在し続けて来た。酉松会の皆様どうぞ今後共よろしくお願い致します。　酉松会、万歳！

（九六年九月）

松本正雄先輩の想い出

駒井　康（昭和三十四年卒）

私の部生活は昭和三十年四月から昭和三十四年三月迄であったが、ようやく日本が戦後の混乱を脱し、世の中が安定し始めた時期だった。とは言え、家庭の電化、日常の食生活等々現在とは比較にならない程貧しく、特に国立大学の学生は貧しい学生が多く、いろんな機会に諸先輩の御世話になる事が多かった。

昭和三十三年三月末、鈴木久也主将を中心に春の合宿が始まり、私はグランドマネージャー兼主務（こちらの方は三年の石原良三君に大いに助けて貰った）として新チームがスタートした。

我々の年次（昭和30年入学）はサッカー部員は新入生も4名と少なかったが、昭和31年、32年、33年は大量の新入部員を迎え、部の運営も、予算のやり繰りも大変な時期を迎えた。私の記憶では、当時大学当局から支給されるサッカー部の予算は僅かに8万円（年間）だったと思う。当然の事乍ら大半の予算がＯＢの寄附によって賄われた。

新シーズンの始まる直前に、松本先輩の西荻窪の御自宅へお伺いした時も『ＯＢからの寄附

を頂いて、それでも足りなければ幾ら足りないと申し出なさい』がマネージャーへの第一声であった。部の運営は、レギュラーと一部下級生を含むグループとその他のグループの二つに分けて練習が開始された為、グランドマネージャーは二人必要、ボールも2グループで、約20個が最低線であった。加えてこの年は、三商大戦の当番校が神戸大であり遠征費用が余分に要る。

三商大戦は、昭和30年と32年は地元で行われ、昭和31年は遠征の年であったが秋のリーグ戦の去就が終盤まで判らず最悪の場合は三部との入替戦も懸念され、当番校、大阪市大が主催の試合には棄権せざるを得なかった。この時、前年度の優勝カップを小生が一人で大阪に持って行く役目を命ぜられた事を憶えている。

従って関西遠征にはどれ位の費用がかかるかは全く不明であった。春の合宿が終り、思いあぐねて私一人で早朝松本邸を訪れ、解決策としてＯＢの寄附額を増額する事を松本先輩に御相談した。氏は難色を示され、特に若いＯＢの額をこれ以上増額してはならないというもので、前述の如く『足りない分は私が何とかする』を繰返された。今迄通りの額で進めると松本先輩にお願いする額が途方もない額になることが明らかだったので、小生も懸命に食い下がった。即ち、年次別に加算額を変えてでも実行したいと主張した。対談は延々一時間に及び、お出掛けの時間が来た。氏は、『瀬藤君の意見はどうかね』とポツリと一言。その数日前、私は丸の

内三菱重工に瀬藤先輩を訪ね、予めこの事の同意を得ておいた事は言うまでもない。今や、この瀬藤先輩も故人となられてしまった。

松本邸を辞して西荻窪駅へ向かって歩き始めた小生は肩から急に重いものが無くなった感じがした事を今でも記憶している。

予定通り三商大戦で西下、神戸大に3－1で敗れ2位。秋のリーグ戦は3勝3敗1分の第四位に終わったが、当初から三部との入替戦の心配はせずに済んだ。

リーグ戦終了後四年生四名が揃って報告に西荻窪へお邪魔した際に『部員が多くて大変な年だったね。若い世代が一つの事に打込むのはまたとない機会だ、応援するよ』と言われ涙が出そうになったものだった。

昭和三十四年正月、恒例の一月十五日の松本邸での新年会では、松本先輩自らが先輩諸氏の前で『ＯＢの寄附額を上げざるを得なくなったが御理解願いたい』と仰言ったのには驚いた。最後に私の方を向いて『駒井君のねばりには参ったよ』と言われた。この時程、一橋のサッカー部は良き先輩に恵まれていると痛切に感じた事はない。

私は現在、上石神井に住んでいる関係で、出張の帰りに西荻窪駅からバスやタクシーを利用

する事が多い。当時の西荻窪の駅は高架ではなく東口に大きな踏切があったが、今は高架の下をたくさん車が走っており昔の面影はない。しかし一歩北口の一番街、商店街に入ると、その昔松本邸へ通った時の感じがそこここに残っており、私の学生時代の想い出の一つとなっている。

社会人になって、大阪勤務が長く、二度に亘る海外勤務の為に、松本先輩にお会い出来ぬまま、帰らぬ人となられた事が悔やまれる。逆にそれが四十年近く経過した今日でも、鮮明な記憶として残っている理由かも知れない。偉大な先輩に合掌。

（九六年八月）

松本先輩の思い出

今村　秋夫（昭和三十六年卒）

「松弁」こと松本先輩と私との最初の出会いは、確か大学二年の春だったと思う。ＯＢ・現役戦が行われる五月連休の或る一日、若手ＯＢと練習が始まって暫くすると、小平のグラウンド横の松林の中から着物姿の太めの黒縁メガネをかけた大柄な禿頭のオッサンが、我々をじっと見ているのに気がついた。近所の人が散歩の途中かなと見ていると、次々とＯＢが挨拶している。「誰ですか？」と先輩に聞くと、「一番古い先輩で、一橋サッカー部の生みの親だ。弁護士なので通称「松弁」と言う松本正雄大先輩だ。」と説明があった。大学二年生の私には、その時点では「ああ　そうですか」で終わり、それ以上の説明も必要なかった。

三年の終わりに次年度の主将に任命されてから、松本先輩とのお付き合いが始まった。主将としての挨拶、数カ月毎の戦績報告、年度終了の報告と挨拶等を、毎回午前七時頃に学生服着用で西荻窪の松本邸にお伺いし、その都度、先輩からご寄付を頂くと言うのが、私と日巻マネージャーの役目であった。僅か十五分前後の緊張した面談であったが、今にして思うと、松本先輩もお仕事で最も忙しかった頃ではなかったかと思われ、御出勤前の貴重な時間を後輩学生

の為に年に何回となく割いて頂いた事に対して頭の下がる気持で一杯である。また、奥様が、我々若造に対して何時も暖かい笑顔で「ご苦労様」と声をかけて下さり、お茶を出して頂いた事も懐かしく思い出され、改めて厚く御礼を申し上げたい。　一橋サッカー部主将として松本先輩と「公的」なお付き合いに加え、私は、結婚に当たり、松本先輩御夫妻に媒酌人をおねがいし、「私的」な面でも大変お世話になった。はっきり言って学生時代の、それも四年生の一年間に於ける松本先輩とのお付き合いで、何故媒酌人を松本先輩御夫妻にお願いしようと思ったのか良く判らない。おっかない感じの印象しかない松本先輩に何か人間的な魅力を感じていたのかも知れない。最高裁判事になられる様な偉い人と言う意識は失礼ながら全く持っていなかった。ぶっきら棒で簡潔に必要な事をストレートに歯に衣着せぬ物の言い方に、サッカー部の先輩としての関係以上のものを私が求めていたのかも知れない。何れにしても、松本様御夫妻には、お忙しい中、私達夫婦の為に媒酌の労をとって頂いた。自宅が近い事もあり、その後、永年に亙り、厚かましくも女房共々人生の御指導を賜りお礼の言葉も表し様がない次第である。奥様におかれては御健康に呉々も御留意され、昔と変わらぬ笑顔で私達夫婦との会話を末永く持って頂ける事をお願いするや切である。

松本先輩の思い出を語るに、長々と美辞麗句を重ねる事は先輩に怒られる丈かもしれない。

逆に、紙面が幾らあっても足りないかもしれない。明治の気骨を持った日本人が徐々に逝く中で、又《巨星》が一つ消えてしまったと言う感慨一入である。

一橋サッカー部の創設者であり、「酉松会」を心より愛されておられた松本先輩の、ご冥福を御祈りする最良の方法は、残された我々後輩が、力を合わせ、この組織を維持、発展させて行く事と思う。松本先輩に、この事をＯＢ・現役全員で約束し、ご霊前に捧げようではないか。「了」

（九六年六月）

『恭倹持己』

日巻久匂男（昭和三十七年卒）

在学時の小平分校の住所表示は、東京都北多摩郡小平町小川だった。そして、小平グランドのシチュエイションは、玉川上水に沿って東西に長かった。東側のゴールの後方に、大きな松が5本ほどあった。そして、ゴールの上水よりの後方にキックボードがあった。

松本大先輩（ア式蹴球部から先輩への通知には大先輩と書いていた）に最初にお目にかかったのは、2年になる春の小平合宿の時だった。大先輩は、ボードの前に和服姿で腕組みをされていた。

その年の合宿は、今は取り壊された柔道場だった。柔道場は体育館に畳を敷いただけで、天井が高く、3月の小平の夜は寒かった。合宿中に降雪があったことも寒さを一層厳しくした。その頃の合宿は布団と米を持参していったので、合宿入りは2日がかりだった。

まず、米と着替えを運び、当日に布団を持ち込んだ。合宿の最終日はOB戦が恒例となっていた。OB戦の常連は、堤・高橋・針谷・石井弘・高田勝巳・石井徹・志摩・橋本・馬場・福江・中岡・嶋田・中路の諸先輩だった。中岡敬雄・嶋田英司さんからは強烈な印象を受けた。

お二人からは『サッカーの心』を教えて頂いた。

当時は、まだ西松会には規約も無く、総会も開かれていなかった。毎年正月十五日に、OBと現役の3・4年生が、西荻窪のお宅に集まり、現役から前年の報告と新年度の陣容などを披露していた。火鉢の前で、木遣りを謡われていた大掛先輩の美声が忘れられない。　4年になり、グランド・マネージャーとして、その年の方針の説明にというか寄付を頂戴に伺った。事前に電話で日時を決め、西荻窪に伺った。『いくらいるの』と聞かれて、金額を言うのは戸惑いがあった。大先輩のような年長の方と話をするときは、こちらの意向を明確に伝えなければいけないということを教えられた。

4年の年・昭和35年は、日本の進路が変わった年だった。安保国会後、岸内閣から池田内閣に代わり、その年の秋には、泥沼化していた三井争議も中山中労委会長の裁定で決着した。

その年、今村主将の強い意向で、小平以外で夏合宿を断行した。その説明に、早朝、西荻窪のお宅にお伺いした。其の際、『話は判った。一橋の学生であることを忘れるな。君は声が小さい。もっと大きな声で話なさい』と助言された。そして、群馬県・湯桧曽での合宿することができた。

7月半ば、4年全員で就職の相談に伺った。卒業前には、新宿駅の側の料理屋にご招待して

頂いた。

同期のゴール・キーパー村上信勝君の結婚式に、主賓として池田総理と並んで座られ、首相より先に、恐縮されながら、祝辞を述べられた。大先輩に続いて指名された池田総理は、教育勅語から『恭倹、己を持し』という言葉を引いて祝辞とされた。『寛容と忍耐』をスローガンに掲げて登場した池田内閣だったが、それまでの高圧的という印象の強かった池田総理から『恭倹、己を持し』という言葉を直接聴き、新鮮な思いがした。

勤め先が船橋になり、住まいも船橋になってから、小平は遠くなった。昭和55年、公私ともにお世話になった松浦巌先輩が亡くなった。間もなく『60年史』刊行の作業が始まり、それに参画した。

昭和59年1月に右脳内出血で倒れ、5月まで入院した。病気したお陰で、小平通いの時間ができた。その年の秋のリーグ戦から1試合を除いて、全試合を見ることが出来た。初めの頃、対戦する双方共赤いユニホームを着ていないので、どちらが母校か判らなかった。一橋のユニホームは赤という固定観念があった。回を重ねるうちに、顔と名前が一致するようになった。ユニホームの色が変わったように、蹴球部は変貌して仕舞ったという声を聴く。東大の今も変わらない白のユニホームを見るにつけ、赤を着ない一橋には、一抹の寂しさを感じない訳では

ない。しかし、グランドへ度々足を運び、顔馴染みとなると、変わらないものの方が目につく。ちっとも変わらない現役の姿に、苦い懐かしさを想い出す。松本大先輩は、勝ったときは『良かったな』負けたときは『この次は、頑張れ』としか言われなかったと云う。現役は、なかなか満足させてくれる試合を見せてくれない。現役に自分達が果たせなかった夢を求めているからなのだろう、勝っても、負けても、つい、苦言が出て仕舞う。大先輩は、後輩のなかに『変わらないもの』をしっかり見ておられたに違いない。

4年間サッカーを続けることが出来、今も小平に足が向くのは、あのグランドに変わらないものがあるからだと思う。大先輩は、『続けること』を願い、信じておられた。私に続けられることは、リーグ戦を観ることくらいだが、歩けなくなるまで続けたいと思っている。

現在の小平グランドは、南北に長い。八重桜がサッカー・ホッケー・野球・アメリカン・フットボールのグランドを囲み、季節になると重たい花をつける。キック・ボードの位置は変わった。ゴールの後方の松はもう無い。

（九六年六月）

《如水会々報　平成二年五月号　橋畔随想より》

酉松会　七十年の顔

大野章雄（昭和三十七年卒）

去る三月七日、如水会館スターホールに、ＯＢ・学生合わせ二百人ほどが集まり、盛大な会が催された。大正十年に本学サッカー部の創立に参画され、以来七十年に亙り、文字通り大黒柱としてサッカー部の面倒を見られた松本正雄大先輩（大正十五年学卒）の米寿のお祝いであった。当日は奥様もご同席され、お宅にお邪魔しては何かとお世話をかけた嘗ての紅顔の青年たちが次々とご夫妻の周囲に輪を作り、温かくそしてしみじみとした一時を過ごした。

松本先輩は、ご紹介するまでもなく、法曹界の大御所で、橋人として初めて弁護士会の会長、最高裁判事を勤められた方ですが、同時に、戦前・戦後を通じ、一橋サッカーの「顔」でもあった。戦時中には、任地を告げる訳にもいかず出陣していく若者たちの無事を念じつつ見送られ、サッカーを続ける意欲を散じかねない終戦前後の欠乏時代には、語気を荒らげて部員にその継続を励まされた。また、学生の就職先に何かと面倒を見られ、社会人になってからは、一人一人の成長に常に心を配られた。七十年の長き間、物心両面の支援を欠かされなかった。

一橋サッカー部が創立された大正十年は、大日本蹴球協会が発足し、第一回の全日本選手権が行われた年である。正に、日本のサッカー史と共に歩んだ七十年であり、戦前の関東一部黄金時代、戦後長らく関東二部での活躍を通じ、その間五十年は学生サッカーの第一線を維持した輝かしい伝統を持つ。三月七日の夕べには、この七十年を支えて来た顔と顔が、大黒柱の松本先輩ご夫妻を囲んでいた。

本学サッカーを七十年も支えて来たものは何か。松本先輩の言を借りれば、「言葉では言い表せない何物か。サッカースピリットというものがあり、それが人を作る」と。そこには、スポーツを通して人格を錬成する道場の如き意味合いがある。一方、多くの人は、青春の血潮が騒ぐ中に揺れ惑いつつ結局はボールを蹴ることから離れられなかったのではなかろうか。サッカー部六十年史に綴られている諸先輩の回顧にも、それは読みとれる。「ボールを蹴る魅力が身体に食い込んでいる状態」（松浦先輩）が基本にあり、それに勝つことへの執念がプラスされ、全人格を投入するような行動となって燃焼されてきたのではないだろうか。そのような燃焼が七十年も受け継がれてきたことには、大きな重味が感じられる。

しかし、時代は変わる。サッカーも一部エリート学生のものではなくなった。東京オリンピックあたりからサッカー人口は急増し、社会人は勿論、学生サッカーもスポーツエリートを集

めたところが強くなる時代になっている。昭和四十二年以降、五十年前後の三年間以外関東二部に戻れないのも、こうした時代環境と無縁ではあるまい。その中で、純正アマチュアの限界を極めるべく、一橋サッカー七十年を支えたスピリットが甦るべきであろう。奇しくも日本の高度成長と共に、その他大勢に埋没した本学サッカーは、世界の中で日本の指導性を問われている九十年代に、また不死鳥のように学生サッカーの一線に復帰してもらいたいものだ。

一橋サッカー部ＯＢ会は「酉松会」と称し、会員は既に四百名を越えている。酉松会とは、「城西の国立なる母黌の庭の老松のイメージから、学窓を離れてもいつまでも渝らぬ同志の心」（川村通先輩）を意味する名称である。この大集団が、サッカースピリットを基に、松本先輩が築かれたように、物心両面の支援を学生に集め、アマチュアの限界に絶えずチャレンジし、そして明日の日本にチャレンジし続ける後輩の育成に少しでも貢献できればと思う。　以上。

九十年五月号の如水会々報に松本先生について書いたものがありますので、
追悼文集の原稿に代えさせて頂きたいと存じます。　（九六年五月四日）　大野

恩　師

― 長銀との出会い ―

石　井　暢　生（昭和三十八年卒）

松本正雄大先輩（松本先生）に初めて面識を得たのは、小生が大学四年生になる昭和三十七年正月の恒例の新年会の席でした。それは翌シーズンの最上級生としての挨拶に参上した時です。広い縁側があった西荻の松本邸には、既に数十人の先輩諸兄が年始挨拶に来ており、奥様及びご家族の正月の手料理が所狭しに並べられ、我々現役は縁側のスペースでご馳走になった記憶があります。

二度目にお会いしたのが、その年の六月中旬、四年生全員西荻のご自宅に招かれ、就職相談の時でした。小生は、その時点では就職するか、学士入学してもう二年別の学部をやるか迷っていた時期です。松本先生は、小生が銀行に就職を考えるならば、「設立して十年に満たないが、社会的意義のある《日本長期信用銀行》に行ったら良い」と言われた。しかし、その時点では、小生がその銀行に就職することになるとは想像だにし得なかったことでした。

当時の就職活動状況は、どちらかと言えば、求人難の時期で、七月初旬、国立の各教室で各

企業が就職説明会を開き、学生が希望の会場（教室）に自由に参加し、企業選択を行う形式であった。

小生が就職するキッカケになったのは、午前中の予定の講義が休講のため、何とはなく就職説明会場に目をやると、《日本長期信用銀行》の案内が出ており、サッカーの練習時間までの時間潰しに会場に顔を出したことだった。連続4日、長銀から呼出しがあり、5日目の役員面接の直前、松本先生に長銀の就職試験に挑戦しており、明日役員面接がある旨を説明したところ、先生から貴重なアドバイスを得ることができ、無事就職試験をパスしたという次第です。当時《日本長期信用銀行》という銀行は、一般には知名度が低く、親類・知人に説明するのに一苦労したと言うのが本当のところです。「ワリチョー」の銀行と言った方がなじみが深かった。

その年の秋期リーグ戦は、関東大学二部リーグ3位となり、部の戦後の歴史で最高順位を確保し、グランドマネジャーの責任を一応果たし、ホッとしていたところに、卒業直前の三月三日、ある親善試合でメンバー不足の応援に駆け付け、ここで不覚の大怪我を受けることになってしまった。鼻骨及び鼻骨上部顔面陥没骨折、左目上部骨折、左目視力低下、顔面左神経麻痺といった状況で、命拾いしました。手術2回、入院日数48日間に及び、このため大学卒業式、

長銀入行式に出席出来ない状況でした。

松本先生に怪我の報告をすると共に、厚かましくも銀行へ提出する身元保証人になって頂くようお願いしましたところ、身元保証人の署名を頂く際、先生から「私は、今まで誰に頼まれても保証人になったことは一度もない。一生一度の保証人になることにする。ついては、私が保証人になったことを決して他人に言わないこと。長銀でしっかり頑張って欲しい。」と言われ、汗顔の至りと言ったところでした。非常にプレッシャーを感じた記憶があります。

小生が銀行に出勤したのは、四月十五日まで入院していたため三週間遅れの四月二十二日で、入行辞令及び初給与（当時十日が給与支給日）を入院中に頂戴し、誠に面映ゆい気持であった。怪我の功名と言えば良いのか、役員を始め、大部分の人に怪我で入行が遅れていることが知れており、一人一人個別に挨拶及び怪我の説明をする羽目になりました。

松本先生は、長銀の顧問弁護士でしたので、入行後間もない六月下旬、長銀株主総会当日、総会開催の直前に私を控室に呼び出し、勤務状況、身体の調子などを尋ねられ、また銀行役職員へ紹介する等気を配っていただいた。恥ずかしいやら、嬉しいやらといった気持ちであったことを思い出します。その後の松本先生との面談は、毎年正月、松本邸での恒例の酉松会会員の集まりに参加し新年挨拶を行い、無事長銀に勤務していることを報告する慣例が出来上がり

ました。

昭和四十三年春、縁あってその秋に結婚することとなり、媒酌人についてご相談したところ、松本先生は「銀行の上司の都合がつかなければ、自分が引受ける」とサゼッションしていただき、最終的には御夫妻に主賓でご出席いただきました。大怪我した小生が、家庭を持ち、一人前に育った事を見て非常に喜んでいただいたことを思い出します。

昨年七月、大銀行になった長銀を退職することになりましたが、小生の長銀との出会いは、松本先生との出会いがあったからこそで、感謝に堪えない次第です。誠にありがとうございました。

御礼を申し上げ、追悼の辞とさせていただきます。

（九六年五月）

サッカーとのかかわり

野上　桂一（昭和三十八年卒）

小生は、親しく松本大先輩の謦咳に接する機会は少なかったが、卒業の直前、四年生部員を新宿の料亭にお招き頂き、前途を祝福して頂いたことを今でも鮮やかに記憶している。思えば、もう34年前のこととなる。

顧みて、ビジネス、サッカー、又家庭に誇るべきものもなく慚愧の思いばかりで、偉大な足跡を遺された大先輩の追悼号にふさわしくないかもしれないが、わがサッカー生活を振り返り、仲間の一員と認めてくれる皆様への感謝の念をこめて一文を綴りたい。

知らぬ間に会社の定年も近づいた現在、あらためてサッカーと自分との関係が深かったことに気が付く。つまり、自分と他人とを区別して認識してもらう材料の一つがサッカーであり、高校、大学、会社とサッカーにからんだ自分の生活であった為、その功罪はわからぬが、《サッカーの野上》と考えてくれる人がわりに多い。

自分のサッカーの水準がどの程度であったかは、自分では技術的にもそれなりのプレーが出来たと思っているが、客観的に見ればたいしことはなかったのかもしれない。自分で一番残念

に思っている事は、近視で視力が劣っている為、裸眼でのプレーには限界があり、ごまかしながらやったが、これでは奥義が究める事が出来ないとの思いをしたことである。このハンデがなければ、あるいは自分のサッカーももう一段上に行けたのではと、思っている。

近視は一種の身体障害者で、メガネやコンタクトレンズで矯正出来るものの、メガネのサッカープレーヤーはいないし、当時はハード・コンタクトしかなく、会社に入ってからは何回か試してみたがなじまなかった。プレー中、味方同士は仲間の目を見て次のプレーの判断をする。いわゆるアイコンタクトである。視力が弱いと、味方も受け手が気がついているかどうか判断出来ず、パスを出して良いものか、どうか判断に迷う。受け手が何となくボーッと見ているからである。つまり味方同士の意志疎通が図れない。最近スポーツでの視力、従って判断の速さ、が盛んに論じられているが、その通りだと思う。

こんな思いはあったが、高校時代は都立大付属のサッカー部で、青山学院、明治学院、小山台、工大付属、大森などが加盟していた東京都南部リーグで試合をしていた。FWで出ていたが試合ではあまり勝てなかったように思う。一橋に来た都立大付属の後輩には、高峯君（昭和四十三年卒、三井石油化学）がいる。

大学時代は皆様ご存じの通りである。

卒業して日本鋼管（NKK）に入社したが、直ちにサッカー部に入り実業団リーグで試合することになった。全部の試合に出場する程ではなかったが、チームは国体では上位を占め、社会人大会で優勝するなど好調であった。入替戦を制して日本リーグ（現在のJリーグの前身）にも入った。当時、小生もチームと行動を共にし各地を転戦していた。しかし、会社としてはチームがセミプロ化することを怖れ、強化にあまり積極的ではなかったので、リーグに参加して行けるよう会社への働きかけに努力した。先輩の加藤（省）さん（昭和二十三年卒）が強力に会社サッカー部の後押しをして下さっていた。

このように、小生の場合、高校、大学、社会人と一貫して日本サッカー協会傘下組織のチームでのサッカーであり、同好会的サッカーの経験はない。時代の流れだったのかもしれないが、それが真っ当なものだと考えていた。

サッカーをやった縁であろうか、一九八七年から4年程、会社の仕事で南米のサッカー王国ブラジルに駐在する経験を持てた。ここで、ブラジルとサッカーにまつわる若干のエピソードを紹介しておき度い。因に、酉松会には故 桃井さん（昭和31年卒、日商、リオ支店長をされていた頃、小生出張時に御自宅にお招き頂いた事を思い出す）、中路さん（昭和32年卒、三菱重工）古川君（昭和40年卒、三菱商事）のブラジル駐在経験者がいる。

リオ駐在中のある日、コパカバーナ海岸のシュラスカリーヤ（串刺し焼き肉料理店）で何人かと昼食をしていたところ、お揃いのブレザー姿の日本人団体が入って来た。何の団体かとの問いに「サッカーです」と言う。「ユース代表ですか？」と聞くと「いや、全日本です」とのこと。「そうですか、Ｂチーム？」と重ねて聞くと「Ａチームです」と胸を張って答えた。よく見ると、顔見知りの横山監督も来ているではないか。それまで立派な体躯の伯国選手を見慣れていたので、全員、いやに小柄で若く見えた。背広姿で着痩せして見えたのも見誤った原因かもしれない。（帰国後、駐日伯国大使公邸でのパーティで背広姿のＺＩＣＯに会った時にも、あのＺＩＣＯでさえ小柄に見えたから、グランドでの姿とは印象が違うものだと思う）。

その後、彼らと伯国代表チームとの親善試合が、ＶＡＳＣＯのホームスタジアムで行われ、我々も応援に行ったが、０－１で全日本は敗れた。しかし、現在では《全日本の顔》の井原選手が、相手のＴＩＴＡ選手と猛烈な競り合いをやって彼に脳震盪を起こさせてしまった。翌日の現地新聞はこれを大きく掲載し、井原の健闘を称えた。

このチームには、現在パープルサンガにいる望月選手もいて、彼が当時はＮＫＫ所属であったことから、リオの自宅に招き一家で歓談した。息子は彼から来伯した全日本選手全員のサインと、新しいサッカーシューズをプレゼントされ大喜びだった。翌日早速、日本人学校に持っ

て行き、友達に自慢したらしいが、仲間からは伯国代表チーム選手のサインや伯国製なら羨ましいが、日本のなんか欲しくないと言われた由。その時の学校仲間に、今、一橋サッカー部の現役で伯国留学している畑君がいるが、日本人学校には息子より一足先に入っており、体格もよく中学の同級生ながら親分格の畑君には、息子も頭が上がらない様子であった。

小生帰国後、会社のチームには三人の伯国選手や中米出身の選手が入って来て、新たな時代に入ったことを実感させたが、急激な企業環境の悪化により、二年前誠に残念なことに、会社のサッカー部は解散となってしまった。また、六・七年前人手不足が騒がれた頃、かっての会社サッカー部のエース田中氏（立教出身、横山氏の先輩）が単独で渡伯し、リクルートして来て、関連会社の現場に送り込んだ数十人の日系伯国人も、職場変更を余儀なくされたり、ブラジルに帰国することになってしまった。小生がいた現地子会社のセクレタリーや社員、その家族などの約半数が出稼ぎに来日しており、日本とブラジルをめぐる時代の変化の速さを痛感しているこの頃である。

Ｊリーグ、オリンピックでのブラジル戦勝利、ワールドカップなど日本でもサッカーの話題が多くなり世界的拡がりをもって来ている。小生もサッカーがとりもつ縁を大切にし、酉松会会員間は勿論のこと、内外の人々との出合いを大事にしていき度い。

我々一橋のサッカーを熱愛され物心両面の助力を惜しまなかった松本大先輩を偲び、これを通じて日本のサッカーの育成に大きな貢献されたことに感謝申し上げ、心より御冥福をお祈り申し上げます。

（九六年九月）

公民の授業

これは、先生お得意のもの故、《債権》《手形法》など解り易く講義してノートを取らせた。銀行・会社へ就職しても、なまじの《大学出》にヒケは取らなかったと感謝している。

（一商ＯＢ 佐々木寿男氏談）

追想

石綿浩之（昭和三十九年卒）

一月三日昼前であった。例年、子供・孫が一同に会する新年の集まりがあった。岳父の寝所に挨拶に行くと、寝間の壁に掛かっている扁額を指差しながら、まさに、破顔一笑、『この額のごとく、心清明、すっきりしているよ。とても爽やかな気分だ。悟りというものがどういうものか今漸く分かったような気がする。』と。

少々窶れた感じがするが、老顔には、一点の曇りもない晴れ晴れとした雰囲気を漂わせていた。扁額は、輪王寺門跡の書で『福寿海無量』と墨跡太く書かれていた。

岳父は、昭和八年から昭和十八年頃まで、浜松の方広寺に参禅修行し、大雄居士の名を頂いていた。私は、その熟達の人の言に何と答えて良いか分からず、ただ、呆然と聞いていた。

昔から、高僧の中には自分の死期を悟り、その弁えの中で身を処する話を読んだことがある。義姉が元旦に、賀状の返礼の寒中見舞の手配を相談したところ『一月四日に死亡通知を出すので無用』と答えたとのことである。

もしかしたらあの世とやらを、素晴らしい福寿海を、少し垣間見たのではなかろうか。

想起すれば、約三十年間、身近でその謦咳に接してきて感じた明治生まれらしい気骨と骨太の人生のバックには、参禅して培われた精神の鍛えがあったことに思い至らせられる。

最高裁判所に入ってからの日々は、六十五歳に近い年齢にも拘わらず、毎朝六時前から調べものに没頭していた。最高裁判事を退官してからも、日光東照宮と輪王寺の百年に亘る係争に心血を注いでいた姿勢と生き方を見るにつけ、もっと、生前にその指導を受けておけばよかったと、悔悟の念に駆られる。

家族を、サッカー部を、一橋大学を、仕事を、丸の内総合法律事務所を、こよなく愛し、懐に入ってくる人を心広く受け入れる人であった。

漸く落ち着いてから整理していたら、戦前のサッカー部の人達の戦地からの沢山の手紙と、当時の部誌『蹴球』と言う小冊子を保存していた文筥が出てきた。何よりも大切な宝物ではなかったのかと思う。

最後に、生前並びに、新年早々の何かと多忙なとき、通夜から告別式にかけて酉松会の沢山の人々のご厚情に対し、改めて心よりお礼申し上げます。

（九六年五月）

骨太の人

森　岡　義　久（昭和三十九年卒）

一月四日、キャプテンだった池田君からの電話で、松弁さんのご逝去を知らされ、愕然とした。お葬式では、三十九年卒の同期が僭越にも棺付きの栄に浴した。お骨上げのあと、千駄ケ谷駅前のお清めの会場で、隣の老婦人が、「最後の最後までお元気でしたから、随分と太い骨でびっくりいたしました」といわれた。それは僕も気がついていた。

酉松会の一員として、みなさん同様、松弁さんには殊の外お世話になった。建て替え前の如水会館東西の間での酉松会の例会や、川崎国際のコンペでのお姿がありありと目に浮かぶ。

もっとも、学生時代には高くて遠い存在だった。恒例の一月十五日の新年会で西荻のお宅には、三年生、四年生と二回程お伺いしたはずだが、かしこまっていたこととしか記憶がない。卒業して長銀に入ったのは、一級上に石井さんがいたためであるが、西荻のお宅での“就職相談”の折に、「誰か日航に行かないか、長銀からも来てくれといっているが」といわれたのが、頭の隅にあったためとも思う。《サッカー馬鹿》の負い目と、世間知らずから、紹介状もいた

だかずに受験し、あっけなく採用決定となった。何のことはない、当時長銀には松弁さんのご友人の宮崎一雄さんが重役をされていたから、お釈迦様の手のひらの猿同様、先刻ご承知の出来レースだったのに違いない。長銀の顧問弁護士をお願いしていたから、丸の内総合法律事務所にも何かとお世話になった。

何よりも、親しくさせて頂ける機会に恵まれたのは、同期の石綿君が松弁さんのお嬢さんを娶られてからである。三田綱町の三井倶楽部での彼の結婚式の司会を仰せつかった昔から、赤堤の最高裁官舎で一泊した折のこともなつかしく思い出される。

僕らの同期は、もう何年も前から、かみさん同伴で新年会など年に一、二回の会食を続けており、一昨年からはゴルフも楽しんでいる。昨年、一昨年の軽井沢でのゴルフでは、石綿君の別荘にお邪魔して、信子夫人の手料理で夜のふけるのも忘れて飲みかつ語った。さわやかな高原の朝、赤松に楢やくぬぎが配された林の小径を伝って、同じ敷地内の別荘から松弁さんが仲間入りしてくれる。慈父のごとく、年下の者にも隔てをおかぬ気軽さで話しかけてこられる。曰く「国際連盟と国際連合の違いは何か」「細川政権の本質は何か」「日本の国益に資するとは何か」等々。お年を感じさせない若々しい話題に、僕ら五十の坂を越えた“むかし青年”は

圧倒されっ放しだった。

石綿君の別荘の一室に、俳人 裸馬・菅 禮之助氏の色紙がある。

真直ぐに　行くが為め　此の道の寒さ

信子さんの話によれば、松弁さんが尊敬してやまない大先輩の、大層気に入っている句とのことであった。凛とした気骨が溢れており「さもありなん」と思う。世の中、本当にすごい人、偉い人は、背骨はシャンと伸びておりながら、まことに柔軟、闊達、肩書や立場にとらわれない自由さ、まっとうさに満ち溢れている。

骨太という言葉がある。かくありたいという願いもこめて好きな言葉だが、私利重視の世の風潮のなか、ふさわしい人をまた一人失って、死語になりつつある。

（九六年五月）

わがサッカー部時代を顧みて

池田　致（昭和三十九年卒）

一橋大サッカー部が創建されてから、七十有余年の歳月が経過した。

この間、戦中、戦後の激動と波瀾、混乱と困苦の時代があり、「サッカー部解散の危機に直面した」こともあったとのことである（《六十年史》の酉松会会長松本正雄さんの《巻頭の辞》から）。この危機の時期を含め、故松本大先輩の、後輩に対するご指導、激励、学生の就職問題等にかかわるご高配等々、余人には成し得ぬご尽力とご努力により今日の酉松会と一橋大学サッカー部の礎が築かれ、存続発展が図られてきたものである。

ご遺族から承ったところによると、故大先輩は亡くなられる数日前に自らの死を予感されておられたとのことであった。しかも以前から「自分が死んだら柩はサッカー部の後輩に担いでもらいたい」と遺言をなされておられたとのことで、筆者ら昭和三十九年卒の者が、その役割をになう名誉を賜わることになったが、故大先輩のサッカー部に対する想いの深さに強い感銘を受けた。

改めて、ここにその偉業を顧みて畏敬の念を深くするとともに、酉松会とサッカー部の末永

い存続発展こそが、故大先輩の想いに応える後輩の最も重要な責務であると痛感した次第である。

さて、筆者は、昭和三十五年（一九六〇年）に、適度にサッカーを楽しみたいといった軽い気持で入部した。関東大学二部リーグでプレーすることの大変さや、練習のため午後の授業には出ない、日曜日も休まないといったことなど、無論知らずにであった。

当時は、入学前にサッカーを経験した者は少なく、筆者の同期について言えば、四年生迄続けた十人は、全員入部前未経験者であった。

サッカーは、その特性から、遅くとも中学生頃から、ボールに慣れ親しみ、体力づくりを図らないと技術レベルの向上には限界があるのではなかろうか。当時を振り返ってみると、猛練習にもかかわらず、一部の少数の部員を除き、技術レベルは、水準向上が遅々たるものであったし、体力的な面でも、《走る格闘技サッカー》をプレーするには、心許無いレベルであったように思う。

このような部員個々の戦力で、関東大学二部リーグを戦うことは、率直に言って、かなりの苦難を伴うものであった。

筆者が、二年生の時の秋のリーグ戦では、最終戦に敗れるとリーグ最下位が決定し、入替戦に出なければならぬという苦境に追い込まれた。最終戦の相手は、強敵日体大である。筆者の

記憶によれば、タイムアップ寸前まで2-1でリードされ、敗色極めて濃厚の中、東大御殿下グランド近くの建物の時計で見て、ロスタイムに入ってから、奇跡とも言える一点を追加、辛うじて引分けにもちこみ、再試合となった。

再試合戦は、エキサイトした激しい試合となったが、気力において日体大を上回り、相手チームの選手が暴力をふるい退場処分となったことも幸いして、わがチームの楽勝に終わった。日体大は入替戦にも敗れ、三部に転落している。

四年間の部生活において、秋のリーグ戦時のチームの雰囲気は、緊張感と重苦しい空気に包まれるのが常であったように思う。また、勝負の世界における弱者のつらさ、かなしさといった悲哀も存分に味わった。だが、同時に、思い知った事は、スポーツは、勝つ事がすべてであるということである。

わが一橋大サッカー部は、かって、関東大学一部リーグで戦った実績を有し、戦後数年してからは、二部リーグで永らくプレーしてきた歴史と伝統から、我々の時代においても、常に二部リーグ優勝の目標を掲げ、一橋大学体育会の中では、最も厳しい猛練習をこなしてきた。それでも、先輩諸氏からは、度々、「まだまだ練習が足りない」、「サッカーに対する考え方が甘い」と叱責を受けた。リーグ戦では、技術、体力面での弱点をカバーすべく勝負に対する執念

と気力、闘魂で戦い抜いたと言って過言ではあるまい。

当時、サッカー部内には、練習が精神主義錬磨に偏っているとの意見があり、技術面のさらなる向上にウェイトを置いた方向での練習が模索されたが、当時のチームの現実は、私見を申せば、「技」を鍛えても限界があり、結果として、「心」と「走り負けない、当たり負けない《体》」重視のサッカーにならざるを得なかったということである。

筆者の学生時代は、経済的に貧しくはあったが、太平洋戦争時のような戦乱における非運な死や飢餓に直面することもなく、若き日の貴重な数年をサッカーに打ち込むことの出来た幸運な世代である。

また、卒業して三十有余年が経過した今日、同期の仲間と、女房同伴で、年に数回集まっては、酒を酌み交わし、隔意なく語り、あるいは、ゴルフを楽しめるのも（本年はゴルフの翌日、中央アルプス木曽駒ヶ岳三千米に登山）、若き日のたった四年間の苦楽を通じて育まれた連帯感と仲間意識の賜物と思っている。若き日のサッカー部生活で得られたものは、今後においてもなお、貴重な財産であり続けるであろう。

最後に現役諸君にお願いしたい。

我が国サッカー界の驚異的な発展の中にあって、諸君の苦労も並大抵のことではなかろう

が、何としても一橋大サッカー部を強化し発展させて頂きたい。

そして、酉松会が、世代を越えて、永続することを心から祈念するものである。

（九六年九月）

◆校長排斥問題

当時の一商校長仲々の《やり手》で、学校内の空いた教室を使い、教師は兼任で、学校内に私立の「帝都商業学校」をつくって六年程経過した。当時の校長の権限や力を見ることが出来るが、その会計が不明朗ということで、校長排斥運動が起こり、松本さんも参画した。校長の交替で落着し、松本さんは《喧嘩両成敗》で辞めようとしたが、後任の校長ー大人物で一商の物心両面の充実を図った人ーに引き留められ帝都商業の後身の一商《第二本科》の講師も勤めた。

松本先輩の思い出

ー 松本先輩と伯父上野喜左衛門の事 ー

永山在紀（昭和四十年卒）

昭和三十五年にサッカー部に入部しましたが、松本先輩が東京商大蹴球部の創始者で、酉松会のドンであることは上級生から折にふれ聞かされていました。

小平の厳しい練習にも耐え、最上級生になった昭和三十八年三月、全員十名が西荻窪のお宅にお招き頂き、奥様の手料理を御馳走になったのが、松本先輩に親しくお話しをお伺いする最初の機会でした。

東京商大蹴球部を作り、ボート部や柔道部などの運動部員をかき集めながら対外試合をした創部の頃の話、一部リーグで東京帝大、早稲田、慶応等と優勝を争う迄になった全盛時代の話、戦争に学徒出陣して行かれた諸先輩の話、そして上級生としての心構えなど、大変な熱意をもって我々学生に教えて頂きました。

又、その時、大正十五年に大学を卒業した仲間に、キッコーマン醤油の茂木啓三郎社長、長銀の宮崎一雄頭取等がおり、先輩には安田生命の竹村吉右衛門社長がおられるなど当時の経済

界でご活躍中の方々との交友関係も披瀝されました。私は、それをお聞きし、内心おやっと思いました。というのは、当時、鹿児島商工会議所会頭を務め、地元鹿児島を中心に九州一円で、南国交通、日本瓦斯、長崎自動車、鹿児島トヨタ自動車など南国グループの総帥の伯父上野喜左衛門の顔を思い浮かべたのでした。確か大正九年の東京商大予科入学だと聞いていたからで、この伯父は夏休みに鹿児島に帰る毎に、食事をご馳走してくれて、話をする中で、喜左衛門自身から、キッコーマンの茂木啓三郎社長とは《心友》で『飯田勝次君が茂木家に養子に入って茂木啓三郎さんになられる際、橋渡し役を自分が務めたんだ。』と聞いていたからでした。

その後しばらく経った昭和四十二年の酉松会の総会で、松本先輩に『私は実は、鹿児島の上野喜左衛門の甥です。』と申し上げたら、吃驚りされて、『それは大変なつかしいね。奇遇だね。』とおっしゃって頂きました。そして『昭和三十八年の十月、如水会一期会（大正九年予科入学者のクラス会）を鹿児島で開いたんだ。夫人同伴で百人以上参加したんだが、汽車が西鹿児島駅に入ったら、ブラスバンドが整列して、懐かしの校歌演奏だ。全く驚き感激したなあ。日本列島最南端で、校歌の演奏に接しようとは思ってもみなかった。上野君、自分の会社の楽団に、かなり練習させたんだなあ。《指宿》に行ったんだが、料理も旨くサービスが行き届いて、上野君の配慮が窺えた。クラス会には、ずいぶん出たが、ああいうのは珍しい。』また、

『上野君とは昭和十二、三年頃、美和ロック（自動施錠メーカー）の会社設立で一緒に仕事をした事もあるし、最高裁判事になって、鹿児島を視察したが、その夜も上野君が一席設けて歓待してくれたよ。』と懐かしそうに昔話をして頂きました。

松本さん御夫妻には、昭和四十三年の私の結婚式にもご出席頂きましたし、その後の酉松会でたびたびご挨拶する機会がございましたが、先輩とお別れする最後の機会となったのは、平成七年九月四日でした。松本先輩の女婿の石綿浩之君を含むサッカー部同期の仲間と軽井沢でゴルフをした時、石綿夫人から、軽井沢の別荘に滞在しておられた松本さん御夫妻とご一緒にお茶をご馳走になり談笑させていただきました。九十三歳とは、とても思えないほど矍鑠としておられました。

先輩のお話をお聞きする毎に、一橋大学、サッカー部・酉松会への熱い思いが常にありましたが、その底に流れる意志の強い、思いやりに満ちた人間性の深さをいつも感じざるを得ませんでした。

松本先輩と学生時代から交友関係にあった伯父上野喜左衛門は、昭和四十六年、七十歳で松本さんよりも二十五年も若くして亡くなりました。そして私も、今年六月末、積水化学を退職

して故里鹿児島に帰り、《南国グループ》の中核会社南国殖産に入りました。
創業後百年以上の歴史のある南国グループを、伝統の重みを感じながらも、『故人の後を求めず、故人の求めたるを求めよ』の精神で牽引し、残りの人生を頑張って行きたいと思っています。
一橋サッカー部も、松本先輩の遺志と伝統ある酉松会の下に、是非、関東大学リーグにカムバックして欲しいものです。
『意志のある処、道あり』だと思います。

（九六年九月）

《松弁》さんについて

寺西重郎（昭和四十年卒）

私は、言わば経済学研究を志す一介の武辺であって、この手の書き物は苦手である。
松本正雄大先輩を我々サッカー部の仲間同士では学生時代から《松弁》あるいは《松弁さん》として会話していたので、ここでは限りない敬愛の念をこめて《松弁》さんとして書かせて頂く。
個人的な備忘と確認の目的で《松弁》さんとの最初と最後の「出会い」について記し責を全うしたい。尤も記憶力抜群の《松弁》さんは確認はともかく備忘は不要と言われるかもしれないが。

《松弁》さんとの最初の個人的な出会いは、一九六四年の夏であった。その頃の一橋生としては珍しく、就職がうまくいかず、《松弁》さんのお宅に相談に伺ったのが最初であったように思う。《松弁》さんはただちに「A社はどうか、明日事務所に来るように」と言われた。翌日、丸の内の事務所に行くと、そのまま向かいのA社に連れて行かれ《面接》が始まった。驚いたことに、面接は最初から社長面接で重役の方も何人か居られたように思う。《松弁》さん

は「この男は、学問が好きで大学院へ行きたいと言っているが、実業界向きでもあり是非A社に採用を勧めたい」とか何か一方的に話された。たしかその場で採用が事実上決まったはずである。私が、大学院に進もうと思ったのは、実はその《松弁》さんの言葉を聞いてからであった。その前に何か大学院志望に近いことを《松弁》さんに話したのかもしれない。しかし確信的に大学院を志望したのは、その言葉が契機であった。それから夏から秋の猛勉強により、多分に運もあって大学院に合格したのだが、それを一番喜んでくれたのは《松弁》さんであったように思う。

《松弁》さんと最後にお会いしたのはちょうどその三十年後、私と日経センターの香西泰氏との共編の本が大平正芳記念賞をうけた、その授賞式の場であった。場所はホテルオークラ、一九九五年五月のことであった。式場で《松弁》さんをお見かけしたときは驚いたが、考えてみると《松弁》さんは故大平氏と非常に近い関係にあったから当然ありうべきことであった。《松弁》さんの方は私の現れるのを前から待っておられたふうで、私が席につくと向かいの席から「ヨウ」と手をあげられた。その後のパーティでは出来るだけ、《松弁》さんの近くに居るようにしていたが、大変な人数のパーティで、あれこれの人と応対しているうちに《松弁》

さんを見失ってしまった。あわてて受付に行くと既に帰られたとのことであった。この間さまざまなことをお話したが、我々の本の意味をかなり的確につかんでおられたことが印象的であった。そう言えば、商学士ではあるが、当時の商大の学生は法学も経済学もずいぶんやったものだと、かって言われていたことなど思い出された。（このことについては『如水会々報』の昨年7月号にも記しておいた。）

私事にわたるが、五十三歳ともなると体力的に思うにまかせず、他方課題山積で焦慮の日々の連続である。この正月《松弁》さんの訃報に接したとき、最初の感想は「しまった」といういわば不覚の思いであった。あと十五年待って欲しかったというのが、そのときの偽らざる気持ちである。九十四歳の《松弁》さんに対してと人は笑うであろうが、この気持ちだけはいまだに続いている。

（九六年九月）

三人の「松さん」

相良保彦（昭和四十一年卒）

三十年前にもなる。大人になりたがらない「モラトリアム族」のはしりであった私は、大学四年を目前にした正月十五日、松本正雄さん宅で催された恒例の酉松会新年会に初めて出席した。シーズンを終え、社会に巣立つ四年生と、来シーズンのリーダーとなる三年生の現役組を、ＯＢにお披露目する場であった、と思う。

毎週の如くグランドに現れ、鬼の如く厳しく指導してくれた顔なじみの若手ＯＢに加え、油の乗りきった企業の幹部とおぼしき四十、五十歳台の壮年ＯＢがずらっと並んでいた。

あまり社会人と接触したことのない「こども学生」にとって、異質の別世界であり、半面、そこかしこで交わされるビジネスの話は眩しくも壮観であった。

この場で、私は三人の「松」さんに出会った。それが私の進路を決めることになった。

ひとりは、勿論、座の中心におわす《松本正雄》弁護士、松弁さん。年格好も態度もほかの人とは「別格官幣大社」といった雰囲気。映画の中で「正義の青年弁護士」しか見たことがないうぶな学生にとって、松弁さんは摩訶不思議な存在としかいいようがなかった。　二人目は

《松岡義彦》さん、昭和十六年卒のＯＢで当時は朝日新聞論説委員だった。目から鼻に抜けるとはこのことかという位、頭の回転が早い。「ビジネスの世界」とは別の「ジャーナリズムの世界」に生きていた。「社会＝企業の世界」にモラトリアムを考えていた私にとって魅力溢れる世界であった。漠然とした憧れが膨らみ、その年の夏、朝日を受験してはみたものの、案の定落ちた。たまたま夏の寄付廻りに訪れた松岡さんに、事後報告。そして「来年も受けたい」と嘆願すると、頼り無げな私をみて、困ったという表情を一瞬浮かべたが、「来年、決意が変わっていなければ訪ねてこい」。

その年の暮れ、就職が決まった四年生を新宿の料亭で祝う席があった。これも松本さん主催の恒例の行事。留年を決めていたわたくしも招かれた。恰好を付けて「どうしてもジャーナリズムの世界で生きたいので、就職浪人します」と報告した。

実際には、モラトリアム症候群半分のいい加減なものだったが、「そうか、志を貫くのか。それもいいことだ」と意外なことを言われた。「甘っちょろい」と言われるものとばかり考えていたので、気恥ずかしい気分だった。だが、嬉しかった。青二才の逃げ口上をまともに受けとめてくれた。決意が固まった。「松弁さんは弁護士になるにあたっては志を貫いた」と後日、

ある人から聞いた。

松本邸での新年会の席には、もう一人の「松」さん《松浦巌》さんが居られた。昭和二十二年卒で全日本のメンバーに選ばれた名選手ＯＢ。皆から「ガンさん」と呼ばれていた。メルボルンから帰国したばかりの大人風の商社マン。ガンさんの帰国報告からは「ビジネスの世界」の魅力が匂い立っていた。そのころから兼松のエースといわれていたそうだが、私には、人柄が良すぎて、とても社長が勤まるふうには見えなかった。

十余年後、兼松江商の社長レースでは、私は朝日の経済部記者として、一週間近く、夜な夜な松浦さんの自宅に通いつめた。毎晩酔って帰宅するガンさんをつかまえては「（社長の）覚悟は決めましたか」と馬鹿の一つ覚えの質問を繰り返した。

ひと言も答えてくれなかったが、柔和な表情は変わらなかった。「総合商社で初めての戦後入社の社長誕生」の特ダネを確信をもって書かせていただいた。まだ書かれては困るはずなのに、不肖の後輩には苦言のひとつもなかった。

松浦さんは在任一年余で、突然のハートアタックで無念の戦死を遂げられた。まだ五十九歳

であった。松岡さんもその五年前、癌で倒れていた。

松弁さんは、松岡、松浦さんの早過ぎた死をたいへん悔しがっておられた。

松弁さんが国家公安委員だったころ、「最近の朝日はおかしい」と烈火のごとく怒られたことがあった。最高裁とトラブルを起こすなど、取材をめぐって朝日が様々な事件を起こした後の時だった。前最高裁判事としての経験と見識からであったのであろう。本来なら頼り甲斐のある松岡さんに苦言を呈したかったのだろうが、それもかなわず、同じ後輩でも頼り無い私に言わざるを得なかった無念さが加わって、怒りが倍加したと私は今でも考えている。

しかし一方で、松弁さんは大変な気配りの人であった。

大阪で行われた寺西さん（昭和四十年卒、現・一橋大学教授）の結婚披露宴に出席する松弁さんを新大阪駅まで迎えに行った時のこと。（寺西さんの後輩で、大阪在住の酉松会会員は私だけ位であった。）

新大阪から会場の中津までは、地下鉄御堂筋線で三っ目、渋滞がちの道路より、確実な地下鉄の方がベターと考えたのが大間違いだった。地下鉄新大阪駅は高速道路にはさまれた高架の吹きっさらし。その日はひときわ寒風が身に凍みた。先発電車が出たばかりとみえてなかなか

電車も来ない。高齢者にはかなりこたえた筈だ。

「しまった」という表情が私の顔に浮かんだ途端だった。松弁さんが「大阪の地下鉄も立派だね。いい経験になる。」と語りかけて来た。寒さで顔の筋肉はこわばっていたが、目はやさしかった。若輩の失態を先手でかばって呉れた。

単なる遠い後輩に過ぎない者にどうしてこの人たちは、こんなにも親身になれるのだろうか。

三人の「松」さんに初めてお会いした西荻窪の松弁さんのお宅、足が遠のいてかなりになる。通勤の行き帰りに西荻を通過するたびに、面倒見の悪い後輩は、ただ頭を掻くばかりである。

（九六年九月）

松本正雄先生の想い出とサッカー生活

栗又俊二（昭和四十二年卒）

昭和三十八年に一橋大学に入学し、サッカー部に入部したが、当時は《一橋大学サッカー学部》へ入学したようなものであった。入部の契機は、浪人生活中はほとんど運動する機会に恵まれず、改めて心身を鍛練するには、本格的運動部に入るのが一番という想いからであった。

一年生の夏からゴールキーパー専門となり、キーパー独自の練習に明け暮れる毎日であった。特に夏合宿のあの小平での酷暑の練習は、まさに体力の限界に挑戦するものであり、午前2時間、午後3時間のハードな練習は、それ以外の時間は食事と睡眠だけという生活であった。

昭和42年卒の同期生で卒業まで残った仲間は、結局六人となった。主将の三浦候宣（三菱商事）、副主将の有田誠（新日鉄）、槙田元生（三菱重工）、市川彰夫（住友商事）、丸山克久（福島医大再入学）の諸君と私（東京海上）であった。同時に入部した者で厳しい練習に耐えられないか、生活時間を他に向けることを選んで部を去った者もあった。

当時は、関東大学二部リーグに所属、そこには上智、順天堂、農大、東大、日体大などの強

豪がひしめいており、東大御殿下グランドが主舞台であった。私達が3年の時までは、辛うじて二部リーグに残留していた。私達が4年の秋のリーグ戦で、槙田君が膝を痛め大半の試合に出れなくなる不運もかさなり、最終戦を落とし1勝1分6敗の最下位、入替戦でも国士館に敗れ、三部に陥落する結果となってしまった。先輩諸氏には大変申し訳なく、後輩にも三部での戦いを余儀なくさせた屈辱感を味わった年代である。

故松本正雄先生との想い出は、当時、西松会の会長でもあり、西松会総会での、あの慈愛に満ちたご尊顔が極めて印象的であった。また、就職が決まって、四年間お世話になった御礼言上に西荻窪のご自宅を訪問した時も、優しさと包容力のある態度で接して頂き、大変な緊張と感激を味わった懐かしい想い出がある。

卒業後、満二十九年間も会社の転勤でほとんど東京を離れており、西松会総会への出席もご無沙汰しているが、この一月松本先生のご逝去の報に接し、先生の西松会活動へのご尽力、一橋大学サッカー部へのたゆまぬご支援、現役学生に対して注がれる惜しみなきご愛情とご指導に、改めてその偉大さを感じ入った次第であった。

松本先生の一橋サッカー部に対するご熱情と、その考えに影響を受けた学生は私のみならず大変多かったと思う。また、このご熱情が西松会の支えでもあったと思うが、大切な《生みの

親》を失うことになり、残念至極である。西松会の更なる発展こそ、先生への何よりの追悼になると考えるので、新たな気持ちで西松会活動に参加して行きたいと思う。

松本先生から長年に亘って賜ったご厚志に深く感謝申し上げ、ご霊前に心をこめて合掌申し上げます。

（九六年六月）

松本さん

A氏　松本さんて一言で言うとどういう人だね。

B氏　道楽もいろいろあるが「人間道楽の人」と言うのが一番ぴったりじゃないか。

A氏　なるほど、植木を育てるのが《植木道楽》なら、人間を育てるのが《人間道楽》か。

B氏　その通りだ。

松本大先輩と三十年前の部生活の思い出

ー 西荻窪のお宅での池さらい ー

高 峯 文 世（昭和四十三年卒）

それは何年生の時だったか忘れてしまったが、夏のある日、我々同期のサッカー部員、四・五名が、松本大先輩（我々仲間内では《松弁さん》と呼んでいた）の西荻窪のお宅に伺って、庭の池浚いをした事があった。

池の水をバケツで汲み出して植木の根元にかけ、木々への散水と栄養補給を兼ねたものだったのであろうか？・・・・

大して大きな池ではなかったが、意外に水の量は多く、汲み出し、池底の清掃、新しい水の汲み入れとで、二時間半位かかった事を思い出す。

その間中、《松弁さん》は我々の作業を見るとはなしに見ておられるという感じで、全てを我々に任せておられた。

我々の作業完了後、ビールと食事を御馳走になった。その時、《松弁さん》からサッカーに取り組む意識、勝負の神髄についてお話しを伺った。更に、学生から社会人になって行く我々

に対する言葉として「新聞の社説欄は毎日、是非読みなさい」「一橋で一心にサッカーに打ち込んでいたなら、社会へ出ても立派に通用する」とも言って頂いた。

そして我々同期の何名かは《松弁さん》のお口添えで、現在の会社に就職、それぞれの分野で活躍中である。

ここで話はガラッと変わるが、《松弁さん》に「関東大学リーグ二部復帰」という報告を出来ないまま、卒業せざるを得なかった、三十年前（昭和四十二年度）の思い出を、当時の手帳に記した文章から抜粋してみる。

『四十二年度関東大学サッカーリーグ（三部）が終わってしまった。“終わった”しかし、サッカー部としての次の出発点、目指すゴールが明確にされた。クラマーコーチは言う「タイムアップの笛は次の試合の笛に通じる」と。だが、俺達四年生には“次の笛”に応じて参加することは出来ない。真に学生サッカーの終了の笛であった。

ここで、四年間に及ぶサッカー部生活を思い出すのである。

一年生の時、部室が教室代わりとなり、部室の、あの汗の臭い、ボールの革、油の臭い、その他諸々の臭いに包まれている時、俺は何か心が安まった。教室では殆ど口をきかず、一橋の学生とは話が合わないし魅力も感じていないと孤立していた。しかし、部室へ来るとサッカー

をやる奴等とはだべり続けた。ボール詰めが心底から楽しかった。ここで俺は本当の俺になれるのだ、ほっとした。こんな態度がいつしか教室の方にも及び、俺は「一橋大学の学生」になっていたのだ。・・・・・

ボール詰めが楽しい？　俺達一年の頃はバルブ式でなく、紐をニードルを使って締めるのであり、腕力と時間がかかった。そのかなりの時間に俺達は駄弁った。「一生懸命にやる」それだけで一年が過ぎたが、「ダンプの峯」と呼ばれ、生気、活力共に充実し、最も思い出の多い年であった。

その後、学年が進むにつれ、プレーは一向に上達せず「ただサッカーをやっている」というスランプ状態になって行ったようだ。　ー　中略　ー

三年のリーグ戦、二部最下位となり、入替戦（対国士館大学戦）に臨んだ。その前の一週間の合宿、重苦しいムード、それを何とか和らげようとする四年生の努力、身に染みて痛い程わかった。「勝つのだ」「三部になってはならない」「勝てるのだ」そんなムードになって来たのに・・・・・・・

試合は寒い風の吹く中、空しく敗れた。寒かった、涙も出なかった。あの試合は何も憶えていない。三部に居たのだ。・・・・・・・・以下略』

我々が四年の時、三部優勝・二部復帰はならなかった。その状況は六十年史で述べた。

恥ずかしながら、以上三十年のノスタルジーで、当時のカビの生えた手帳から、稚拙な文章を載せてしまったが、この心情を卒業時の酉松会総会の日、松本大先輩に懇談の中で吐露したことも思い出すし、私の人生において「一橋大学サッカー部生活」と「松本大先輩との出会い」は欠かせない根幹であることを、この機会に再確認させられた次第である。

（九六年八月）

松本先生に叱られて

木村武志（昭和五十二年卒）

「反省がない。不愉快だ！」と言う言葉を、現役の主将に残して酉松会の会場を去って行った・・・・・・

一九七六年度関東大学リーグの最終戦、東大対拓大の試合を今までに経験したことのない複雑な心境で観戦した。この試合の結果次第で、《東京都大学リーグ》との入替戦出場か、74年の昇格以来最高の成績を収めることになるかが決まるのだった。“引き分け”のみが我々に祝杯を運ぶ結末であった。両者、共に頑張っていい試合をして欲しかった。

しかし、勝敗の決着だけはつけて貰うと困る。応援の仕方が難しかった。

拓大が、ヘディングシュートを決めた・・がオフサイド・・ホッ。東大の守備は堅かった。その年の拓大は例年程の迫力が無かった。あと5分、いいぞ！このままいけ！後半の45分を過ぎた。ロスタイムだ。誰もが信じていた・・美味しいビールが飲めると。やたらに長い2分が経過した。東大のシュートがゴールを揺さぶった。拓大の応援団よりも先に我々が“オフサイド！”と大きな声で抗議した。しかし、無情にも主審はピーッと得点を宣言し、その後本当に短い1分が過ぎ東大の選手がグラウンドの上で抱き合う姿をボーッと見つめていた。

二年連続の対戦となった専修大学との入替戦のハーフタイム、我々は疲れ切っていた。2-0でリードはしていたが、試合は専修ベースで、何とか相手の猛攻を凌いでいただけで、勝っているという実感はなかった。後半直ぐに1点を奪われた。糸が切れ掛かった。まだ1点リードしている。ここでもう一度立て直そう、引き締めようと皆で声を掛け合うが空回りばかり。2点目を失った。とうとう全てが切れた。後は殆ど記憶がないほど集中力を欠いた一方的な試合となり、2-6で大敗。その夜は涙酒となった。

何としてでも関東リーグに上がろう、昨年の雪辱を果たそうという強い意志を持って、選手補強に努め、厳しい練習を重ねて来たチームを迎え撃つには、我々の心構えが出来ていなかった。我々のその年は、前述の東大ー拓大戦で終わっていた。こんな強豪に囲まれ、どこのチームも監督・コーチがしっかり指導し、設備も整い、セレクションによる戦力強化がなされているにも拘わらず、我々は全て自分達の手作りでここまでやってきたんだ。楽しい、大好きなはずのサッカーがこんなにまで苦しく思える程頑張ってきたんだという自負心が、最後に我々自

身を甘えさせた。

その年の酉松会では、ただただ頭を下げるつもりでいた。諸先輩から多くのお話があった。古き良き昔の思い出話、青春の血を熱くたぎらせた貧乏学生のサッカー談義等々、勿論関東リーグから陥落したことへのお叱りもいただき伝統あるサッカー部でプレーできたことの誇りと幸せを感じる事が出来た。だが、ほとんどの方が初対面であった。いよいよ現役部員の挨拶の順番が近づいた。現役の主将の前に、関東リーグの審判も務められ、我々の試合も数多く応援頂いた方のお話があった。『今の学生サッカーは昔と大きく環境が変わっている。そんな中で今年のチームは、よく纏まっていたし、よく頑張ったと褒めてやりたい。グランドに足を運ぶこともせず結果だけを問うＯＢは、冷たすぎるのではないか。』と、我々の姿を見守っていてくれた方が涙声で諸先輩に語られた。多少のざわつきの後に、主将が立ち上がった。既に、元々、熱血漢の彼からは前夜考えていた謙虚な型通りの挨拶は消えていた。それでも、一応の反省を述べた後、こう言った。

《真剣にわが一橋サッカー部を強くしようと思うなら、他校に負けない良いグランドと、いいコーチを設けて貰いたい。》

波紋が広がった。予想以上の騒然さに主将も我に返っていた。暫く種々の議論があちこちで続いた後、冒頭の出来事が起こった。

去って行ったのは、当サッカー部の創始者である松本先生、不愉快にさせた主将は私である。

後程、あの時に松本先生が席を立たれたのは、呼ばれていた車が丁度到着したところであったとは聞いたものの、また閉会後に若手ＯＢに励まされたりもしたが、心は晴れず、沈んだ気持ちのまま辛い数日を過ごした。その後、翌年度の新スタッフに決まった後輩が、松本先生の御自宅に挨拶を兼ねて、この件のお詫びに上がったことも事後に報告を受け、益々惨めな思いをした。(勝手なことをしおって、それじゃまるで俺がガキじゃないか・)

あれから、松本先生とは諸事情により、一度もお目にかかることも無く約20年が過ぎ、今となってはお詫びも言えず何もお話できないが、きっと高いところで全てを理解し包容していて下さっていると信じている。・・・・・合掌！

(九六年六月)

御葬儀のお手伝いをして

徳重　泰治（平成八年卒）

松本正雄氏という人物に会ったことがない。

どのような人物であるか知りさえしていなかった。大先輩の松本先生がお亡くなりになったということで、日ごろお世話になっていた酉松会の幹事石井さんから御葬儀のお手伝いをするようにとの連絡を受けた。四年生部員四人で通夜・密葬の日参列者の案内のお手伝いをすることになった。そこで初めて松本先生という人物に触れることが出来た。

密葬であるというのに、沢山の参列者、かなり高齢の方もおられる。しかも外は真冬の中で寒さがしみるというのに、何故こんなにも沢山の参列者が来られるのか、最初はわからなかった。

後日、本葬を控えているにもかかわらず、何故こんなにも沢山の人が集まって来るのだろうか。しかし、そんな疑問は、葬儀の終わり近くになって私達にもご焼香の順番が来て、松本先生の遺影を見た瞬間直ぐに吹き飛んでしまった。何とも懐の深そうな雰囲気、厳しそうで、それでいて温かそうな目。自信に満ちあふれた表情。何ともいえない程魅力のある人物であるのが、その写真からだけでもひしひしと伝わって来る。生前にお会い出来なかったことが非常に

悔やまれる。その思いは、本葬を迎えて変わるどころか更に強くなっていった。

一月十七日の護国寺での本葬の日には、部員三十数名と一緒にお手伝いをした。会場には多数の酉松会の先輩方が来ておられ、それぞれの役割を分担して配置についた。参列者が多数に上ったのは密葬の時から予想していた通りだったが、杖をひいて来られるご高齢の人、家族に左右から支えられながらも参列される方には、故人のお人柄を偲ばせて強烈な印象を受けた。告別式の最後に部員一同、サッカーボールが飾られた祭壇で、遺影にご焼香を捧げた。式が済んで、遺影と御霊を酉松会の先輩と部員一同が整列してお見送りしたが、この時、酉松会の先輩と部員の一体感を強く感じた。これは私だけでなく当日お手伝いに参加した部員がそれぞれに感じたことではないだろうか。

このような雰囲気になったのも、松本先生のお人柄によるものと今も思い浮かべているが、その松本先生が築き上げた一橋大学サッカー部を卒業して早や半年を経過した。そして今や自分も酉松会の一員に名前を連ねている。今まで先輩方に助けていただいた分、今度は自分が手を貸す立場となった。松本先生のようにはとは行かないかもしれないが、いつも、いつまでも厳しく温かい目で一橋大学サッカー部を見守って行きたいと思う。

（九六年十月）

告別式の写真

私は大正元年生まれで昭和五年に帝都商業を卒業しました。松本先生にはどう言う訳か可愛がられて、ビアホールなどに連れて行って貰いました。勿論その時は学帽は脱ぎます。時には店の前で、「お前は帰れ」と言われて別れることもありましたが、卒業してからも会社設立など何かと相談に乗って貰いました。関西に来てからも、来阪されると連絡を頂いてお会いしていました。勲一等を受章された時、祝賀会には御招待が無かったので電話すると、「関西に行くからお前の所へ行く」と言う話で、ロイヤルホテルから私の運転する車で店に来て頂いて、日本堂と賞美堂の前で、家族達と記念写真を撮りました。その時、「告別式用の写真も必要だ」と先生がおっしゃって、お撮りしたのでした。そのあと二人丈の祝賀の宴を張ったのは勿論です。偉い先生でしたが、私にとってはオヤジのような兄貴のような人でしたね。

（大阪で時計・宝飾店経営の上村邦夫氏談）

特別寄稿

― 御遺族と丸の内総合法律事務所から ―

一周忌にあたって

松本たま

早いもので、間もなく一周忌を迎えようとしております。主人亡き後、皆様のお力添えあって無事過ごしてまいりました。

顧みますと、六十数年いろいろなことがございました。思い出は数限りなくございますが、やはり、戦争前後の厳しい時代の頃のことが思い起こされます。

主人はよく就職のお世話をしておりましたが、冬の雪の降る中でも、会社の役員の方の寝込みを襲うといっては、朝早く、学生さんを連れて出掛けておりました。ある時、靴の替えがなく、前夜の雪でビショ濡れの靴を、そのまま履いて出掛けて行ったことがありました。忘れられない思い出です。

又、家を買い替える時のことでございましたが、「広い部屋はあるか。」主人の申したのはそれだけでした。勿論、サッカー部の方々のお集まりができるかどうかということで、それ以外はどうでもよろしいようでした。

主人はどちらかといいますと、家庭よりも仕事や社会に常々関心があったようです。

主人の最もしたかった仕事は、学校経営だったそうですが、お金がなかったので叶えられなかったとよく申しておりました。

《立派な人材を世に送り出したい。》

サッカー部への一方ならぬ情熱は、そんな夢を追いかけていたのかも知れません。

辛いこと、苦しいこと多々ありましたが、こうして今、皆様から寄せられた追想のことばを前に、懐かしい、楽しい思い出に浸っております。

主人に連れ添うことによって、皆様とも御一緒できましたことは、私にとりましても喜びでございます。

一周忌にあたり、サッカー部からの追悼集を霊前に捧げられ、何よりの供養と存じます。お陰様で子供や孫にとりましても、松本の人となりを知るよすがとなること、思います。ありがとうございました。

編集にあたりましては、お忙しい中を熱心にご尽力くださいました酉松会の皆々様に心より御礼申し上げます。

伯父の思い出

渡部　英一郎

先日、大学の同期生で酉松会の奥村一郎氏が来訪され、故松本正雄の追悼文集を出すから何か書けとの話がありました。

伯父は、私が物心ついて以来約七十年間、身内の一人として何かにつけ非常に影響力の強い人でした。色々と思い出されますが、限られた紙面故、その中からいくつかのことを偲ばせて頂きます。墓場の蔭から、「余計なことを言うな」と咤正も聞こえますが敢えて紹介しましょう。

◎　古い話ですが、松本家のルーツは、明治維新まで代々伊予松山藩の武家でした。瀬戸内海、伊予灘を中心とした海域の交通、漁業の取締に任じた家柄で、三津濱（今の松山港）に白壁塀をめぐらした邸を構え住んでおりました。維新による武家廃止後、故人の父、松本求は上京、遞信省の官吏となり各地（横浜、前橋、東京）の郵便局長などを経て、昭和の初め定年。西荻窪の南に土地を得て家を建て、永い隠居生活を送りました。（昭和四十四年没、九十七歳）。

伯父は、その家の長男（男三人女六人）、大家族の総領息子として父母、弟妹の面倒を当時

の風習として見ざるを得ませんでした。本人自身は学業と就業の傍らですから、その苦労は並大抵ではありません。更に、私も父の死後、母の実家であるその家に、若い未亡人の母、妹と三人で転がりこんで起居を共にしたものですから、伯父の精神的、経済的負担は尚のことでした。最近の核家族中心の生活では考えられない大世帯の生活環境でしたが、伯父の口からは後々に至るまで、その苦労話もボヤキの一つも全く聞いたことがありません。

◎　先程もふれましたように、私の父親は昭和三年、勤務先の上海で若くして客死しました。その際、東京から遥々駆けつけてくれましたのが伯父でした。昨今の交通事情と異なり、当時は厳冬の玄海灘を客船で数日を要して渡るとのこと。そして異郷の外地で悲嘆の境にある母と子（私）を慰めながら日本に連れ戻してくれました。私は何も分からぬ五歳の時でしたが、伯父の背中が大きく見えたことを憶えており、今でも忘れ得ません。

それ以来、一貫して親身の世話に預かり、今の私は伯父の高恩あってこそとつくづく思う次第です。

◎　伯父は、身内には中々きびしい兄貴分であり、殊に非道義的な精神・行動を絶対に許さない正義派。このため、子供の頃も道を外れたことはこっぴどく咤られましたが、私どもには伯父の温かい親情が分かっている丈に、伯父には全く逆らえませんでした。数多い親戚の中で疎遠になる者も全く無く、皆で野辺の送りが出来たことは、伯父の良き人柄と統領振りを示すものと考えます。

◎　故人は又、日頃人間関係を非常に大切にしておりました。皆様もご存知のことでしょうが、殊に菅礼之助大先輩を学生時代より尊敬し、終始一貫師事し、亡くなられた後々もその遺徳をよく語っておりました。私もその縁で、菅さんを初代社長と仰ぐ鉱山会社に入りました。菅さんの郷里は、秋田県秋宮温泉郷の静かな山村、そこに大先輩も眠る墓地と、村の入口には大きな顕彰碑があります。私も時折訪ねては墓参し、その都度伯父に報告してましたが大変喜んでくれました。

伯父が人生究極の心を《禅》に見出し、人間愛と佛心とに満たされた一生を終えたのも、菅さんのお導きのお蔭でしょう。菅さんを《大恩人》と申して憚らなかった伯父の気持がよく分かります。

◎　サッカーをこよなく愛したこと。

昨年でしたが思い出すのは、私が小学生の孫を連れて訪ねた際、何の運動をしているかの質問に、孫が即座に「サッカー！」と答えた折には破顔大笑「それは良い、直ぐにボールを買いなさい。」と小遣いを頂きました。孫は今でも一番尊敬する人は大伯父と申してます。

◎　郷土愛。

松山には定住したことのない伯父でしたが、心の故郷として松山の町並みと温泉とを好み、又郷土の人達・愛媛県知事から道後温泉の女将までと幅広い交際があり、一昨年まで帰郷してはその友誼を楽しんでおりました。

◎　晩年、次ぎから次ぎと先輩・友人殆どに先立たれ、葬儀の都度見送る立場の辛さ淋しさを語っておりました。本人も次ぎは自分と、最後は安心立命の境にあって食も殆ど絶ち、近親にそれとなく訣別し、大往生をなし遂げました。

◎　後記。

追憶が走馬灯の如く出て参りますが、「もう書くな。」との、伯父の声もありますので擱筆します。

以上。

一商の教え子

戦争中は弁護士の仕事が減って困りました。一商の教え子の《金枝新次》さんが、大きな金物問屋でしたが、小諸に軍需工場を造ったので、その顧問に迎えられ月給を頂いたので随分助かりました。

（奥様談）

金枝新次さんは正義漢で、一商時代に校長排斥運動の首謀者に祭り上げられ、四年生で退学処分の憂き目に遭った。松本さんがこの運動に肩入れしたのはこの時からで、この処分を撤回させ無事卒業に導くとともに、不当処分を出した校長も退任に追い込んだ次第であった。この事は二人だけの秘密とされていたが、先に亡くなられた金枝さんの葬儀の時、松本さんが弔辞を捧げ明らかになった。

光る巌

石綿　学

草原の中に悠然と光る巌。

これが、私の祖父に対する最初の印象である。祖父母以下、孫の代に至るまで総勢十四名の我が一族は、年末年始、祖父母の誕生日などの決まった日に、いつも一つの食卓に、一堂に会した。一族の中で下から二番目の私などは当然いつも末席で、真ん中の巌を遠くから仰ぎ見るのが関の山であった。しかし、その巌の発する光は私にも惜しげなく注がれた。当時、心臓病と骨髄炎を併発し、三途の川の岸辺で一人遊びに耽っていた私を、祖父は、自ら探し出した名医の執刀で呼び戻し、光り輝く愛媛松山の海辺で一緒に遊んでくれたものである。そんな私と祖父との接点は、私が書く作文を祖父が添削するという方法で生まれた。祖父が書いて寄越したそのほとんどは、もう忘れてしまったが、唯一記憶に残るのは、「友達を大切にしなさい。」この一言であり、祖父は何よりも私の友人の話に耳を傾けた。もっとも、祖父は忙しかったから、祖父の少々早歩きの散歩に、私が必死に追いすがるときを除き、その巌と私の距離が近づくことはなかった。

私は、一回大学受験に失敗したことがある。その日、祖父は、約二キロ離れた私の家まで歩いてきて、ふてくされた私を励ましてくれた。そして、それが、祖父が私の家まで歩いてこられた最後の日でもあった。

私は、祖父や父とは異なる大学に敢えて固執し、祖父とも父とも違うラグビーをやった。法学部学生だった私は、祖父の書いた判例を知りうる限り読んだ。祖父の最高裁時代の業績と私が考えるところを敢えて述べれば、手形法で創造説を採ったことと、憲法の分野で日本の高度成長時代を確証する判例を生み出したことだろうか。必ずしも全てに共感した訳でもないが、私が祖父に対して積極的にものを言い出したのはその頃であったような気がする。私は司法試験を目指し、大学時代の二度の夏期休暇のほとんどを北軽井沢で過ごした。祖父の晩酌に毎晩つきあい、ありとあらゆる話をした。様々な友人の話から始まり、政治家との確執、最高裁入りの経緯、法律の話、禅の話、生い立ち等その九十余年の歳月に生じた事柄は尽きることがなかった。ただ、何故か、いつも話はこう締め括られた。

「ガクも友達を大切にしなさい。」

北軽井沢では、祖父は毎日散歩した。ゆっくりと、私に見守られながら、必死に、照月湖まで約一キロの道のりを一時間以上かけて歩いた。

そんなある朝のことだった。祖父の家の電話が鳴り、祖母が驚きの声をあげた。故茂木啓三郎氏の死である。受話器を握りしめた祖父の顔が歪んだ。遠くを見つめ、悲痛の末に生まれる笑みを浮かべて私に言った。「とうとう、おじいちゃんには友達がいなくなったよ。」光りつづけてきた巌が、その風雪に耐えかねた一瞬だった。それから、私は祖父と、東京に戻り、野田で行われた告別式に参加した。祖父の付き添いとして、弔辞を読む祖父を壇上に導いた私は、祖父と同じスポットライトを浴びて、二千人近い参列者の前に立った。よたよたと祭壇に向い、精一杯胸を張り、声を振り絞って弔辞を読む祖父の姿は、深い感動を伴い、今でも目に焼き付いて離れない。祖母と結婚するときに「俺には友達以外には何にも財産はない。俺の友達だけにはいい顔をしてやってくれ。」と頼んだ祖父の、最後の親愛の友人だった。

それからというもの、あまり歩かなくなった祖父は、北軽井沢でも家の周りを歩いて済ませることが多くなった。もっとも、祖父は丸の内の事務所には、電車を使い歩いて行っていた。「事務所に歩いて行けなくなったら、もう事務所に行く資格なんぞないよ。」祖父は、家から事務所までの歩数、駅の階段の数を知り尽くしつつそう言ったものである。

私は、運に恵まれ、司法試験に合格した。祖父は、立ち上がって私を迎え入れ、私に手を差し伸べてくれた。私は、その時、巌の手を握った。祝杯をあげた祖父に、私は言った。「私が

法律家になるにあたって、何か言葉を下さい。」祖父は、その時も私に向かって言った。「友達を大切にしなさい。」

私が、司法修習生として北海道に旅立つとき、祖父は、勝手口まで見送りに来てくれた。「みんなと仲良くして、元気に頑張りなさい。」

そして、今ここに　祖父が、亡くなる三カ月前に、北海道にいる私に書いてよこしてくれた手紙がある。そこには「おじいちゃんは、素晴らしい人物に恵まれた。運が良かっただけのこと。」と記載されている。

平成八年一月四日早朝、北海道富良野市にいた私の元に、けたたましく電話がなった。震える声で祖父の死を告げる母からの電話だった。私は、猛吹雪のなか札幌まで車を飛ばし、飛行機便のキャンセル待ちをし、羽田から西荻窪の駅に向い、祖父の家まで歩いた。座敷に案内された私の目に入ったのは、もはや歩くことを止め、光ることを止めた、やせこけた巌だった。私は、唯々黙って深々と頭を下げた。「おじいちゃん、ありがとう。」

今度の四月から、私は弁護士になる。祖父は私にやはりあの言葉を贈ってくれるのだろうか。

追悼文

丸の内総合法律事務所　畠山保雄
（第二東京弁護士会　会員）

年明け早々の一月四日未明、松本正雄先生が九四歳の生涯を閉じられました。第二東京弁護士会の歴代会長の中で最高齢と聞きました。一二月二二日には事務所にも見えられ、翌日にはご自宅で、後援していたプロ棋士の畠秀史五段と三子局を打ち六目の勝ちをおさめて、畠先生に『最近にない気力横溢の碁』と褒められたことをことのほか喜んでおられました。正月三日には、大勢のお孫さん達を呼び寄せて団欒の時を過ごされ、その翌日未明、枯れるが如くに大往生を遂げられました。日頃『死んだら老衰といってくれ』と言っておられましたが、翌日の新聞には望みどうり老衰死と発表されました。

一月一七日護国寺桂昌殿で、丸の内総合法律事務所の所葬として葬儀が営まれましたが、三好達 最高裁判所長官、土屋公献 日本弁護士連合会会長、斎藤裕 如水会会長からご弔辞を賜り、

当会多数の会員の諸先生からも御懇篤な弔意をお寄せ頂きました。紙面をお借りして深く感謝を申し上げます。

先生は大正一五年東京商大卒、古河電工を経て独学で法曹を志し昭和五年に当会に登録、終戦まで当会二代目会長の花岡敏夫先生の事務所に籍をおかれました。戦後は松本正雄法律事務所として我が国の復興・成長期において数多くの民・商事の事件を手がけられました。昭和三一年度には当会会長を、昭和四二年からは約五年間最高裁判事を、退任後においては二期一〇年間国家公安委員もつとめられました。

「天下の士を友とす」と言いますが、先生の交友は広く深く、師と仰いだ菅 禮之助翁との師弟の交わりはもとより、池田勇人氏の法律顧問や大平正芳氏の後援会長も長いこと続けられ深い親交がありました。日光山輪王寺門跡の鈴木常俊師、長野善光寺大勧進貫主の石塚慈侃師の高僧の方々も葬儀に参じられました。

『法曹三国志』（岩田春之助氏著）に、法曹界は「松本の陰徳に負うところが多い」と書かれておりますが、先生が法曹界のお役に立つことを何かしたこと、それ自体よりも、むしろ先生がそのような話を周囲に一言も話さぬ、その禅味に、私はより強く魅かれておりました。事務所に最後に出られた十二月二二日に先生は私を夕食に招び、『今にして判ってきたが、死は

坐禅の延長だよ』といわれました。それが先生との最後の会話になりました。私は先生との足かけ四〇年に及ぶ指導を得ながら何一つ応えられなかった慚愧の念にかられながら、霊前に弔辞を捧げました。

私が先生を尊敬するのは、その輝かしく見える経歴ではありません。人生に対する真摯な生き方でした。私にはその教えが咀嚼できず『ただ凄味を感じるのみ』と表現して弔辞を結ぶだけでした。

こよなく愛した第二東京弁護士会とその会員の諸先生から故人にお寄せ頂いた生前のご厚情に改めて御礼を申し上げる次第であります。

平成八年一月三一日。

『注記』

一月十七日の御葬儀の葬儀委員長の大役を務められました畠山先生が、御葬儀直後に執筆され、第二東京弁護士会機関紙に掲載された追悼文ですが、松本先輩の法曹界でのご活躍、最晩年の生き方、御葬儀の様子などがよく示されておりますので、畠山先生のお許しを得て、ここに転載させて頂きました。

（編集者）

座談会

『松本先輩の酉松会関係遺品を　囲んで　故人を偲ぶ』

日　時　　平成八年九月九日　午後一時～四時半

場　所　　如水会館　十四階

出席者　　村井恒典
　　岩崎寛貞
　　金井雄吾
　　折下　章
　　奥村一郎
　　加藤　省
　　中路　信

松本さんは、戦前、戦後の蹴球部・西松会関係の記録資料を大切に保存して置いて下さいました。女婿の石綿君によれば《宝物のようにして》文筥に残しておかれたそうです。　わが部の貴重な歴史記録であり、今後の保存方法のご相談も含め、戦前のＯＢにお集まり願って、遺品を囲んでの座談会をして頂いた。話は数時間に及びなお尽きることがない感じであったが、その抄録をここに記載します。

《部誌》について

中路　御遺族から遺品を拝借して拝見してきましたが、ご配布の《目録》の通り、部誌、部報、練習日誌などの部関係の記録と、酉松会会員の松本さん宛の書信類に大別されていますが、まず、部関係資料のお話しから始めたいと思います。

松本さんの部誌への寄稿は、戦前では部誌《蹴球》六号の《荒井文雄君を悼む》だけですが、戦前の部誌編集の考え方は如何だったのでしょうか。

村井　部誌《蹴球》は、昭和九年に前年三部で優勝してこれから関東リーグ一部昇格を目指して戦うのだという時期に創刊された。その頃の編集方針は、部員の意気込み感想や、部員の部生活の所感を記載するのが主体であった。従って先輩から寄稿を求めることはあまり考えなかったように思う。しかし、創刊号は田島（昭和12年卒）が大変努力して、川村通さん（大正15年卒）の《蹴球團時代》や渡辺弘さん（昭和5年卒）の《蹴球部の今昔》などの先輩寄稿を頂いて、それまでの部の歴史・戦績の記録を残した。田島は、ご病気中の渡辺さんのところに何度も通って編集の指導をしてもらったようだ。

中路　創刊号は内容も装丁も立派な芸術品ですね。我々の頃は、部誌の存在も知らず、練習日誌をつけるだけでしたが、それさえも卒業後行方が不明で六十年史を作る時に苦労

しました。六十年史で初めて部誌の存在を知り、今回遺品の中にあった昭和二十六年の部誌《蹴球》戦後復刊一号を拝見して、戦前のＯＢの部誌に対する思いの深さを知り、追悼文集の中に、二階堂晴三さんの《復刊のことば》を転載することにしました。我々の頃に部誌編集を通じて記録の保存をする《良き伝統》を中断させてしまったのかと、申し訳ない気持ちです。戦前のＯＢの記録の保存の考え方は素晴らしいものですね。

村井　当時は、記録を残して後に伝えて行くことが常識だったからね。部誌が部員の意識の向上と親睦に果たした役割は非常に大きかったね。それが戦績につながったと思うね。編集担当者は皆と同じ練習をしながらだったから、大変だったようだが。

折下　部員で中々原稿を出してくれない人もいて、それが一番難問であったようだが、それでも皆よく書いてくれたと思う。我々の頃は戦争の影響で物資不足で紙も少なくなり、印刷も遅れた。

奥村　昭和十七年と十八年に原稿募集したものは、物資不足と、部員の出陣、勤労動員などの混乱の中で、ついに印刷出来なくなってしまった。幸いにも、原稿が戦災に遭わずに各部員や吉澤さんの手を経て、村井さんの所に残っていることが判り、六十年史作成

の昭和五十七年に部誌《蹴球　九号》として印刷発行した。

中路　戦後は、復刊一号の後は、昭和二十八年四月に酉松会会報として部誌と同様なものが発行されていますが、その後はずっと発行されておらず、昭和四十年代に《パスケル》の名称で部誌が発行されたそうですが、これも中断し、六十年代になって《部誌》が発行されているようです。私は、これらを現役から送ってもらった記憶がないのですが、遺品の中にもなく、松本さんが六十二年の《部誌》に寄稿した原稿の控だけがが残っていましたので、これを松本さんの文章の一つとして、この追悼文集に転載しました。

戦前の部誌は、遺品から写真版のコピーを何部か作って、学生にも是非読んで貰いたいと思います。

村井　是非、そうして欲しいね。

中路　村井さんは一号から九号までお持ちですが、他の先輩方は如何でしょうか。

岩崎　何度も引っ越したので全然持っていない。

折下　私も持ってない。

金井　全部ではないが何号かは持っている。

奥村　九号の編集をする時に、村井さんからお借りして一式コピーし、それを手持ちしている。

中路　部誌二号の部の収支表を見ると、総予算の約一割（約千円に対して百円）を部誌作成予算としています。六号《荒井兄追悼号》では百部刊行して二百円かかり、先輩方から実費として一部二円五十銭を申し受けたいとの願い書の記録もありました。戦前先輩方の部誌に対する考え方、経理の考え方がしっかりしているのに、さすがに商大生と感心しました。我々の頃は、全く余裕がない時代だったので羨ましく思いました。

加藤　戦前の先輩は簿記の勉強をしなかったり、貸借対照表は出来なくても、収支計算位は楽にこなしたからね。

《部報》について

中路　遺品の中には部誌の外にガリ版刷りの《部報》というものがありました。一番古いのは昭和十四年の《六号》ですが、これはいつ頃から出したものでしょうか。部での出来事や、試合戦績、先輩の動静などが記録されています。

村井　私は十三年卒業だが、記憶にない。そのずっと前から大学ノートに練習日誌をつけていたのはよく覚えている。十三年春頃から出したのかな。

中路　六号には長瀬さんの三周忌に本科生十二名が焼香の記事があり、次は十五年五月の《九号》その次は十五年九月の《十一号》その後のもの三つの号が残されています。

村井　長瀬が亡くなったのが十二年だから、年度は合っているね。マネージャーから先輩に出していたのだろうか。

加藤　部誌との関連はどうなってるのだろう。

中路　戦績は重なっていますが、記事の内容は部誌とは全く違っています。上田貞次郎学長の大学葬への参列とか、本科生の松本邸への招待、試合応援のＯＢの名前の記録、ＯＢの出征、陸・海軍経理学校入学など動静の記事があり、先輩との繋がりが主体になっているように見受けられます。号数の番号から見ると年に何回か発行していたようです。蹴球部・西松会の記録が、練習日誌・部報・部誌の三本立てになっていたのではないでしょうか。

村井　一橋講堂での上田学長の葬儀に私も出たことをよく憶えている。見習士官の時だったので、学生時代に絞られた軍事教練の准尉が挙手の礼で迎えてくれたので、こそばゆい気がしたからだ。軍隊の階級制度が実感された初めての経験だった。

折下　私は一橋ではなく多摩墓地での葬儀に行った記憶がある。

中路　十一号に、岩崎さんのご母堂が夏の合宿にお菓子を持って陣中見舞いをされたとの記事があります。卒業された後のことですね。

岩崎　知らなかったなあ。この頃は召集されて満州に行っていた時だからね。

中路　同じ号に、後藤虎雄さんが出征後に病を得て旭川の原隊で療養中、早野、荒川、折下、鈴木（英二）、片山の五部員が北海道旅行をしてお見舞いした記事があります。また、　部報と一緒に、折下さんの書かれた部誌原稿募集の依頼状が残されています。ガリ版刷りですが名筆名文ですね。時代相がよくわかります。

折下　部誌と照合すると、これは部誌八号の原稿募集だね。八号の、後藤さんの退院後の見舞の礼をのべた先輩寄稿の宛て先が、私の名宛になっている。

中路　部報類は全部ガリ版刷りですが、謄写機や鉄筆は部の資産として受け継がれ部員が鉄筆を切っていたのでしょうか。

折下　そうでしたよ。後に引き継いだはずだが。

加藤　戦争末期か戦後に、部室の引っ越しなどで行方が不明になったものと思います。

中路　戦後の部報、部誌類はガリ版ですが字体からみると、外注のようですね。

《練習日誌》について

中路　遺品の中に、昭和17年と18年の予科の練習日誌が残されていますが、これはどんな経緯からなのでしょうか。

村井　練習日誌は、ずっと纏めて学生間で引き継いで来たのは分かっているのだが、戦争中、何処かで戦災に遭い焼失したらしい。この二冊だけが、奇跡的に残っていた訳だ。

加藤　私の家も、戦災で全焼しましたから、出征する学生が引き継ぐべき学生が居ないので松本さんに預けて行ったものだろうと思います。

中路　この練習日誌を見ると、この当時は本科と予科とで別々につけていたようで、瀬藤さんの筆で「久しぶりに予科の練習日誌を見たが云々・・」とあり、本科生が予科生部員の気持を把握する資料としていたようですね。中に本科生は《野営》に行ったとありましたが、これは何ですか。合宿でもなさそうですが。

奥村　軍事教練の本格的野営で、習志野などの演習場に出掛けたものだよ。

中路　練習日誌はこの二冊だけで、部報も番号が飛び飛びですが、松本さんが後世に残す価値があると思われたもののみを整理して大切に遺された様に思えてなりません。このままでは紙質が悪くボロボロになりますので、一旦コピーをとりそれから写真版コピー

を取ることを考えたいと思います。

村井　費用のこともあるだろうが、是非検討して欲しい。

加藤　部誌作成や部の資料保存については、サッカー部、酉松会の年度予算で決めておくことにしたいと思います。

《書信》類について

中路　次は、書信類ですが、大部分は酉松会会員が戦地から出されたものですが、検閲があったにも拘わらず、部の事への思いだけでなく、会員同士の消息など伝えあっています。留守家族からのものもあります。松本さんがこれ程沢山の手紙を大事にとって置かれたのは、その頃松本さんが如何に会員の動静と、武運に気を遣っていたかを示すものだと思います。

ここに村井さんからのものも残されています。

村井　どうせ、〇〇から〇〇へなどと決まり文句のもので見なくともわかるように思うが。

中路　荒井さんのことが書いてあったようですが。

村井　どれどれ、・・・これは荒井が陣歿した《咸寧》の地に行った時、出したものだ。

中路　岩崎さんのも二通あります。一通は大掛さんと一緒に出したものようですが、岩崎さんは戦地はどちらだつたのでしょうか。

岩崎　私は昭和十四年に卒業して、三菱商事に入社して名古屋支店に勤務したが、翌年一月に召集で満州の軍隊に入った。その後、大東亜戦争になり、部隊と共にマレー作戦に参加後ジャワに転戦した。昭和十九年ビルマの飛行部隊に転属となりラングーンに行き、インパール作戦などに参加していた。陸軍の主計中尉だつたので、現地の戦闘機が足りなくなって、補給を受けるべくその年の十二月に日本に一時帰国した。しかし、航空本部などと折衝したが、その頃国内にも百数十機位しかなく思うような補給も受けられず、これでは敗戦必至だなと覚悟して現地に戻った。

この手紙は、その時重爆機に乗って日立から出発し、鹿児島の新田原の飛行場で燃料補給に立寄った時に出したものです。

中路　大掛さんと一緒の手紙によると、岩崎さんは松本さんのお世話で結婚され、大掛さんはそれを大変羨み、松本さんに自分にもと、両親にお願いするよう頼んだ手紙のように見受けられましたが、（大掛さんの手紙は松本さん宛ではなく大掛さんの両親宛のもの）岩崎さんのご結婚は何年ですか。

岩崎　昭和二十年一月です。

飛行機を取りに帰国した時に、老齢になっていたおふくろが心配して、松本さんの所に行き、嫁の世話を頼んだのです。

松本さんは、親友の石戸氏の娘で、東大の佐々内科でインターンをしていた今の家内を世話してくれたのです。一月に急遽結婚して二月には南方に戻ることになったのです。何処の現地に行くかもわからない男に、よく嫁に出してくれたものだし、松本さんも、よくぞお世話して下さり、おふくろを安心させてくれたと感謝しています。

村井　あの頃は、若い男は皆外地だったからなあ。

奥村　石戸さんとは、先輩の石戸長九郎さんのことですか。

岩崎　そうです。

奥村　それでは、松本さんの座禅のお仲間だったわけですね。松本さんが書かれた《紫山老師の想い出》によると、松本さんは昭和八年頃から、石戸さんを先達として浜松の方広寺に参禅に盛んに通っていたようですね。石戸さんは如意団だったのですか。

岩崎　よく知らないが、円覚寺にも行っていたようだから、そうだと思う。

紫山老師は石戸の家に何度も来たことがあり、その縁であったわけだ。

戦後、名古屋に20年も勤務していたから、家内と一緒に浜松に行き、山歩きをして道に迷っていたところ、突然方広寺の門前に出て、二人で、「ここが松本さんや、じいさんが通っていた所か」と感心したことがある。

中路　そうすると、大掛さんと一緒の手紙は、新田原からのものの後ですね。

普通の郵便によるものではないようですが。

岩崎　二十年二月、新田原から台湾に飛び、そこからサイゴンに行ったのです。商事のサイゴン支店に大掛さんが勤務していたので訪ねてみたのです。その時に二人で手紙を書き、この封筒に入れて日本に帰る私送便に託送したもののようです。それを大掛さんのご両親が松本さんの所に持参したのでしょう。

奥村　岩崎さんは、主計中尉とは恰好よく、それに強運でしたね。

岩崎　この手紙によると、大掛さんはシンガポールにも行ったようですね。

村井　戦争中大掛がシンガポールに行ったのは知らなかった。二階堂（謹二）さんがシンガポール勤務だったのは確かだ。

中路　遺品の中に、二階堂謹二さんがシンガポールから松本さん宛に出した手紙があります。バンコック（盤谷）から転任してきた柴野書記官（商大昭和二年卒）と会った時の

もので、戦時下でも、健康のためゴルフをしていたようです。達筆な手紙ですね。

村井　大掛は十四年に陸軍経理学校に行き、膝と足首とを傷めたとかで兵役免除となった。それで、その後度々学校に行って後輩の面倒を見ていたようだ。その時はボールも蹴っていたとのことだから不思議な話だ。

金井　私が学生の時は見ていませんね。

村井　松本さんのお供をして、箱根の温泉に現役を連れて行ったこともあるようだ。

折下　箱根芦ノ湯の松坂屋旅館に、本科生が招かれて行ったのです。私も行きましたが、私が、行っていない時の写真が残っていますから、年度を変えて二・三回行っているのではないでしょうか。

村井　青木が、病気療養中なのに招かれたと大変感激していたね。

金井　私は箱根には行ってない、自分の時にはなかったと思う。

中路　部誌何号かに、金井さんが先輩寄稿として、この旅行について後輩が羨ましいと書いたようですが。

折下　昭和十六年の夏からですね。ここにある部誌八号に、金井さんの文章でこう書いてありますよ。・・・「本日は松本大先輩、二階堂（謹二）、大掛と先輩の中枢と共に本三、

一同打揃って箱根行と洒落込んでいられる御便り頂き、懐かしいやら、嬉しい、妬ましいやら、いやはや萬感交々胸に満ちて、長い間繪葉書に見惚れて、会社から帰宅して飯を食ふのも（小生にとっては大切ですぞ）忘れそうでした。大先輩方と飲み且つ食ひ、大いに胸襟を開いて語られ、何物にも代へ難い貴い収穫を得られ、今後の、又一生の確固たる方針を建てられた事と思ひます。松本先輩の有難味は本三で知り、一生忘れられないものですが、其の大きさは薄気味悪い程で底が知られず、我々小輩の到底圖り知り得ざるところです。・・・・・・・・兎に角之だけ人格者を集めた先輩の精粋と共に飲み明かされたとは、小生等聊か以上にヒガミとする所です。人と所と時を得られた諸兄の幸福たるや、正に空前絶後の物でせう。秋の前祝として之以上の物はありません。お目出度う！」・・・・・・・・・

金井　私は、商事の大阪支店勤務で、東京には居なかったからなぁー。

村井　箱根へは松本さんの奥様も連れて行かれたのだろうか。

折下　行かれていませんよ。旅館の勘定書だけが奥様に廻されて、その支払が大変で奥様は大変ご苦労なさったと、松本さんがお亡くなりになった後でお聞きしましたよ。

奥村　先日、軽井沢で奥様に聞いた話では、松本さんは大酒は飲むし、ご帰宅はいつも午

前様で、箱根の旅館ばかりでなく支払いはいつも奥様で家計のやりくりはいつも火の車だったとのことでしたよ。

「でも、結婚する時に《友達を大事にして呉れ》と言われていましたから、笑顔で辛抱を続けて来て本当に良かったと思いますよ」ともおっしゃていました。

宮崎一雄さんとは、とにかくよく飲んでいたとのことでした。

折下　あの頃は、弁護士としてはまだ花岡事務所に所属しておられた頃で、収入も多くなかったでしょうから、学生で世間をよく知らなかったとは言え、よくぞ面倒を見て頂いたものと頭が下がります。

村井　昭和十二年本科三年の時、本三、六人揃って西荻南のお宅に招ばれたが、あの頃は松本さんは新婚早々ではなかったかな。正月十五日の新年会を始められたのは十四・五年頃からではなかったろうか。

奥村　ご結婚はもう少し早かったようですよ。貞子さんが九年生まれ、正路さんが十一年とお聞きしてますから。西荻南の家の新築がそのころだったのでないですか。

金井　我々が西荻南のお宅で、スキヤキでどんちゃん騒ぎをしたころには、お子様たちも大きくなっていましたよ。

村井　それなら、私の思い違いかもしれない。しかし、あの頃の松本さんは血気盛んで、最も集中して蹴球部を支援して下さった時代だったのではないだろうか。

折下　サッカーを一生懸命やる学生が可愛ゆくてたまらぬお気持で、この連中がいずれ国を支える人間になるのを信じて疑わぬお気持であられたようです。我々はオーバーエスチメートされてしまった感じもあるが。

中路　遺品の中に、昭和十八年一月元旦日付の《血判書》があります。村木、居川、山田さん達が卒業された直後のものと思われますが、《我が生気の総てを君に捧ぐ》《東京商科大学　ア式蹴球部萬歳》と墨書し、この三人の他に大掛さんと、松本さんが署名されています。はじめアチコチに《しみ》みたいな汚れがあると思っていたら血判だとわかりました。松本さんも指を小刀で切り判を捺しておられるようです。

村井　相当に《アルコール》が入っているような字だね。萬歳の《歳の字》がわからなくなっていたようだ。誰の字だろう。大掛かな。

金井　誰に捧げるというのかな、趣旨がようわからんが。後輩に対するものかな。

折下　蹴球部頑張れ！との趣旨でしょう。

村井　全身全霊をサッカー部に捧げよ、との意味だろう。長瀬は《サッカー部と恋愛せよ》

とよく言っていたが、時代環境の差かな。これも松本さんのお宅で書いたものだろうか。

中路　半紙二枚を継ぎ合わせて書いてありますから、おそらくお宅で飲んでいて、興が乗って書いたもののように思われます。

我々の世代は習字をならう時代に筆も墨も紙も不足した時代で、毛筆は苦手の人が多いのですが、戦前の先輩は皆達筆ですね。ここに、二階堂晴三さんが巻紙に書かれた手紙が残されていますが、書道の展覧会に出してもいいような達筆ですね。

村井　確かに、晴坊は字もうまいね。だが、巻紙の書法からすると少し外れている。杉山三郊先生の評点だと減点されるだろう。商大では予科二年まで習字が正課だった。晴坊は習字の授業をサボッてサッカーやっていたのではないかな。

中路　浅枝さん、荒井さん、森田さんの毛筆履歴書も遺品の中にありますが、これも素晴らしい楷書ですね。

村井　うーん。皆しっかり書いてあるね。こちらは三郊先生の教えた通りだ。大学は卒業見込とはせずに「学士試験合格ノ見込」と書くのだと教えられたな。

中路　書信は、昭和十年代卒業のＯＢのほとんど全員からのものが残されています。通数の多いのは、二階堂晴三さんと後藤虎雄さんからのものです。

金井　後藤さんは、松本さんにお世話になって古河に行かれたのだから、縁が深く、当然のことだろうな。

岩崎　字がうまい奴は、よく手紙を書くね。

中路　岩崎さんと同期で戦死された小西さんの手紙もありますよ。小説を書くつもりと、習作のようなものが入っていますよ。

金井　小西さんは、病気（痔疾）で一年留年されたが、兎に角サッカーがうまかったね。歴代商大サッカー部員で他に誇れるのは、小西さんと松浦位だと思うね。

村井　相手との間の取り方が天才的にうまかったね。ニューブリテンで戦死してしまったのは残念だったね。

中路　戦死された荒井さん、米山さんのご遺族からのお手紙もありましたね。皆さん家の人にも松本さんのことを話して出征されたのでしょうね。

ここに、川村さんの手紙も残されています。山内正瞭先生の墨書の川村さん宛の手紙を入れたものですが、松本さんと川村さんの交友の濃さを窺わせる素晴らしい手紙ですね。

村井　松本さんは山内正瞭先生のゼミナールだったのだね。

中路　そうです。川村さんとご一緒に山内ゼミの俊英であったようですね。手紙は昭和十九年十月のもののようですが、ご三人の師弟愛が偲ばれるものです。角田さんがこの文集に、松本さんのお世話で同期生五人揃って山内正瞭先生のゼミに入れていただいた心暖まる話を書かれていますが、先生のこの二人のゼミナリステンに寄せる信頼は絶大であったようですね。

折下　山内正瞭先生のお嬢さんが、亡くなられた吉田富彦さんの奥様ですね。

村井　昔はゼミは大抵一週一回午後三時から五時迄で、この日だけは練習を休まねばならなかったから、五人がバラバラではチームとしての練習が出来ないとして、五人揃って生死を共にする決心をしたものだろう。

中路　角田さんら五人は、ゼミは渋谷の先生宅で夜の八時開始にして頂いたようですね。川村さんの手紙によると、この頃、松本さんは北九州で二度も空襲に遭われたようですね。出張中ですかね。

村井　弁護士として依頼人の仕事をしていた時だろうね。

中路　この手紙で松本さんを《窓牛》大兄として号で宛名を書いています。山内先生は、川村賢臺　侍曹と宛名書きしています。明治生まれの人達らしい奥ゆかしさを感じます。

川村さんの手紙は、当時の世相を鋭く衝いた歴史的記録でもあるように見受けられます。

村井　書信類も、ご遺族とご相談して保存を検討して欲しいね。

《弁護士としての松本さん》について

村井　それでは、弁護士としての松本さんについて二・三思い出話をしよう。

一つは、昭和十一年頃、荒井、鈴木（彰）と私の三人で松本さんの事務所に行ったことがあった。松本さんの机の上にY本が山のように積まれてあったので、吃驚して、「松本さんにこんなご趣味があったのですか」と聞いたら、「馬鹿言え、これは裁判の為の資料だ。世の中にこんなに沢山の本があるのに、何故自分の出版社だけが、罪になるのかと弁護を依頼して来た人があるのだ。その研究資料だ。君達、読みたければ、シーズンオフになってから来い。」と言われた。結局その後、誰も行かなかったけどね。弁護人はどんな依頼人からであっても、依頼人のために徹底的に検討して《法》的に争うのだという姿勢だったようだね。

もう一つは、西松会の名誉のためにオフレコにしたいくらいだが、敢えて言うと、例の

ロッキード事件で、国会の全野党が共同提出した《田中角栄》議員辞職勧告決議案が衆院議運委で審議された時に、松本さんが参考人として出席した時のことだ。「田中の擁護をするのは怪しからん」と《一西松会々員》と匿名の手紙を出した者がおり、司法の仕組みや憲法解釈の問題を知らぬことは差し置いても、匿名で西松会々員を名乗ったことについて、「卑怯千万だ」と激怒されておられたね。

その話を聞かされた時に、「田中は無罪なのでしょうか」とそっと聞いてみたら、「それは、わからん。しかし、有罪とする確たる証拠は今のところないのだよ」と言っておられた。弁護士とは、こういう風に物をいうものかと感心したが、匿名の手紙には心底怒っておられたね。

加藤　最近の若い人達で世間の風潮に、左右される者が多いからなぁ。

金井　西松会会員で匿名で先輩にものを言うなど、考えられないがなあ。

中路　松本さんは昔、相撲の《天龍事件》に深く係わったようですが。この事件はどんな事件だったのでしょうか。

村井　あれは時期はよく覚えてないが、昭和六・七年頃だったかな。当時は日本相撲協会では、出羽一門全盛時代で、番付の西方全員が出羽海部屋の力士で占められていた。その一門

の中から、協会や部屋のあまりにも非合理的なしきたりや、力士の扱いに反撥して待遇改善と会計の明朗化を要求する動きが出た。その旗頭が天龍だった。結局横綱の常ノ花や伸び盛りの出羽一門の大関武蔵山の数人だけが残って、後は大抵天龍と行動を共にしたのではなかったかな。

折下　関西に別の相撲協会を作ろうとしたようだったね。

村井　協会と出羽海部屋では、興業が成り立たなくなってしまうから、興行師の親分の《佃政》を使い天龍らを部屋に戻させることを図った。天龍はこれに屈せず、別興業を暫く続けていたと思う。松本さんは、天龍の近代的合理性をもつ考え方と相撲への取組みが真摯だったことを愛して、他のスポーツ愛好家などと一緒に熱心に後援していたようだ。そのため、親分の調停の席に天龍の隣に同席したり、天龍の興業地に暴力団の妨害が入った時には、天龍の助力依頼に応じて、懐にドスを呑んだ暴力団員と直接対峙したこともあったようだ。

松本さんらしい熱気と度胸を示す事件だったと思う。

あの頃、松本さんは弁護士の傍ら、府立一商の先生をしたり、如水会の理事をやったり、多方面で活躍されていたようだ。

奥村　府立一商には昭和四年から十六年まで先生をやられていたようです。

岩崎　一商出身の誰かに聞いたら、松本さんは、でんと座っていて何も教えていなかったとのことだが。

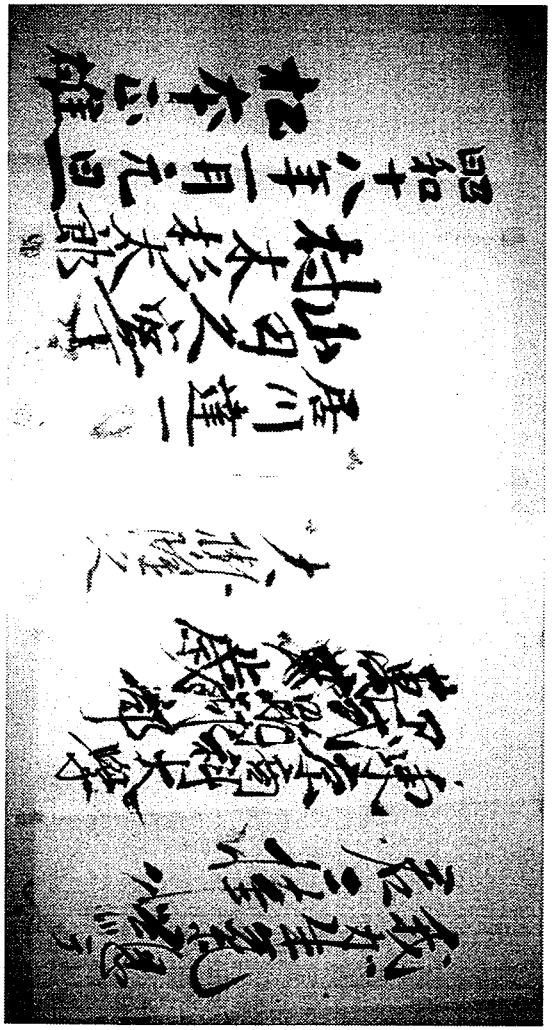
奥村　初めの頃は、校長排斥運動の応援をしたり、簿記は自分もよく解らないから一緒に勉強しようと生徒に言ったり、型破りの先生であったようですよ。公民という科目で法律を教えていたようですが、その講義録が素晴らしいもので、その頃の生徒で商社に入った者が、お陰で大学出よりも自分の方がよく商法を知っていたと言っていた人がいましたよ。

折下　弁護士をしながらだから、特定の授業だけでクラス担任はなかったのでしょうね。

奥村　松本さんが書かれた《法曹としての歩み》の本の中に、若い人への注文として、《営利を志すならば裁判官や検察官はもちろんのこと、弁護士も志望すべきではない》といっておられます。弁護士として相当に堅い信念をお持ちだったようですね。

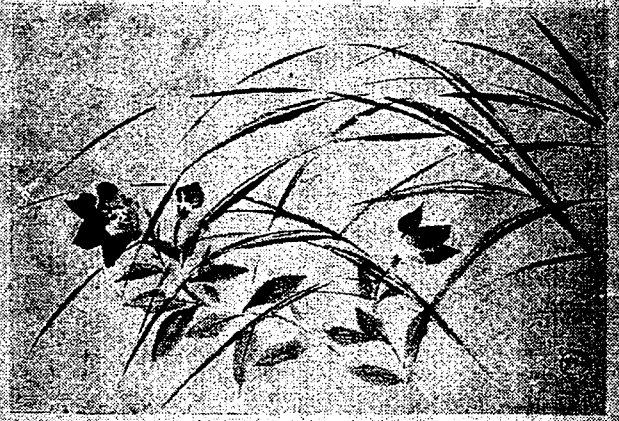
村井　キャプテン　オブ　インダストリーの世界ではないという訳だ。

座談会は、長瀬さんや多くの物故会員の話、今後の酉松会の運営、母校サッカー部の強化策など多岐に亙って延々と続きましたが、この抄録からは割愛させていただきました。　以上。



蹴　球

創刊號



長瀬先生謝恩記念として

August——1934

東京商科大學蹴球部誌

松本正雄先輩の『年譜』

年　譜

年　月　日	記　　事	西　暦
明治三四年一二月六日	松本家一一代の当主父松本求　母志つをの長男として出生	一九〇一
	（松本家は、天正年間加藤清正が四国遠征以来の槍一筋の伊豫松山藩士であった）	
大正　三年　四月	神奈川県立第一横浜中学校入学	一九一四
大正　八年　三月	神奈川県立第一横浜中学校（旧制）卒業	一九一九
	（現・希望丘高校）	
大正　九年　四月	東京商科大学予科入学	一九二〇
大正　十年	東京商大《蹴球團》創設に参加　早稲田学院と試合	一九二一
大正一二年　三月	東京商科大学予科卒業	一九二三
同　年　九月一日	《関東大震災　商大校舎全焼》	
大正一五年　三月	東京商科大学（現・一橋大学）卒業	一九二六

年月日	記事	西暦
大正一五年　四月	古河電気工業株式会社入社	一九二六
昭和　三年	右会社　退社	一九二八
昭和　四年　三月	東京府立第一商業学校　講師就任（昭和一六年迄）	一九二九
同　年	高等文官試験司法科合格	一九二九
昭和　五年　五月	弁護士名簿登録　第二東京弁護士会入会	一九三〇
	（花岡敏夫法律事務所所属）	
昭和　六年一〇月	東京商大予科及び専門部の廃止案、政府提出をキッカケに一橋学生運動起こる。所謂《籠城事件》である。少壮気鋭の弁護士として逮捕学生の救出等に奔走。政府の廃止案撤回により、事態解決。	一九三一
昭和　七年　一月	日本相撲協会、出羽海部屋の旧弊打破に力士“天龍”等が立ち上がり独立を図る。所謂《天龍事件》である。スポーツ界その他有志と協力して天龍を後援、暴力排除に	一九三二

	警視庁と交渉すると共に、直接暴力団員等と対決する。	
同　年一一月	“杉本たま”さんと結婚。	一九三二
昭和　八年	浜松の方広寺に参禅に通う。紫山老師に師事。（昭和一八年迄）	一九三三
昭和　九年　三月	長女“貞子”さん誕生。	一九三四
同　年　八月	商大ア式蹴球部　部誌《蹴球》創刊。	一九三四
同　年一一月	東京商大ア式蹴球部　関東大学二部リーグ全勝優勝一部リーグ昇格決定。	一九三四
同　年一二月	社団法人如水会理事就任。（昭和一一年一一月迄）	一九三四
昭和一一年一一月	長男“正路”さん誕生。	一九三六
昭和一二年	法学博士花岡敏夫弁護士逝去。事務所を引き継ぐ。	一九三七
昭和一三年	商大ア式蹴球部ＯＢ会を酉松会（ゆうしょうかい）と命名す。撰名者は、大正十五年卒　川村通氏。	一九三八
昭和一四年　一月	松本邸での一月十五日の酉松会新年会始る。	一九三九
昭和一五年	商大ア式蹴球部　関東大学一部リーグで優勝を逸す。（同率二位）	一九四〇

年月日	記事	西暦
昭和一六年　八月	箱根芦ノ湯松坂屋旅館に本科部員招待。	一九四一
昭和一七年一二月	次女“信子”さん誕生。	一九四二
昭和一八年一月三一日	鎌倉鶴岡八幡宮へ出征部員の武運長久祈願。	一九四三
昭和二〇年	西銀座の花岡法律事務所、戦災で焼失。	一九四五
昭和二一年	松本正雄法律事務所を開設。	一九四六
昭和二四年　四月	第二東京弁護士会副会長就任。（任期一年）	一九四九
昭和二五年　一月	有楽町スバル興業ビルに事務所開設	一九五〇
同　年　四月	日本弁護士連合会理事就任。（任期一年）	
同　年　八月	京二館ビルに移転	
昭和二六年　四月	日本弁護士連合会司法修習委員長就任。（任期一年）	一九五一
昭和二六年　八月	一橋大学ア式蹴球部部誌《蹴球》戦後復刊一号刊行	一九五一
昭和二八年　四月	日本弁護士連合会司法制度調査会委員長就任。（任期一年）	一九五三

年月日	記事	西暦
昭和二九年　四月	第二東京弁護士会常議員会議長就任。（任期一年）	一九五四
昭和三一年　四月	第二東京弁護士会会長就任。（任期一年）	一九五六
同　年　四月	日本弁護士連合会副会長就任。（任期一年）	
同　年一二月	法制審議会委員就任。（任期一年）	
昭和三四年　五月	日本弁護士連合会特別研修委員長就任。（任期一年）	一九五九
昭和三五年　四月	第二東京弁護士会司法修習委員長就任。（任期一年）	一九六〇
昭和三六年一〇月	法制審議会商法部会委員就任。（昭和三八年十月迄）	一九六一
昭和三七年　四月	第二東京弁護士会弁護士推薦委員会委員長就任。（任期一年）	一九六二
同　年　七月	松本正雄法律事務所　丸の内の現所在地へ移る。	一九六二
昭和三八年　四月	日本弁護士連合会司法制度調査会委員長就任。（任期一年）	一九六三
昭和四〇年　四月	日本弁護士連合会人権擁護委員長就任。（任期一年）	一九六五
同　年一二月	日本弁護士連合会臨司意見対策委員長就任。	
昭和四二年　一月	最高裁判所　判事任官。	一九六七

年月日	記事	西暦
昭和四二年　一月	弁護士登録　取消	
同　年　同月	法律事務所　丸の内総合法律事務所と改称。	
昭和四六年一二月	最高裁判所　判事退官。	一九七一
昭和四七年　一月	弁護士　再登録	一九七二
同　年　四月	勲一等瑞宝章　授与される。	一九七二
同　年　六月	社団法人如水会理事就任。（二回目、任期二年）	
同　年　九月	国家公安委員就任。（昭和五七年九月迄）	一九七二
昭和四九年　六月	社団法人如水会常務理事就任。（昭和五一年五月迄）	一九七四
昭和五〇年　一月	日光輪王寺東照宮係争　最高裁上告審	一九七五
	輪王寺側代理人団長引受。	
昭和五六年一〇月	松本杯争奪西松会ゴルフコンペ第一回大会。	一九八一
	於川崎国際ＣＣ　八十歳の時スコア一三二（18Ｈ）	
昭和五七年　二月	《一橋大学ア式蹴球部六十年史》刊行。	一九八二

同　年　九月	酉松会会長として「巻頭の辞」を寄稿。	
昭和五八年　五月	国家公安委員　任期満了により退任。	一九八二
	日光輪王寺東照宮係争　最高裁和解勧告を双方受入れ、和解成立。明治四年の《神仏分離令》以来の《日光百年戦争》を解決。	一九八三
同　年　三月	衆議院議院運営委員会に自民党推薦の参考人として出席、全野党が共同提出した《田中角栄議員辞職勧告決議案》に対し、現行憲法論からの意見陳述。	一九八三
平成　二年	酉松会会長を退く。（八十八歳の時）	一九九〇
平成　六年　三月	御夫妻で酉松会戦前会員を如水会館に招待。	一九九四
平成　七年一〇月	兼松講堂に於ける一橋大学百二十周年記念式典に出席。	一九九五
同　年　同月	如水会館における酉松会シニア会に出席。	
平成　八年一月四日	御自宅にて逝去。	
	法名　慈法院釋大雄	
同　年一月一七日	護国寺桂昌殿にて葬儀。	一九九六

編集後記

今年三月の酉松会総会に欠席したところ、村井会長から松本さん追悼文集の編集委員になってくれと電話を頂いてお受けはした。私が六十年史の時瀬藤さんの下で編集をやった実績の為であろうが、あれから齢もとって不精になり処理能力もガタ落ちで心配していた。中路君が実務一切を引き受けてくれ、就中全原稿をワープロしてくれたので、私は寄稿依頼や、酉松会幹事との編集会議で勝手なことを言い、校正などして何とか責を果たすことが出来た。

会員の追悼文を通読して気がついたことを二・三述べると、若い世代の会員に松本さんがサッカー部の創始者とする誤解があるやに見受けられたこと。これは、創始者としては兵藤世平治氏の名前を挙げ、松本さんは創設メンバーとするのが部史の正確な理解であろうと思う。大正末から昭和の初めには、部の主体は予科であり、本科生となるとたまに試合に出ることはあっても練習は止めていたようである。オール一橋チームとして本科三年まで練習も試合も続けたのは、豊田達治さんが初めてであったようである。昭和三年に予科入学の長瀬東作さんが、病身ながら蹴球を止めろと言う医者・家族の反対を押し切って本科卒業まで練習や試合に出て、《蹴球と恋愛する》として生活一切を蹴球部に棒げ部を指導し、一部リーグで戦えるチームに育成した。この精神に感応して数少ないＯＢを糾合して酉松会を組織し、全面的に後援されたのが創設メンバーの松本正雄さんと川村通さんであった。

人間一度に偉大になる訳ではない。紅顔のマーチャンであった松本正雄さんが、兵藤世平治氏に会い、川村、高橋氏らチームメートを得、司法試験に合格し、長瀬東作氏に感動し、参禅し人格を磨いて行ったのだ。弁護士の傍ら府立一商の先生をやって人間を育てる面白味を知ったことも大きいと、私は考えている。（教育者の畏友川村通氏との相互影響は素晴らしいの一語に尽きる）

偉大な人物の一生に、この文集の編集を通じて立ち会うことが出来たのは、誠に幸せであった。合掌

（奥村一郎）

酉松会らしい追悼文集にしたいといろいろ考えたが、結局この形になった。ご覧の通り松本大先輩が我々の為に大切に遺しておいて下さった資料のお陰である。お亡くなりになった後までも後輩に注がれる愛情を痛感した。この資料の中には単純な言葉では表現できない一橋サッカー精神の生成発展過程を示すものがぎっしりと詰まっている。故人ご自身の言葉にもこの史料を《百年の後までも伝えてほしい》とある。ご遺志に添ってこれを如何に有効に現役と将来の学生にまで伝えて行くかが我々の役目であろうと思う。この文集がそのキッカケになれば編集を担当させて頂いた者としてこれ以上の喜びはありません。

編集作業を通じて、会員各位の《心》に触れることが出来たし、遺品を通して若くして戦地や病で仆れられた先輩方の《心》も垣間見て、同じグランドで汗を流し、喜びや悔し涙を共にした者同士の連帯感を強く感ずることが出来た。世代や生死の境界を超えた連帯感が本物の伝統というものであろうと思った。

最後になって恐縮に存じますが、この文集を作るに当たって、御遺族の奥様、渡部英一郎様、石綿学様から特別寄稿を頂き、酉松会らしい家族的な雰囲気が出せましたことに厚く御礼申し上げます。

また、丸の内総合法律事務所の畠山弁護士からも特別寄稿を頂き、松本大先輩の法曹界でのご活躍の様子につき種々ご教示頂いたばかりでなく、事務所から文集製作費に多額の賛助金まで頂戴いたしました。松本大先輩の御遺徳に深く感謝しつつ厚く御礼申し上げるとともに、会員各位にご報告します。

（中路　信）

松本正雄先輩を偲ぶ

平成八年十二月一日発行［非売品］

発行者　酉松会

会長　村井恒典

東京都国立市中2-1　一橋大学内

編集責任者　奥村一郎・中路信

印刷・製本　株式会社　リョーイン

東京都港区芝5-34-6　新田町ビル

電話　03-3455-5519